
黒髪のアビス

めい

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

黒髪のアビス

【Nコード】

N9862W

【作者名】

めい

【あらすじ】

女勇者の資格を得たサツキは「界送り」を使って、異世界へと旅立つ。飛んだ先では、皇帝の花嫁候補！？ それって帰還不能イベですよ？ いや、還ります。還りますってば。コメディータッチの「異世界恋愛ファンタジー」 ここに見参！ なんちて。

1:「冒険の始まり」の巻

西暦4210年。2000年程前は、人類の中で化学が発達していたが、1500年程前に、魔法が発見されてからは、人類は日々、魔導と共に発展し続けた。そんな世界の、日本と呼ばれる国での出来事

ついに来た、ついに来た。この日をどんなに待ち望んでいたか。サツキは街中を疾走していた。顔なじみの武器屋の親父が声をかける。

「おい、サツキ。そんなに急いでどうした？」

ききーつと音がするくらいにサツキは足を止め、黒髪をなびかせ振り返りながら、手にしている一通の封書を片手にあげる。

「召喚よ、召喚！ 私、明日、勇者として召喚されるの！」

満面の笑顔のサツキに、武器屋の親父も笑顔を返した。

「そうか、そいつはめでてえなあ！ 還ってきたら祝いをしようじゃないか」

「だったら、あのサリヴァンの大剣を予約しとくね！ じゃ〜ね〜」

すごいスピードで走り去りながらのその言葉は、どんどん小さくなっていった。かすかに届くその声に、親父も手を振りながら大声で答えた。

「おう！ 頑張れよ！」

サツキは皇宮の門を通り、敷地内に建築される神殿へとたどり着いた。入り口に立っていた神官は、天皇直々の印が押されているその封書の日付が明日であることを確かめると、サツキを神殿内部へと引き入れた。

「こちらへ」

通された部屋は、円形状をしており、サツキが入ってきた扉以外に、11の扉がある。それぞれの扉の前には、弧を描いた3人がけの石製のベンチが中央を向いて置かれている。既に3人の人々が思い思いの場所に陣取っている。

その中のひとりに目を留めたサツキは言った。

「ヤヨイ姉！」

その声に顔をあげた少女は驚くほどサツキに似ている。それもそのはず、ヤヨイはサツキの2つ上の実の姉である。サツキの姿を確認したヤヨイは驚きの顔を見せた。戦闘ギルドの管轄する寮に入居

していたサツキにとって、正月以来、十ヶ月ぶりの再会である。

サツキたちの世界には、様々な学校が存在する。戦士学校、武闘学校、魔導士学院など、多岐にわたる。管轄しているのはギルドと呼ばれる機関で、大きく分けて、戦闘・武術・魔導・盗賊・道具・事務・自然・生活・魅惑の九つに分かれている。

大抵の国民は生活ギルドに登録し、そこで色々なスキルを会得し、資格を得る。資格を取ると、その資格ごとに、覚える技があり、それを習得するため、皆学んでいる。

漁師の資格を持っていると、**ハ技：大漁**を覚え、盗賊の資格を持っているれば**ハ技：鍵開け**を覚える。中には、これ何に使うんじやいという意味不明な技もあるが、考えようによっては使えるものだったりするので侮れない。

例えば、**ハ技：無表情**はカードゲームをするのに使用できるし、**ハ技：耳栓**は、奥さんの長い愚痴を聞いているときに使えるそう
だ。

それから、「召喚制度」というものがこの世界には存在する。

国民は10歳から30歳の間に、必ず1度は召喚されなければならない。
らない。

「界送り」の技術が発見された当初は、異世界に旅立ち、その技術や物資を持ち帰るといった目的が主だったのだが、近年では、諸外国との威信を示すことに意義があるといわれている。

そういった国同士のなんちゃらはよく分からないが、クエストを達成すると国から謝礼金を頂戴し、生活が潤うので、一般市民にとって、他の思惑とかはどうでもいいことなのである。

基本的に召喚を受けるのは、個人の自由が認められているのだが、その人物しか召喚内容に該当しない場合などに、国は「強制召喚状」を発行する。

通称「赤紙」といわれる召喚状は、それを受け取った人物は強制的に召喚されなければならないという、威力を持つ。明日妻が初めての出産だろうが、親が危篤だろうが、ついに実ったあの娘とのデートだろうが。

もしもそれを拒否したのなら、世界人民特殊機構 W H G に捕まり、拘束される、らしい。

久々に再会したにも関わらず、変わらぬ笑顔でヤヨイは言った。

「すごい偶然ねえ。まさかこんな所で会うとは」

サツキは頷いた。

「ヤヨイ姉、また召喚なの？ この間懲りたって言わなかった？」

「うん、そうなんだけどね、ほら」

と、ヤヨイは己の召喚状を見せてきた。その色は赤い色をしていた。

「うわ、赤紙」

「・・・ヤヨイ姉。相変わらず、運悪いね」

サツキは可哀相な人を見る目で、ヤヨイを見る。

「……………それは言わないで。で、サツキはどんなクエストなの？」

「聞く？ 聞いちゃう？ いや、むしろ聞いてくれ！ ふふふ」

じゃじゃじゃーんと口で効果音を言いながら、サツキは手にしていた召喚状をヤヨイの目の前に開いた。

『「異世界に出現した魔王を討伐せよ」

その文面にヤヨイは目を丸くした。

「う、わあ。大変じゃない。サツキ、大丈夫？」

ヤヨイは心配そうな目線をサツキに向ける。

「いやいや、女勇者ですから、わたし。ダイジョブ、ダイジョブ。で、ヤヨイ姉は、神子様？」

先日、ヤヨイはG異世界で見事に荒ぶる神を封印し、還ってきていたのは、まだ記憶に新しい。しかし、ヤヨイは、首を横に振りながら、

「ナ・イ・シヨ」

と、小首を傾げいった。

サツキは言葉を失った。そのあまりの可愛らしさに。なぜ、彼女が姉妹なのだろうか。ああ、知っている、知っている

とも。

毎年九月になると、国に送信される個人能力内容によって、サツキたちは称号を得るのだが、「天使の微笑み少女」の称号を得たヤヨイは、どこからどう見ても、可憐な乙女だ。

それに引き換え、サツキの得た称号は「竜巻爆裂少女」である。

来月の更新では、もう少しマシな称号を得たい。初対面の人には挨拶のとき必ずこの称号を口にしなければならぬので、結構重要なものだ。「竜巻爆裂少女のサツキ」アサギリです」というと、確実に皆の顔が固まる。今度こそ女の子らしい称号が欲しい、と思うサツキであった。

過去得た称号も「弾丸ファイター」や「サバイバルの猛者」など、散々である。初めて「少女」というワードが付いたことで、浮かれた昨年の自分を殴りに行きたい。

顔の造型は大差ないのに、なぜこんなにも雰囲気が違うのだろうか、一時期、ヤヨイも普通の思春期の女の子のように悩んだこともあったが、そこはサツキ。今はもう開き直っている。ヤヨイはヤヨイ。サツキはサツキだ、と。小さいことは気にしないのだ。大きいことも気にしないが。

『勇者』の資格への道のりは遠い。まず、『戦士』と『武闘家』の資格取ったのち、『聖騎士』の資格を取り、その上『僧侶』の資格を取り、更にいくつかのスキルを得て、晴れて『勇者』の資格を与えられるのだ。

なぜ、そのような手間をかけてまで『勇者』の資格を取ったのかというと、サツキがいわゆる「資格マニア」であったためだ。

ギルドの職員である魅惑のジヨセフィーヌがサツキに教えてくれた。たまにいろのよ、と。

資格取ることが楽しくって職に就かない人たち。そんな人たちを総称して、「資格マニア」と呼ぶそうだ。もしくは「チートな人」。サツキ自身も1年程前に自覚したばかりである。

さて、資格を取り続けていたらいつの間になっっていましたの『女勇者』となつたサツキだが、正直、夢ではあるのだ。世界を救う、正義の味方。なんと甘美な響きでせう。

だが、いかんせん需要はない。異世界でも魔王が現れ、世界が滅亡の危機に陥るのはそうそう無いらしい。

今まで2回異世界へと渡つたが、最初の依頼は「B異世界で迷子になった人の搜索」だったし、次の依頼は「E異世界A国で蔓延している伝染病を終息させること」であった。

どちらも1ヶ月もかからず還ってきたため、サツキにとっては、単なる旅行のようなもので終わってしまった。ぬるいクエストであった。遠い目。

「えー、サツキニアサギリ」

扉のひとつが開き、なんだか間延びした声で神官がサツキを呼んだ。「はい！」と手を挙げ、サツキはそちらに近づいていった。背中からヤヨイの「気をつけてね」という声に、にこりとひとつ頷きかえす。

彼女は意気揚々と扉の中へと入っていった。

さあ、冒険の始まりである！

2：「女勇者、召喚」の巻

(一体、これはどういうこと?)

サツキは考える。

神殿の扉を開けると、部屋の中央には魔方阵が存在していた。「界送り」専用の魔方阵である。その中央に立ち、ほどなくして、サツキは眩しい光に包まれ、目を開くとそこは別の空間だった。

足元を見ると、なにやら丸い石のテーブルのような祭壇の上のようだ。一段高いその祭壇の周りには4人のローブを着た男たちが、驚きを隠さない表情でサツキを見ている。

その格好からしてどうも、この世界の魔術師たちだと見受けられる。

サツキは彼らに対して、不敵の笑みを浮かべて迎えた。

うん、そこまではいい。予想通り。サツキは次のセリフを期待していた。

「おお、勇者様、どうかこの国をお救いください」

そして、

「あのにつくき魔王めを、お倒してください」

「さあ、我が王の元へ！」

みたいな？

それでもって、王の間とかいうところで、「そなたの名はなんと申す」「サツキと申します」「おお、サツキに幸あれ」なんていう

言葉で回復されたり。

しかし、彼らは口々ところ言った。

「おおー、伝説は本当だった・・・」

うん、これはいい。想定内。でもね、

「なんと可憐な姫君であろう」

「これで「首切り魔人の氷の君」も気に入ること間違いないであろう」

なんじゃそのセリフ。しかも、棒読み。こころなしか生暖か〜い目になってないか、しかも全員が、まん丸眼鏡っ子ってどうなのよ。サツキは自分の服装を見下ろす。うん、完璧な勇者ルック。銀色に輝く鎧は特注で出来た、いわゆる国宝タガールの作品よ。小手も盾も。防具に関して右に出るものはなっしていわれた、あのタガールよ。タガール。全シリーズ揃えたんだから。おかげで、財布の中身はすつからかんよ。背には大剣を背負っていますよ。うん、最初が肝心かと思ひまして。

それに、可憐って何？ ヤヨイ姉はここにはいないですよ？ ああ、厭味か、厭味なのか？ なんて勘繰っちゃいますよ、わたし。

ローブの男共は、もともと台本でもあったかのように、それぞれが、一言ずつ言い終えると、彼らは小さな円陣を作り、なにやらひそひそ声で話している。50畳はあるうか広い敷地の隅に固まるものだから、なんだか、中央にいる私、ちこつと淋しい。

あー、これが放置プレイってやつですかね、サツキ、初体験です。

「まさか、やっちゃいました？ 僕たち」

「いや、でも、黒髪黒目は合ってますし……」

「あゝ、どうでしょう。年も随分と若いような……」

「でも、このまま彼女連れてったら、確実に怒られちゃいますよ、特にロベルト殿に。いやですよ僕」

「えゝゝゝ、でもそれ僕らのせいですかねえ」

「あ、じゃあ、責任は文化庁長官のシャムール殿、というのはどうでしょう」

「あゝ、一応、これが遺跡ってことで？ それ無理ないっすか？」

「では、ここの整備というのはどうでしょう。ミツチエル殿率いる団体ですよ。あの市民団体に責任取ってもらいましょようよ」

「いやいや、あそこ怒らすとかなり、しつこいですよ。ここの警備担当ってどこでしたっけ？」

「えゝゝゝ、ここの警備、第一騎士団ですよ。なんだかんだで、こっちのせいにされちゃいますって」

どこかに責任を押し付けあっている模様の、ローブたちに、サツキはあくびを堪えた。なんだか長く続きそうだ。

すると中でも一番小柄なローブくんがサツキの方を振り返り言った。

「あ、と、一応伺いますね。あなたは どうしてここに呼ばれたのかを、理解されていますか？」

サツキは頷いた。

「えゝと、一応。あゝと、その、魔王討伐の依頼で、すよね？」

うん、ここで、はきはきと答えられるほど心臓強くないです。な

んか変だなあ〜ってことくらい疎い私でも分かります。
サツキの言葉にローブくんは首を横に振って言った。

「いいえ、あなたは皇帝の花嫁候補として召喚されたのです」

ほう、花嫁。花嫁とな？ はい、還ります。還らせてください。

資格マニアとしてはまだまだ取りたいスキルがあつたんじゃい、ボゲ。日本じゃ取りづらい武器「銃」スキルとか「カジノ」スキルとかね。これ、帰還不能イベですよね？ なにこれキタコレ洗濯機です、はい。くあんせんふじこ、でしたっけ？

軽いパニックに陥ったサツキは天を見上げた。

なんでしよう、この建物、天井ないんですね。青空がとても目に眩しいです。うん、つかの間の現実逃避です。

ああ、白い雲の間隙から、緑色の何かが見えます。あれ、緑色の物体が、だんだん徐々に大きくなってきましたよ。羽音が聞こえる。うん、これって……。

「ファイアードレイク〜〜〜！！」

ドラゴン亜種です。飛竜です。大きさは中型、といっても、体長8メートルはあります。とつてもお腹が空いているみたいですね。目がささくれ立っています。5メートル程上空で停滞すると、サツキと目が合いました。

うん、ご馳走はわたしですか？

「とりあえず、逃げて！」

見回すと、ローブくんたち、既にいません。声を張り上げた私、馬鹿みたいです。完全ひとりごとです。夕日河川敷の演劇青年です。ちよつとばかし涙目なわたしを尻目に、ファイアーくん、既に攻撃態勢です。炎を吐くために息を吸い込みました。

「さ、せるかあ！！『ウォーターコールド』！！」

サツキの叫び声と共に、構えた右手の先から大きな波動が出現した。水属性の魔法を放出され、その水を纏った氷の粒が、コイル状にファイアードレイクに向かって一直線に伸びていった。

見事命中。グアアとうめき声をあげたファイアードレイクは体勢を崩し、低空へと落ちてきた。

そこをすかさず、サツキは地を蹴り、高くジャンプする。ファイアードレイクの急所である首の付け根に、サツキは躊躇することなく大剣を突き立てる。ギヤアアアと甲高い鳴き声をあげたファイアードレイクは、ゆっくりとその巨体を墜落させ、大きな音と煙を撒き散らせながら絶命した。

そのまま黙々と素材を剥いでいるサツキに、いつの間にもや戻ってきたローブくんたちが声をかける。

「す、すごいです。ドラゴンを一人で倒してしまっなんて！」

「先程の魔法は、どのような構造なのでしょうか！」

すごいすごい、強い強いと騒ぎ立てるローブくんたちを完全無視しているサツキの耳に、ピロピロリンという音が届いた。サツキはおもむろに装着していた魔道具「エネットくん」を取り出した。

説明しよう。「エネットくん」とは、辞書や図鑑、書籍など膨大な知識を閲覧したり、全世界の人々と通信したり出来る、優れものなのだ。自分の身分を証明するものでもあるので、他人に貸し出したり、失くしたりしないようにしよう！ 形状は、腕輪にしたり指輪にしたり、カードにしたりもできるぞ！ ちなみに、私のおすすめ形状は、眼鏡だ！

あーあーそうだった。「エネットくん」があったじゃないか。サツキは迷わず、腕輪に表示されている「Phone」ボタンを押す。途端相手が話し出す。

「えー、そちら、サツキアサギリくん、でよろしいか？」

「はい、サツキアサギリです！」

やはり、相手はサツキの世界の神官であった。サツキは簡潔にクエストの内容が違うことを報告する。すると、神官は言った。

「どうも、手違いがあったようだ。申し訳ないが、一度、こちらに戻ってくれるか」

願ったり叶ったりである。つか、神官のミスだったか。悪いね、ローブくんたち。疑っちゃったよ。

「はい、よろしく願います！」

「では、一度、召喚された場所へ戻ってくれ。そしたら、こちらから逆召喚をかけるから」

「はい！」

と、サツキは元気に返事をする。と祭壇を探した。あれ？ 祭壇さ
ん？ どこですか？

「うぎいやああ〜!!」

サツキはムンクの叫びのポーズをとった。その声に通信相手が声を上げる。

「ど、どうした?」

「さ、祭壇が・・・祭壇が・・・」

祭壇は先程の戦闘で、ファイアドレイクの体によって粉々に砕かれていた。もうそれは跡形も無く、はい。

3：「ロボくんのロボ、ゲットだぜ！」の巻

触媒もなく帰還するためには、大掛かりな準備が必要だということとで、サツキは通信を終えた。でも、還ることが出来るらしい。

ほっとしたサツキにロボくんたちは、とりあえず皇帝に会えという。は？ 今まであなたたち何を聞いてましたか？ 私、間違いでここに来たって分かりましたよね？ とにかく、ここで、スキルレベル上げたり、まれに祭壇の修復でもしたりして、隠居生活しますから、わたしのことは捨て置いてくださいっていったのに、そんなことは出来ませんとかなんとか。ん？ なんですか、その異様にキラキラした目は。正直、キモチがワルイです。あ、「飛竜の目玉」を何気なくロボの中に隠さないでください。それは私のものです。いや、涙目で訴えられてもあげません、はい。

サツキは、半ば引き摺られるように、外に用意されていた4頭だての馬車の中に押し込まれた。と同時に走り出す馬車。まあ、いいか。どうせなんにもすることがないのだ。この世界を少し見学でもしてみようか。と、頭を切り替える。

なんだか、山の中ですねえ。マイナスイオンに満ち溢れております。窓の外を見ると、流れる景色は、綺麗な針葉樹が立ち並び、木漏れ日が漏れる爽やかなものです。

やがてその景色にも飽きたサツキは、「iネットくん」で友達とでもダべりますか、と腕輪を取り出した。「Phone」ボタンを押す。はい、通じません。でかでかと空中に表示されました。2文字。

圏外

あーあー、あの建物周辺でしか通信機能は働きませんか、そうですか。ステータスは見れるのね。メモ帳機能も生きてる。ああ、辞書機能も大丈夫。でも通信機能オールナッシング。うん、だってしようがないじゃない、圏外だもの。人間だもの。

しばし、ステータス画面を閲覧することにした。こんなときでさえ、資格の多さににんまりするワ・タ・シ。うふ。いや、これでもかっていうくらいの勇者なステータス仕様です。見惚れちゃいます。

馬闘スキルなんてレベルMaxです。愛馬はもちろん白馬でした。あ、キツシユ元気かなあ。あ、キツシユってというのは愛馬の名前ね。あし毛の馬でね、最近やっと白い毛が混じってきた、若い雌馬です。一応ペガサスです。空飛べます。元気かなあ、あの娘。この世界に召喚出来るのかしら。機会があったら試してみよう。

あ、野営スキルも98だから、あと10回くらい野営すれば、Maxになるんじゃない？

しかし、前から思ってたんだけど、勇者に必要なスキルって、鍵開けとか、自爆とか（チャ、チャオズ〜！！）、勇者にあるまじき！って思うのは私だけだろうか。勝手に家の中の棚を開けてもいい権利まであるし。まあ、転移魔法の「トラベラ」は重宝します。これ、時魔導師と勇者しか覚えられませんし。

あ、で、確認してみたけど、やっぱり無理だわ、わたし。花嫁なんてさ。作法スキルのレベル見てよ。一桁だよ。ふふ。踊りスキルも7だって。

とりあえず、着替えでもしとく？ タガール巨匠の防具、何気に重いし、ガチャガチャうるさいし、膝の裏んとこ若干蒸れてるし。
(肘の裏っていったら、どっちのこと？ なんて素朴疑問。表っばいのにね)

手持ちの服を見てみる。はい、見事に鎧ばっかり。

こんなことになるなら、先週売りに出た、村娘「モブ仕様のAセット」買っておくんだった。特価200ベールだったのに。あー、普通の服はほとんど売りに出しちゃったんだよねえ。タガール様買うのに、微妙に資金が足りなくなつて。

馬車内の座席を一行占領し寝転びながら、「エネットくん」を操作していたサツキは、ちらりと対面の座席に座る一番小柄なローブくんを見やる。あ、彼の名前「ロブくん」といいました。いやあ、ナイスネーミングだね。これまた。覚えやすい。先程の戦闘を目にしたローブくんたち、なんだか、妄信的な信者と化してうざかったので、一番おとなしかった彼を従者を選びました。

はい、私の視線に気づき、彼、びくびくと脅えた表情を見せました。両手は膝の上でローブをぎゅぐゅと掴んでいます。うん、小動物だな。とびねずみ系？ そんなロブくんにわたしは言った。

「ねえ、ロブくん」

「は、はい！」

うん、飛び上がらんばかりの返事です。

「そのロープ、貸して。いや、頂戴」

「な、なんですか!」

「だって、これ重い。痛いし」

「し、しかし……って何してるんですか!」

「え? 脱いでます」

サツキは会話をしながらも、さつさとタガール作をガチャガチャ
ばいばい脱いでいった。そして、麻のタンクトップと黒のスパッツ
になると、一旦のびをする。

脱ぎ捨てた装備が「エネットくん」の中に吸い込まれると、その
様子をぼかーんとした表情で眺めているロブくん。放心状態の彼か
ら、なんなくロープをひっぺがす。

はい、みなさんご一緒に。

「ロブくんのロープ、ゲットだぜ!」

しかし、これ黒でよかった。赤だったら確実に赤ずきんちゃんに
なってしまう。

黒ロープを纏い、さらに「エネットくん」を玩ぶと、皮の靴を取
り出し、それを履いた。

さて、とりあえず生きる為の基本である情報収集でもしてみること
にする。

窓の外の風景は、いつの間にもやら田園風景に変わっていた。

「ところで、どこに向かっているの？」
「王宮です」

ふん、王宮かあ。めちやくちや簡潔な言葉ありがとう。

そこに「首切り魔人の氷の君」って奴がいるんだな、うん。まさか、会つてすぐに処刑されたりしないよね、ねえ？ そのネーミング非常に怖いんですけど。

皇帝の名は、アルフレッドⅡステファノⅡインペリアルⅡシスタ（長いのでとりあえずメモ帳に記憶）年齢は22歳。4年前にシスタ国の皇帝になった若き有能な皇帝だそうだ。

民からの人気は高く、戦争続きだったこの国に平和をもたらした聡明な人物らしい。（ああ、4年前に来たかった。それで「この戦争を終わらせに来た」なんて言ってみたかった・・・）

そんな彼に、正妃を娶れと周囲が延々と迫ったことに苛立った皇帝は、「伝説のアビスならば娶る」と言ったそうだ。

数百年前に一度、ロレアルの神殿の祭壇に現れ、シスタ建国に携わった、伝説の黒髪の乙女。それが、アビス。

あ、あそこ神殿だったの？ お空見えてたけど？ 石畳の間から、けなげに雑草さんが育ってたけど？ 苔が祭壇を覆っていたのも仕様ですか？

あゝあゝわたし分かつちゃったんですけどお。てめえら、ダメ元で召喚しやがったなあ、ゴウラ。しかも大事な祭壇放置とは何事だ。あ、目逸らしましたね、今。

ところでなぜ「首切り魔人」とそんな怖い呼び名がついたかというと、皇帝に即位したばかりの彼は、かなり強引に臣下をばったばった切り捨てたそう。それも必ず己が手を下し、その首を城門前に高々とさらしたそう。ううううさらし首ですかあ。

「ええ、それでその首をエジルがエサにしてつくものだから、それはもう、片目が抉られたり、肉片が周りに散らばっていたり・・・あ、エジルっていうのは、紫色をした体長30センチくらいの鳥の仲間なんですけどね、鳥にしては珍しい夜行性で・・・またそのなき声がエグーツエグーツってしゃがれた声でして、より一層悲惨さが増しまして・・・」

当時を思い出したのか、ロブくん軽く青ざめている。当時、城門前担当の門番は、衛兵の中で最も過酷といわれていたとかいないとか。どっちなんだ、ロブくん、はつきりしろ。

それにしても、これから会おうという花嫁にそんな話を聞かせてよいのか？ 普通の乙女なら怖がって逃げちゃうぞ。

わたし？ わたしは、もしかしたら皇帝こそが魔王のような気がしてきました。うん、即退治、んで帰還、くらいに思いマスター。

「はあ・・・それにしても、いつ着くの、その王宮とやらには」

馬車に揺られ、既に4時間。眠くなってきた目をこすりつつ、ツキはロブに聞いた。

「ええ、あと半月もすれば、到着する予定です」

「・・・半月？」

「はい、半月です」

あ、暦の数え方違うのかな？

「えーと、15日？」

「はい、15日程度です」

うん？

「1日は24時間？」

「はい、1日は24時間です」

うーんと。

「今、午後の4時？」

「はい、そうですね、午後4時8分です」

「…….…….とりあえず、寝ます」

「はい、お休みなさい」

姉さん、事件です。魔王に会うのは半月後だそうです。

4：「移動決闘場」の巻（前書き）

*1ベール＝1円の世界です。

4：「移動決闘場」の巻

「うおーー街！」

祭壇から旅立ってから5日後、サツキ一行はラファイユという比較的大きな街に着いた。今夜はここで宿を取るそうで、久々かふかのお布団で寝られるみたいです。さっそく街中にある宿を取り、荷物を置くと、サツキは扉を開け放ち、階段を駆け下りた。「ま、待つてくださいつ」とロブくんの悲痛な叫びが聞こえたが、「夕食までには帰るよ」との言葉を残し、サツキは入り口の外へと走り去った。

「うおーー人！」

かなりの人混みの中、様々な人たちが行き交っている。活気あふれる市場の中、サツキは右左に置かれている不思議な品々を眺めては楽しんでいた。

時折、味見と称してサツキに食べ物を渡してくる行商人たちと仲良く会話したり、駆けてきた小さな子供にぶつかられたり、サツキはうきうきした気分ですれを楽しんだ。

これこれ、この雰囲気味わわねば。ビバ観光！しかし、お金がない。ロブくんから少し貰ってくるんだ。サツキの持っている硬貨は、この世界では通用しないようだ。

まあ、ベールも大して所持していないサツキであったが……。

ちょっとだけブルーな気分になったサツキは、お金ってやっぱり大事だよ。懐が暖かいとか表現するし……でも、愛は買えない

「まあ、嬢ちゃん相手なら、100リオンでもいいぞ」

サツキはうーんと唸った。百だろと100だろうとサツキは100リオンも持っていない。というか、リオンがお金の単位なのも今初めて知った。悩んだサツキの様子に、隣に立っていた壮年の男が呆れた表情を見せた。

「おいおい、お嬢ちゃん、本当に出るつもりかい？」

「うん、出たいのはやまやまんだけど、私、無一文なんだよね」

に、と笑うサツキに壮年の男は瞑目し、その直後、大きな声で笑った。

「ははは、なら、私が100リオン出してあげようじゃないか。その代わり、お嬢ちゃんが勝ったら、100倍にして返してもらおう」

その言葉に周りの人々が声をかける。

「おいおい、おっさん、そりゃ可哀そうだろう」

「お嬢ちゃん、よく考えな、怪我するよ」

諫めるその言葉に、サツキは口を尖らせる。

「お嬢ちゃんじゃない、サツキだよ」

大人たちはどつと笑い声をあげた。

「あゝサツキちゃんよ。悪いこたあいわねえ、早くお家に帰んな」

相も変らぬ子供扱いに、17歳のサツキはついにぶち切れると、
壮年の男に詰め寄った。

「おっちゃん、100リオンちょうだい！」

その迫力について、男は財布の中から100リオンを手に取り出す。
サツキはその手にあるお金を、半ば奪うように、モスリンドに突き
出した。

「いざ、勝負！」

大きな野次の中、モスリンドはやれやれと首をすくめた。まさか、
こんな年端も行かない子供相手に本気になれるほど、モスリンドは
腐っていないかった。みれば、彼女は武器すら携帯していない。なら
ば自分も無手に対応するのみ。背負い投げでもして、背中を強かに
打てば、彼女も泣いて帰るだろう、と。

そして、大きなドラの音と共に、モスリンドは一步大きく踏み出
した。と、いうところで、モスリンドの記憶は一瞬途切れ、再び気
がつく彼の目には青空が映っていた。

なんだか、とても静かだ。モスリンドは起き上がろうとする。が、
うまく体が動かない。

すると突如耳に大きな歓声が響いた。

なんとか首を動かすと、周囲に向かってガッツポーズを繰り広げ
ている、少女の姿が目に入った。少女は、やおら振り向き、倒れた

ままのモスリンドに、満面の笑顔で言った。

「さあ、お兄さん。4万リオン戴こうかしら？」

その言葉にモスリンドは、やっとサツキに背負い投げをされ、倒されたのだと気づいた。背中が痛い。

ひととき大きな歓声に、アルは背後を振り返った。歓声は噴水広場から聞こえてくる。移動闘技場の看板が目に入る。アルは思った。

（なにか大きな勝負があったらしいな）

ふいと見やれば、舞台の中央で胴上げされている少女がいた。横には開催者であろう大きな男が倒れているのが見える。

（まさか、あの少女が、勝ったのか？）

周囲の人々の話を聞くに、少女は、あの大男を相手に、試合開始と同時に鮮やかな一本背負いを決めたらしい。見逃したことをアルは少し残念に思った。

ふとアルは黒い気配に眉をよせ、彼方を見た。その視線の先には、いやにガラの悪い男たち数人が固まって徒党を組んでいる。彼らはジロジロと胴上げされている少女を観察している様子だった。

（嫌な感じだな）

さて、どうする？ アルは思案した。

サツキはほくほく顔で広場を後にした。

しかし、この金袋、重い。硬貨が4百枚入っている。4万枚じゃないのは、なぜかと聞いたら、ちよつと不思議な顔をしつつも、親切な男の人が教えてくれた。「百リオン」1ガリオン」なのだそう。なので、サツキが渡された硬貨はすべてガリオン硬貨だという。

ちなみに「1リオン」百リオ」なのだそう、ご飯1回が50リオン程度で食べられるらしい。さらに「1リオ」百オン」だそう。と言うことは、だ。え、べールだと、ご飯1回だいたい500ベールだから・・・4百ガリオンは・・・400000000ベール？ん？ いちじゅうひゃくせん・・・4千万ベール？ ですか？ちよ、ちよつと待て。何か計算間違いが・・・。

ちよ、ちよま、さっきのおつちゃん、ほんと1万ベールも払ってくれてたの？ あ、今、頭くらうってしました。貧血ですかね。

つか、参加料10万ってどんだけ。そこ、庶民の憩いの場でしたよね。闇フアイトでしたか。鉄格子嵌ってましたかと。

と、とりあえず、この大金さんを「エネットくん」内部に仕舞わねば。

もう、今のわたし、はい、きよどつてます。きよどりまくりです。今、お巡りさんがいたら、確実に職質かけられる自信あります。あ、あの路地にさささつと行きます。

一応、この世界の人、「エネットくん」なんて知らないだろうし。人目のないところで、な、んて考えながら路地に入ったわたし。

ああ、この状況知ってますよ。飛んで火にいる夏のってヤツですよ。うん、首元にナイフ当てられちゃってます。

「有り金、全部置いてきな」

ああ、ベタなセリフがやってまいりました。この後、軽くジャンプしろとか言うんですよね、確か。

ポツケは全てデロンと白地を出させられるんですよね？

路地の角を曲がる直前、

「なんとベタなセリフ・・・」

という呟きが聞こえた。

次に、聞こえた音は、男たちのあげる呻き声。

「ぐうっ！」

「うがぁ！」

「げふっ・・・」

「ひでぶっ」

角を曲がったアルの目に映った光景は、地に這う先ほど見たガラの悪い男たちであった。そして、その中央にただ一人、黒いローブの背中が揺らめき立っていた。

ローブの人物はゆっくりと振り返りながら、アルにその鋭利な眼差しを向けた。

その姿にアルは息を飲んだ。吸い込まれるような、その漆黒の瞳に。フードからこぼれるその、流れるような黒髪に。

「・・・あんたも、こいつらの仲間？」

ぼつりと呟いたその言葉にアルはちつと舌打ちをしたくなった。

今日のアルは、それはそれは、この男共と変わらぬ、薄汚い格好をしていた。しかも、鼻から下はその顔を隠すように、ゆつたりしたマスクで覆われている。言葉を発する間もなく、初めて相対する少女の雰囲気は瞬時構えた。後で思えばそれが合図だったように思う。

来る。

次の瞬間には、少女の蹴りがアルを襲った。

腕を胸の前でクロスさせたアルは、そのビーンという衝撃に、右手の甲につけた薄手のガントレットのありがたみを知る。装着していなかったら、折れていたかもしれない、そんな衝撃だった。

その反動を利用しつつ、アルは背後へと大きく後ずさった。茶色の短髪が流れに逆らうように揺れる。容赦なく、先程とは反対の足が、顔を狙い蹴りだされる。大きくのけぞったアルは擦れ擦れのところでそれを回避するが、風圧で鼻頭に一筋の赤い線が走る。

さらなる後ろ回し蹴りは、読みが当たった。左手でその足を掴み引き寄せる。も、次の瞬間には振り払われた。そこで少女はやっと間合いを計るように、後方へとトトツと飛んだ。

そこですかさず、アルは両手を挙げ、敵意がないという素振りを見せ言った。

「待て。俺はそいつらの仲間じゃない」

構えたままの少女は、窺うようにアルを見ている。

(やはり、綺麗な瞳をしている　　アビス、なのか?)

そこへ、ピピッと甲高い笛の音がした。

はっと振り返ると、巡回の正規兵の姿が見えた。アルは今度こそ舌打ちをした。

そして、再び、振り返ると、行き止まりのはずのそこには、少女のローブ姿のみが忽然と消え去っていた。

5：「金ならある！」の巻

サツキは宿屋に帰って夕食を取っていた。その間も考えることは先程の路地裏での出来事。上の空で食べるサツキのテーブルの上はなにやら酷い有様で、見かねたロブが、何度もテーブルの上を布巾で拭いている。

「一体、なにがあったんですか？」

問いかけるロブの言葉もあまり耳に届かないようで、生返事を返し、サツキはぼんやりとした表情を浮かべている。

「うーん、そうだねえ……」

フォークの先に刺さった鶏肉がポロリと下に落ちる。そのまま、サツキはフォークのみを口に入れ、その先をガジガジと齧った。

（あの男、デキル）

無手スキルのレベルはMax。そんなサツキが一度も攻撃を当てることが出来なかった。あやうく足をとられ、反撃されそうにもなかった。

そして、なによりあの目。何度か交差したあの鋭い茶色の瞳をサツキは思い出す。

そして、思い出すたび、なぜか鼓動が早くなるのを感じる。最後の数秒、交わしたあの視線を思い出すと、サツキはなんだか、落ち着かない気分になるのだった。

「・・・もう一度、会える?」

その言葉にロブが「はい?」と答えると、サツキはわたたと「何でもない」と手を振りまくり、テーブルの上のみならず、その周囲までもが、悲惨な状態になってしまった。

ロブはため息をつきながら、ギギギと射殺すように睨んでいる食堂の女将を、チップをはずむため呼び寄せた。

「え、それ、ずるくない?」

サツキは不満の声を上げた。朝からローブくんたち一行の姿が見えず、ロブただ一人な事に気づいたサツキは、その理由を聞いて憤慨した。なんでも、ロブくん以外のローブくんたちは、転移魔方陣を使って、一足先に王宮へと舞い戻ったのだそうだ。

なれば、サツキもそれを使うと言い出せば、転移先の魔方陣にサツキの情報が登録されていないから無理なのだという。

「じゃあ、ロブくんもびゅーんって魔方陣で飛んじやいなよ。わたしは一人で王宮に向かうからさ」

床にのの字を書きながら、うじうじとサツキはロブに言う。

「えーと、一応、僕、護衛なので」

「わたしより、弱いくせに?」

ぐっとロブは顔を顰める。

「道案内も兼ねてますので」

「道案内ならいらぬ。わたし、口あるね。人に尋ねること、出来るアルね」

あーだこーだ、言い合う二人に、食堂の女将の一声が飛んだ。

「どうでもいいけど、あんたたち、食べ終わったのならさっさと出てっておくれっ。片付きゃしない！」

朝食を食べ終えてから、既に2時間が経過していた。

放り出されるように、食堂を出たサツキは、ふと立ち止まり言った。

「そっだ、服を買いに行こう！」

そして、借りっぱなしのこのロブをロブくんに戻そう。思い立ったが吉日というじゃないか。さあ、京都、じゃない、服屋行こう！そしてとある服屋の中に一歩足を踏み入れたサツキは感嘆の声をあげた。

「おお〜〜、色々ありますな、どれ」

一着のワンピースを手にとると、サツキは値札を確認した。「320リオ」。お手ごろ価格です。庶民の味方です。なんてお前、い

いオン〜ナ〜です。

なんたつてこちらには、ガリオン様がおわします。これはやっ
てしまおうか、夢のあれを。ふふふふ。地の底から這い出るよう
な笑いをもらすと、サツキはおもむろに店員さんを手招きして甲高
い声で言った。

「この棚の、ココからココまで、全部いただけるかし　　ふんが
ふっふ」

背後から突然口を押さえられたサツキは、ロブに抗議の目を向け
た。

「な、なにを突然言い出すんですか、あなたは　　グエツ」

はい、思いっきりロブくんの足を踏んであげました。痛そうです。

「金ならある！」

なんだか、偶然にも言いたかったセリフ、またひとつ言えちゃい
ました。（「そちも悪よのう」も死ぬまでに言ってみたいセリフの
ひとつです。てへっ）

サツキはロブの目の前に昨日の金袋を見せ付ける。

はい、4百ガリオン様のお通りですよ。あ、1枚は壮年男さんに
その場で渡したから、正確には、399ガリオンですね。

皆のもの、ひかえ〜、ひかえ〜。ああ、店員さん、ノリが良いで
す。お控え下さってます。

「な、一体どうしたんですか、そんな大金！」

「ふふふ、近こう寄れ」

サツキは耳打ちをした。その言葉にロブは絶句する。

「け、決闘場で儲けたですと〜〜!!」

ロブくん、今、わたしの耳、キーーーーンってなりました。

わたくしを揺さぶりながら、なんだかまだ延々とおっしやられて
いるようですが、ほら、まだ聞こえてきませんよお。耳の機能、壊
れちゃいましたよ。

ああ、ロブくんのスキル見誤っていたようです。この音量は兵器
クラスです。

「か? ……にかく、ご自分の立場というものを、もう少しっ
かり自覚なさって」

どうにかこうにか、戻ってきた聴覚に、安堵しつつ、サツキはや
はり、数着の服を買うに留まった。ロブくんのいちいち聞いてくる
「ホントに必要ですか、それ」の言葉に習って。色々買ったのに、
結局3243リオの出費に留まりました。ええ、ロブくんさまさま
でございました。

ついでにロブくんに新しいローブを買おうとしたら、必要ないと
いう。なんでも、その黒ローブは国営魔術師にしか配布されない貴
重な品なのだそう。ローブにも庇護の魔術とか掛かっているんだ
とか。

というロブくんの「つまりローブとは」という熱の籠もった説明
を、宿屋の部屋で右から左に聞き流しながら、サツキはせっせと新
品の服たちの前で手を動かしていた。そんな様子のサツキにロブは
問う。

「あの、何をなさつておられるのですか？」

「ん〜？ 抗菌防虫防臭加工を施してるんだよ」

ロブは首を傾げる。「ウキン？」「防虫」は分かる、ボウシユウは「防臭」でよいのだろうか？ そんなロブくんはサツキは言う。

「あ〜、つまり、長持ちする魔法をね、ちょっと」

その言葉にロブは口を開けた。

「魔法を使つてたんですか？」

「ん〜、厳密に言うと、「技」をかけてるんだけど……はい、終了っつと」

その掛け声と共に、サツキは腕輪を触る。すると、部屋中に所狭しと広がっていた服たちがふわりと浮かぶと、音もなく腕輪に吸い込まれていった。何度見ても、驚くような光景である。

一体、サツキのいた世界というのは、どれほどの知恵と知識の詰まった世界なのだろう。

聞けば、サツキたちの世界には、争いがないのだという。サツキの知るところの数千年は戦という戦がないのだと。それも、世界のどこに行っても。

ロブのいるこの世界は、たった4年前でさえ、シスル国内でも謀反や一揆が絶えなかった。

今現在、シスル国は平和が保たれているが、海を挟んだ隣の大陸では、戦が絶えず続いている。

シスルも在するこの大陸には、シスルを含んだ4つの大国と、12の小国が存在するが、今でも2大国がいがみ合い、いつ大戦が行われてもおかしくない状態である。内戦の知らせもたびたび、聞こ

えてくる。

シスルの軍隊も、同盟国から応援の要請がこの4年で3回かけられ出兵していた。

なので、サツキの世界は、ロブにとって、まるで桃源郷のようだと思えて仕方がなかった。サツキにそれを言えば、否定するのは分かるほどには、彼女のことを理解できるようになったロブなのであった。

もしもサツキに問うたならば、

「わたしの世界で戦が起こらない理由？ そりゃ、起こったら、確実に世界滅亡しちゃうからっしょ」

以上、桃源郷にはほど遠い回答でした。

6：「ゲ・ボ・ク！」の巻

出発は夕刻に決定した。とりあえずと、今後の旅に必要ななりそうな物の買出しにロブは街へと出掛けていった。サツキには決して宿から出るなど、釘をさすことを忘れずに。

暇になってしまったサツキは「エネットくん」で、またしても自分のステータス画面を閲覧すると、「野営」スキルが99にあがっていることを確認し、にやにやとだらしない笑顔を浮かべた。あはは、いひひ、うふふ、えへへ、おほほと、次々と妖しい笑いが響く。

そんな妖しさ爆発さくら屋なサツキの部屋の扉に、ノックが叩かれた。宿の女将さんだ。

「あんたに、客が来てるよ。下で待ってるってさ」

ええ〜。わたし知り合いなんていませんよ、この世界に。何かの間違いじゃ？ と首を傾げながら、サツキは階段を降りる。

宿の待合室に見覚えのある姿、その人物の目がサツキを捉えると、その人物は叫んだ。

「お嬢〜〜〜!!」

あのね、その呼び名かなり間違っている気がするのね、うん。

わたしの実家、ずーんとしたお屋敷じゃないですよ。一般中流家庭ですよ。ああ、兄の家はでかいです。けど、もちろん氣質かたぎなわけですよ。チャカだドスだなんて飛び交ったりしませんよ。

サツキは叫んだ人物　モスリンドに引き攣り笑いを見せつつ、言った。

「あの、お金、返しませんよ？　使っちゃいましたもん（全部じゃないけど）」

「そうじゃねえ、そうじゃねえ。金はお嬢が勝ち得たもんだ。そのせいで、俺は文無しになっちまったけど、昨日は野宿だったけど。10年かかって貯めた金が一瞬でパアになっちまったけど」

なんだろう、やっぱり金返せって聞こえるのは、わたしだけ？

半分返した方がヨイ？　半分っていうと、2千万べール……。やっぱ、返したくないなあ。

とつらつら考えているサツキの耳に、ぐうきゆるるるゝゝ、と盛大な音が響く。うん、お腹の音ですね。ああ、文無しですものね。昨日から一食も食べてないアピールですか。最低ですね。でも、いい手だと思います。今度使わせてください。

サツキは、すたすたと無言で待合室に隣接する食堂にモスリンドを連れて入ると、女将にランチセットを注文した。

目の前にはががつとトンカツをほおばり食べる大男モスリンド。何回キャベツをおかわりしましたか？　5回目から数えるのやめましたよ、わたし。女将さんの顔を見るのもやめましたよ、ええ。

やっと腹が朽ちたのか、モスリンドは盛大にゲップを言った。

「いやあ、さすがお嬢！　なんと慈悲深えお方だあ」

軽く涙目でモスリンドは言う。うん、元々あなたのお金だけどね。感謝されるのは好き。もっと言え。つかその呼び名やめね。キミの

こと、モスクんって呼ぶよ。挨拶も「もす！」って大声で言わせるよ。ついでにハンバーガーも作らせちゃうよ。「いらっしやいもす！」で統一しちゃうよ。

うるうる目の大男は、突然ずささつと地べたにはりつき言った。

「お嬢！　お願いします！　俺を弟子にしてくださいえ！」

弟子？　弟子、とな？　この流れだと、舎弟っていうんじゃないの？

「自分、自分のこと強えって思ってた！　最強って思ってた！　けど違えやした！　お嬢が最強でした！　上には上がいるって気付きえやした！　どうか、どうか俺を弟子にしてくださいえ！！」

サツキはそんなモスリンドに、テーブルに片肘をつき、足を組みながらにっこり笑顔で言った。

「弟子はいらない」

その言葉に死にそうな顔になるモスリンド。

「でも、下僕になら、してあげましょう」

瞬間、食堂内の空気がピシリと固まった。女将さん停止中。ほら、そこのお客さん、スパゲッティが食品サンプルみたいになってますよ。

モスリンドは、そんな空気をものともせず、言った。

「へい！ ありがとうございやす！ 俺、一所懸命がんばりやす！」
そんなモスリンドにサツキは宣言した。

「じゃあ、モスくんの呼び名はモスくん。挨拶は「もす！」と元気よく。そこんとこ、よろしく」

モスリンドは一瞬何かを考えた後、軽く頷き、大声で言った。

「もす！」

その様子を食堂内で見たもの、伝え聞いた者たちは、かつてのあらくれ者、モスリンドはもういないのだと、涙しただった。アーメン。

「まさか、本当にキミだったとはねえ」

くすくす笑う銀髪の男にアルは顔を顰める。

「悪かったな」

そう言いながらアルは、机の上にある自分の上着を取ると、それを片手で肩に担いだ。

「いえいえ、私を頼ってくださいって、光荣ですよ」

アルはあの後、路地裏で正規兵に捕まり、男たちを暴行したとして、ラフィーユの街の留置場に拘留されていた。釈放される為の保証人として名指したのは、現ラフィーユ領の領主の息子である、かつての学友サミエルであった。

「しかし　　あなたに傷をつけられる人がいるとは・・・驚きです」

サミエルは、ついと、アルの鼻先に手を伸ばした。刹那、白い光が灯り、アルの鼻頭についていた赤い筋が消え去った。切れていたことに気づいていなかったアルは、驚きの表情を見せ、サミエルの手を軽くはたいた。

はたかれた手を軽くふりつつ、サミエルは再度笑みを見せ言った。

「　　相手は、暴行した彼ら、じゃないですよね」

その質問だか分からない言い回しに、アルはあの少女のことを思い出し、しばし思いに耽る。

(そう、彼女は強かった。ならばどこであの強さを得た　　)

黙り込んだアルに、サミエルは今思い出したかのように言った。

「そうそう、そういえばあなた、こんなところにも、よろしいのですか？」

「何の話だ？」

「近々、」結婚されるのでしょうか？」

結婚。嫌な話題を思い出させる。

「周りが勝手に騒いでいるだけだ」

「おや、しかし私の耳にも届きましたが、違ったかな？」

思えば昔からこいつは、嫌な所で鼻が利く奴だった。

「黒髪のアビスが光臨したというのは、誤報でしたか？」

本当に食えない奴だ、とアルはため息をついた。

「どこから聞いた」

アル自身でさえ、昨日伝え聞いたばかりだったというのに。

「お出迎えされなくても？」

質問に答えず、更にくすくす笑うサミエルに、アルは思いつ切り不機嫌な顔を見せると、言い放った。

「世話になった。じゃあな」

扉の外へと向かうアルの背に向けて、サミエルは爽やかな声色で言った。

「ええ、今度お会いする時は、式典で、でしょうか。楽しみにしています」

ボタンと盛大な音を立てて閉まった扉に、サミエルは堪らず、ぷつと吹き出した。

サミエルや限られた者にのみ見せる、彼のその子供らしい仕草は、サミエルにとっては誇らしいものである。彼にとって、自分は特別なのだと思うことが出来る。

なので、ついサミエルは、ことある毎にアルをからかっては遊んでしまう。嫌われたくはないのだが。

城内での顔色ひとつ変えない彼の姿は、なんと痛ましいことか。

「黒髪のアビス、ですか」

アルを生かすも殺すも、彼女にかかっている。そう思えて仕方ないサミエルであった。

サミエルは深くため息をついた。

願わくは彼の方が、彼に安寧をもたらす存在でありますように。

外に出たアルは、いまだ腹を立てていた。からかわれているのは分かっている。悪意がないことにも。ただ、そう理解していても、腹が立つのだ。正直自分でも子供っぽいと思う。だからこそ、また

腹が立つのを抑えられない。

アルは、苛ただしげに、いまだ慣れぬ己の前髪を掻きあげた。

そして、見つける。

人混みの中、歩き去る黒のローブ姿。思わず走り寄り、肩を掴んだ。驚いたように、黒いローブの人物が振り返る。反動で、その人物の手にしていた布袋が道端に転がった。その人物の瞳を見つつ、アルは言った。

「　　すまない、人違いだ」

ため息をつきつつ、転がった布袋を拾い、黒いローブを纏った彼に手渡す。しかも男。大間違いだ。

「い、いえ。あ、あの、えーと」

なにか言いたそうなその人物の、その態度にアルは、小動物みただな、と思いながら首を傾げる。

「・・・何だ？」

「い、いえ。何でも、ありません。失礼します！」

ばたばたと、彼は走り去った。

しばらくその黒いローブの舞う背中を見ていたアルだったが、人気の無い、細い路地へと目を向けた。

（そろそろ帰るか？）

路地脇で寝転ぶ猫は、ひとつ退屈そうにあくびを見せ、「にゃあ」と鳴いた。その様子にアルは小さな笑みを作った。

「そうだな、帰るか」

こちらに近づいて来た男に猫は警戒したが、そのまま奥へと歩いていった。

猫はしっぽを揺らし、目を閉じた。その閉じた瞼の裏に眩しい光を感じ、猫は毛を逆立てた。そして、「しゃー」と一声威嚇音を発し、その場から逃げ去った。

猫の去ったその路地には、誰の姿も存在しなくなった。

揺れる馬車の中、隣の席に我が物顔で座り、高いびきをかいている人物を、ロブは半目でみやった。その人物の名はモスリンド。かなりの大男である。その巨体に、馬車の内部が狭くなったように錯覚する。若干息苦しい。なんでもサツキのことには、「下僕」なのだそうだ。

買出しに行つて帰ってきたロブを出迎えたのは、サツキともう一人、大男であった。思わずのけぞり、眼鏡がずれたロブに、サツキ

は言った。

「あ、ロブくん、ロブくん。こちらモスくん。わたしの下僕」

ロブは眼鏡を元の位置に直しつつ、その言葉に瞑目した。

「家来ということでしょうか」

「ううん、『下僕』で」

「付き人？」

「いや、『下僕』だってば」

「用心棒では？」

「ゲ・ボ・ク！ ね、モスくん！」

「もす！」

そして、サツキはあろうことか、モスリンドを連れて行くとのたまう。ロブは目を瞑った。そして、彼女の要望に従った。ロブを残していった先輩たち魔術師を恨んだ。この男のことで問題になれば、道連れにしてやると、黒い思いを描いてみた。少し胸がすつとした。

ふと、先程出会った男を思い出す。

とてもよく似ていた。彼の人に。あの刺すような鋭い眼差し。こちらの動きを封じるその動作。威圧感。しかし、違った。髪の色も長さも、瞳の色も。

それに、彼が今日ラフィークにいる筈などない。彼は己が花嫁を、己の領域で待ち構えているのだから。

王宮まで、後10日。

7：「エストニア侯爵」の巻

3日ぶりに執務室に出向いたアルを待っていたのは、山のような書類と、執務官ロベルトの渋い顔だった。

時々、皇帝のアルは執務に飽きると、ロベルトの監視を掻い潜り、城外へ忍びに行く。今回も円卓会議に出席した後、執務に戻る道、「5日ほど留守にする」と突然言い放った。慌てて、予定を見ると、重要な会議や謁見などはなく、代役で済ませられるものばかりだった。そこは彼も念頭にあるようだが、いつ何時なにか起こるか分からない。今回はロベルトに口頭で伝えたが、酷いときは、何も言わず出ていくこともある。本人曰く「伝える時間がもつたいない」らしいのだが。

護衛も付けず、一人で出掛けるその所業に、もっと自覚を持ってほしいとロベルトはいつも頭を悩ませている。

「予定より、お早いお帰りで、何よりでございます」

軽い厭味を交えた彼の言い草はいつもの事なので、アルは気にせず、軽く頷き席に着いた。

ロベルトは、アルが小さい頃からの付き合いで、まるで本当の兄弟のように育った。それ故、アルはロベルトに頭が上がらない。

たった2歳しか変わらない筈なのだが、時々彼が30過ぎに見えてしまう時がある。

アルにとって唯一、ただ一人の頼れる人物なのかもしれない、と考えながら緊急の書類を手に取る。

南西に位置するエストニア領で、不審な死が相次いでいるので、捜査をしてくれというものだった。

2枚目の書類には、担当の割り振りが既に決められていた。ロベルトが決めたであろうそれらを、軽くチェックすると、アルはサインをした。

そしてそれを、棚の前で調べ物をしているロベルトに、直接手渡す。ロベルトは一礼をすると、部屋から出て行った。

次の書類の内容は、堤防が決壊し、川が氾濫した報告だった。橋の補修が早急に必要だとの訴えだ。アルは、その金額と橋の規模を鑑みて、さらさらとサインをした。問題は見当たらなかった。

ふと、脇にある書類を見る。報告書だ。作成された日付は一昨日のもの。

黒髪のアビス。

彼女もまた、黒髪だった。

黒髪黒目の人物は確かに珍しいが、まったくいないという訳ではない。だから、彼女がアビスである、とは言い切れない。なのに、彼女こそがアビスであって欲しいと願っている自分に気付いたアルは、ぐっと眉を顰めると、かぶりを振った。

「期待してはいけない。裏切られるだけだ」

戒めの言葉を呟き、アルは吐息をついた。まるで、呪いだ。

昼過ぎには、山のようにあった書類も、ほとんどが消化され、残りあと数枚になっていた。しかし、半分以上は要再考のものだった。

明日には、またこの書類が舞い戻ってくるのだろつ。思わずため息が出そうになる。アルはそれをごまかすように、軽く伸びをすると立ち上がった。そのタイミングで、ロベルトが入室する。

「お昼はどうなさいますか？こちらで？」

「いや、中庭で食べる。今日は天気が良い」

中庭はシャーレイポピーの花が、咲き乱れていた。セージの花も顔を覗かせている。その花々を楽しむ間もなく、アルは早々に昼食を終えた。

その後ろ姿に、ロベルトは声をかける。

「どちらへ？ 執務室は反対側ですよ」

アルは、じとりとロベルトを睨んだ。

「少し、体を動かしてくる。三時までには戻る」

そう言い放ったアルに、渡り通路から声がかかる。叔父のブライム公爵だ。

「やあ、アルフレッド。久しぶりだな」

「叔父上。そうですね、2ヶ月ぶりでしょうか」

二人が挨拶を交わすと、それまでブライム公爵と共にいた壮年の男は、軽く会釈をして去っていった。アルも会釈をしつつ、叔父に

目で窺った。

「ああ、エストニア侯爵だ」

その言葉にアルは瞠目した。その後姿は以前見た時よりも、随分と細くなったように思う。

「最近、娘のリリー嬢の病状が思わしくないそうなんだよ。看病疲れの様子でね、今日は息抜きも兼ねて、久々にこちらに誘ってみたんだがね」

叔父と言葉を交わしながら、今朝方の書類を思い返していた。

第四鍛錬場の中、1時間程の打ち合いを終え、汗を流したアルに、近衛第三騎士隊「赤の砂塵」隊長であるフライが、彼もまた大量の汗を流し、それを片手でぬぐいながら言った。

「で、なーんで髪切っちゃったんだ？ こーんなに長かったのによ」

フライは手を自分の膝にあててみせた。その様にアルは珍しく口元に笑みをみせ言った。

「そんなに長くなかった。せいぜい腰までだったろ」

「ああ、んだっけ？ ま、どっちでもいいや、長かったことには変わりない。女官たちがお前のその短かい髪見て、キヤーもつたいな

「いつて嘆いてたぜ」

フライは、アルの日に焼け、やや赤み掛かった金色の髪を見やる。
「お前に短いといわれるのは、心外だな」

フライはツンツンとたった赤髪を、自身の手で軽く掻きませながら、

「いや、俺はずっとこの長さだし」

風呂浴びても、すぐ乾くから楽だぞ、と言った。アルはそれに同意を返す。

「前の髪は乾くまで3時間は掛かったが、今の髪型は30分もあれば乾く。確かに楽だ」

「3時間って、ひょえ、俺マジ無理。乾く前に寝ちまうな、絶対」

フライとは学生以来の友人だ。齒に裏着せず話す彼に、アルは何度助けられたかしれない。学生時代はよく、フライとサミエルと、三人でよくつるんで遊んでいた。学生半ばで開戦し、互いに辛い思いを味わい、早く大人になってしまったような気がする。

アルが自信を持って友人と呼べるのは、フライとサミエル、この二人なのだと改めて思う。

「エストニア領の事、任せた」

今朝の書類には、第三騎士団が調査に向かう旨が書かれていた。

「おう、任せる。まずはアジの街行って、それからコージドカレンに飛ぶわ」

「何かあったら、遠慮なく呼べよ」

その言葉に、フライは、

「だー、任せろって言ったろ！」

と、アルの背中を強く叩いた。その強さにアルは咳き込んだ。

エストニア侯爵は、公爵との会談後、領内の自分の館へと馬を走らせていた。

我が館の見慣れた門をくぐり、左手に広がる湖を眺めつつ、玄関前で馬から降りる。馬番に手綱を渡すと、侯爵は、執事が開けた玄関の扉の中に入った。

「おかえりなさいませ」

執事の声に軽く頷き、彼女の姿が目飛び込んできた。

「おかえりなさいませ」

可憐な姿のその娘に、侯爵は頬を緩め、彼女のその豊かなカナリ色の髪をすくいあげた。

「ああ、ただいま。リリー」

8：「卑弥呼の料理」の巻

「だから、言ったんです、僕は！」

怒りの声をあげているのは、ロブくんだった。

彼が怒るのも、正当な理由があつてのことだったので、目の前でその怒り、というより、その音量に堪えている二人は、黙ってロブの説教を受けていた。

川の清涼感もかき消される程に、ロブはヒートアップしている。

「言いましたよねえ、僕。ええ、言いましたとも。穀物は貴重だから、計画的に食べる、と。何度も何度も……」

低く唸りながら、ロブは言う。

「………なのに、なんで3日で全部、食べちゃうんですかあ
！！！！！」

原因はラファイユを出発してから、2日目にあつた。馬車の旅の暇を潰すため、サツキが言った一言である。

「第178回、どんだけ食べるのよ？ 胃袋ダイジヨブ？ はい、ダイジヨ、ブイ！ ゲッツ大食い大会！！ inサツキ杯！ ぱふぱふ！」

それは、ロブくんが、川へ水汲みに行っている間に行われた。確

信犯である。

「ほらほら、怒ると余計お腹空いちゃうよ?」

サツキの言葉にロブは再度声をあげる。

「誰のせいで、怒っていると思います!? ダ! レ! ノ! セ!
! イ! で! ! ! ! ! !」

はい、サツキさん昇天。白目剥いちゃいました。隣でモスクンがお嬢! お嬢あ~~~~!!」と騒いでいます。阿鼻叫喚です。

この辺りには宿場はなく、次の街まで最低でもあと3日はかかる。陰気な表情でロブは言った。

「まあ、水さえあれば、人間7日は生きられるといえますし、ね」

その言葉に二人はぶんぶんと首を横に振る。涙目オプシオン付きです。

「あ、それから、ジョンから施しを受けない事。いいですね」

ジョンとは、ホビット族の御者の事である。かなり、印象の薄い人間なので、忘れられてしまうことも、しばしば。

ジョンの操る馬車は、「幽霊馬車」として各地に怪談話として知られている。ただ単に、あまりのジョンの影の薄さに、まるで馬だけで馬車が走っているように見えるから、というものなのだ。

やはり、この時もジョンの事などすっかり忘れ去っていたサツキとモスリンドは、はっと目を開いた。

（そうか、ジョンから食料をもらえば・・・）

主人とその下僕は、同様の思考回路を見せる。その様子にピキピキ青筋を立てたロブは、

「とにかく食料を探してきなさあ~~~~い!!!」

と二人を追い立てた。

そして、二時間が経過

ロブの目の前には、大量の食材が並んでいた。

トトロイモ（芋）にカッシュナッツ（豆）やチェムベリー（木苺）。グランドフィッシュ（白身魚）にパーシェイカ（イカ科）。ウエアラビット（兎）にシルバリオン（狼）。極めつけは、ストロンベア（熊）。

後半は全て魔物であるが、その肉のうまさは重宝され、高値で取引されているものである。ちゃっかり、貴重な素材部分は、綺麗に

削ぎとられている。

街を出発する時より、品揃えが良くなった。

余った食材は街に着いたら売ろう。ロブは疲れきった頭を働かせ、そう考えた。

「ふはははは、「釣りスキル」56、「収穫スキル」83、「野営スキル」Maxレベルのサツキさんにまっかせなさい！」

「流石、お嬢！ 我らがお嬢！ 一生付いて行きやすぜえ〜！！！」

「頭が高い！ ひかえ〜、ひかえおろ〜、卑弥呼サマと崇めたまえ〜！！ きええ〜い！」

異常なテンションの二人を尻目に、ロブは淡々とその食材を馬車の荷置場に積んでいく。

そして、その作業を終えると、二人とはかなり違う低いテンションで告げた。

「サツキさん「卑弥呼じゃ！」・・・あ〜、ヒミコさん？ ついでに料理もお願いします。そろそろ夕飯の時間なので」

「心得たり！！！」

そう、ロブは知らなかった。サツキの料理スキルがレベル3であ

ΣΕΛΙΔΕΣ

8：「卑弥呼の料理」の巻（後書き）

この日の夕食風景は、読者様の想像にお任せ致します。

9：「陰気なコージドカレン」の巻

陰気な街。

第一印象は、そう感じた。

ラファイユの街を離れ、6日が経った。サツキたちが辿り着いた先は、コージドカレンという小さな街であった。原産のサイピという果物から作る果実酒が有名な街である。

「なんだか、変な空気」

サツキはぽつりと呟いた。

道行く人は、皆どこか暗い目をしている。

「あー、ホント辛気臭いなあ。葬式でもあんのかね？」

耳を小指でほじくりながら、モスリンドが言う。

その言葉にロブは、つと指差した。その先を見ると教会がある。

今、まさに葬儀が行われているところであった。

「.....」

カラーンカラーンと、教会の鐘がコージドカレンの街中に響き渡った。

宿屋に入ると、店内は街より、明るい雰囲気に包まれていた。旅人が多いせいだろうか。

一人の旅人が、サツキたちに気づくと声をかけた。

「よう、お嬢ちゃん方」

すでに出来上がった様子の男に、モスリンドが威嚇する。

「お嬢に近づくんじゃねえや、コラ」

「なんだとお、俺あただ、忠告してやるうとしたただけだあ」

忠告、というその言葉に、サツキたちは首を傾げる。

「なんでしようか、その忠告とは」

ロブが落ち着いた声で聞いた。

ちらりと不満そうな眼差しをモスリンドに向けていた旅人だったが、ロブのその言葉に話し始めた。

「最近、この街では、若い女が次々に死んじまってるってウワサだあ」

気いつけるい、と話す男の隣で、モスリンドが呟いた。

「お嬢、今夜あつしは寝ずの番を致しやす」

「そこまで気にしなくて大丈夫だよ。一日泊まるだけだし」

「しかし、しかしっすね、あつしや心配なんすよお。お嬢は若いだけじゃねえ。えれえ強えじゃねえっすかあ」

そこは「強え」「じゃなくて「美人」とか「綺麗」とか「可愛い」とかという言葉が入るのでは、と首を捻るサツキであった。

纏わり付くモスリンドをけしけしと蹴りつつ、サナエたちは部屋へと向かう為に、階段を登っていった。

そんな三人組を一对の目が追っていたが、誰もそれに気づくことはなかった

深夜、階段を登る音が微かに響く。その音を立てている人物は、3階の廊下を覗き込む。

ひとつの部屋の扉の前に、大きな躰をかいて寝ている大きな体に近づくと、その大男を扉の前から横に蹴り倒す。倒されたその男は「うう・・・お嬢・・・」と呟いたが、また夢の中に戻っていった。そして、その人物はその部屋に入っていた。やがて、扉の中からその人物は出てきた。入った時とは異なり、その胸にひとりの少女を抱えながら・・・。

男は、つかつかとその男の元へと歩み寄ると、襟首を締め上げた。った。

「いま、なんと言った？」

襟首を絞め上げられている男はカタカタとその体を震わせた。傍に立つ同僚もその光景に硬直し、血の気のない顔となった。「首切り魔人」彼のその称号を思い出したその同僚は、強く目を瞑った。

モスリンドは頭に何か衝撃を感じ、眉を顰めた。それから、執拗に頭、肩、足などに激痛が走る。うっすらと何だかぼやける頭に戸惑いながら、モスリンドは目を開けた。

「あ、やっと起きましたか！」

目の前にロブの顔があった。どんよりと重い頭を振りながら、モスリンドは上半身を起こした。

「ああ？ 一体、なんだってんだ」

周りを見渡すと、そこは廊下だった。そうだ、昨日はお嬢の部屋の前を陣取って、寝ずの番を・・・あれ、俺いま寝てたなあ。

「サツキさんがいなくなりました」

その言葉にモスリンドは、背後の扉を乱暴に開け放すと、部屋の中に飛び込んだ。

「お嬢！」

空のベッドを呆然と見ているモスリンドの横で、淡々と説明するロブの声が聞こえる。宿の客全員が眠りこけていて、どうやら、夕べの料理に睡眠薬が盛られていたらしいこと。宿の裏口の扉の鍵が開いていたこと。盗まれた物等はなく、全員無事だということ。

「お嬢以外は、か」

「はい」

堪らずモスリンドは叫んだ。それはまるで竜の咆哮のように聞こえた。

突然走り出したモスリンドにロブは叫んだ。

「どこに行くんです！」

咄嗟に捕まれた腕を振り払うと、唸るようにモスリンドは答えた。

「決まってるだろうが、お嬢を探しに行くんだよ！」

転がるように、階段を降りていくモスリンドの背中に、ロブは再び叫んだ。

「待ってください！ 闇雲に探し回っても見つかりませんよ！」

「そんなん、やってみなきや分かんねえだろうが！」

宿の扉を開け、飛び出したモスリンドに必死に追いつがるロブだったが、

「うおっ！！！！」

「いだ！」

モスリンドの叫び声ともうひとつの声に、走る足を緩め、外を見た。

そこには、二人の男が地面に転がっていた。互いに頭を抑えながら。

氷囊ひやうを額ひたいにあてた二人の男と小柄なロブの男は、宿屋の向かいの喫茶店にいた。

不運にも宿屋から飛び出たモスリンドと激突したのは、「赤の砂塵」隊長フライであった。

ロブは、白魔術で治癒すると申し出たのだが、フライはそれを断った。

「自然に直せるもんは、そのまま自分の力で直したほうがいいんだ」
その言葉にはりあって、モスリンドも治癒魔法を拒んだ。

仕方がないので、喫茶店の主人に氷囊を作ってもらうことにして、今の状況に至る。

「で、だ。最近、この付近で不審な死が目立つらしいんだ。お前ら、何か知らね？」

フライがそんな風に口火を切った途端、二人は息を飲んだ。その様子にフライの目が鋭くなる。

「昨夜、宿屋にいた旅人に聞きました。最近この街で、若い女が次々に死んでしまうという噂話を」

ロブはそう言うと、その後の顛末をフライに話した。

フライはこれまでの調査報告書を思い返し、確かに若い女ばかりだったなあと考える。それからやおら立ち上がると言った。

「宿屋の夫婦には、若い娘さんがいたなあ。確か、年は14だったか？」

その言葉で、ロブは「ああ」と、今朝からもやもやしていた、頭の霧が晴れたようだ。

「では、サツキさんの誘拐は、夫婦の共犯、ということでしょうか、よろしいですね」

「ああ、そうだな。旦那と娘って手もあるけど、どっちにしる一人じゃ出来ない。それより、今お前、サツキつつたか？」

何かを思案するように呟いたフライに、ロブは首を傾げる。

「はい、サツキさんです」

「・・・お嬢、お嬢って言うから、気付かなかっただろうが・・・まさか、お前、それって黒髪なの？」

「はい、アビスです」

“何かあったら、遠慮なく呼べよ”

アルの言葉が蘇る。どうするよ、俺。フライの背中に冷たい汗が流れ落ちた。

ぐらぐらする　頭が異様に重い。薄暗い部屋の中、冷たい床の上でサツキは目覚めた。すすり泣く声が聞こえる。その声のする方向へと、首を動かした。

その瞬間、耳元でジャラ、と音がした。

首になにか違和感がして、触ろうとした。ジャラ、と音がした。触れなかった。手が動かない。軽く身動きするたびに、ジャラ、と音がする。ああ、とサツキはやっと理解した。

首という首には輪っかが嵌められていた。そして体中に鎖が巻かれ、拘束されていた。

もう一度、すすり泣きのする方向へと、首を回す。サツキの右に、サツキと同じ状態で娘が泣いていた。左も見てみると、やはり、娘がいた。眠っているように動かない。

動かせる限りに部屋を見回す。石造りの10畳程度のこの部屋に、サツキを含め、6人がいた。

皆、サツキと同じように拘束されて。窓ひとつないこの部屋では、今が、朝なのか夜なのかも分からなかった。

次第にクリアになる頭でサツキは必死に考えた。ここから脱出する方法を。

宿屋の夫婦はあっさりと、白状した。推測したとおり、娘の身代わりとしてサツキを攫ったらしい。

しかし、宿屋の娘に降り懸かった災難の、その内容を聞いてフライたちは青褪めた。

「行き先は神殿。目的は生け贄」

この街の雰囲気が悪さが、理解できた瞬間だった。

その部屋にただひとつだけ存在するその扉が徐々に開かれた。ギギと、錆び付いた音が響く。その音に娘たちは、ひっと息を飲んだ。

甲冑に包まれたその兵士は、サツキの隣ですすり泣いていた娘の戒めの一部を解くと、娘を無理やり立ち上がらせた。その最中も絶え間なく、娘のすすり泣きと懇願の声がしていた。兵士は、引き摺るように娘を扉へと押しやる。

「ウグツ！」

突然兵士は呻き声を上げると、そのまま床に崩れ落ちた。それをサツキは、悠然と見下ろした。そして、自分の繋がれていた鎖を使い、兵士を縛り上げると、呪文を唱える。

「『ライティン』」

部屋の内部が明るい光に包まれた。その眩しさに娘たちは、目を瞬かせた。サツキは次々と娘たちの拘束を解く。

珍しく「技：鍵開け」が大活躍だ。更に、「遠目・遠耳」スキルを使用することで、誰にも会わずにサツキたちは、この忌まわしい建物から外へと脱出することが出来た。

夕日が眩しい。

ああ、生きてるって素晴らしい！

兵士が部屋に入ってきたところから、時を遡ること6時間前。サツキが起きた時点である。

彼女はまず、自分の拘束を外すことに努めた。

「技：縄抜け」を使用したか、上手くいかなかった。そうだよ、ね、縄じゃないもの鎖だもの。魔法は両手が拘束されているのでは、どこにその効果が向かうか分からないので、危険。あ、今思いついた方法、召喚獣呼んで・・・あー、やだなー、痛いなーこれきつと。あ、プロテスかけてみる？・・・駄目だ、輪っかも強化されるわ、これ。

あー、やつぱり、それしかないのね、はい、覚悟決めました。サツキ、行っきます！

「出^いだよ『シルフ』！」

ぼやぼやあゝと、妖精さんたち来てくれました。キラキラしてます。うん、メルヘン。

はい、リジエ効果（徐々に体力が回復）頂きました。

なんだが、周囲の娘さんたちが、息を飲んでるけど、今構ってる暇はない。スマン。

さあ、ここからが本番。リジエはあくまで保険ですから。怖いよ。ちゃんとセーブ聞いてくれるかしら。よし、気合入った！
・ええい、行くぞ！

「出だよ『イフリート』！」

空間に咆哮と共に現れました。真つ赤な巨獣。って、うわ、でかつ、ちよ、おま、でかすぎ！ 部屋いっぱいじゃありませんか！ 慌てて戻す。

はい、失敗です。うん、だから、娘さんたち泣かないで。ちよつと、静かにして。

でも、イフリートさん見て思い出しました。

召喚獣さんって、それぞれの能力使わなくても、直接攻撃は出来るではないか。わざわざ、炎で溶かしてもらおうとした私って……。まあ、オーデイン呼ばなかっただけマシとしましょうか、ねえ。

さて、一番小さい人は……。やつぱこの人かな。モグーリは呼ばない。あんまり言うこと聞いてくれないから。

「出ですよ『ラムウ』！」

パチパチと軽く放電しながら、お爺ちゃん登場。さあ、お爺ちゃんお願いします。うん、がんばって。杖でバシバシやっちゃって。

うん、10分くらい経過しちゃったかな？ 大丈夫、お爺ちゃんのペースでいいからね。お爺ちゃんフアイト！

肩で息し始めちゃったね、なんだろ、これも老人虐待にあたるのだろうか。

ああ、駄目だもう、チコボと交代するから、もういいよ、お爺ちゃん。ありがとう。わたしの心が折れちゃう前にさ。交代しよ、ね？

え？ やる？ 諦めたらそこで試合終了？ お爺ちゃん、お爺ちゃんなのに、そんなステキ言葉知ってるなんて……。え？ 孫が読んでた？ え？ 爺、孫いんの？ ちよ、あ、爺、消えた。ん？

ああ、輪っか壊れたのね、それはよかった。いや、ちよっと、孫の話、気になるんですけど。

さて、左手が自由になった私、ここから猛反撃です。ばらばらと鍵を開ける。それから情報収集。これ鉄則。その前に、私の左隣りにいた子に、回復魔法。危な、瀕死でしたのね、あなた。寝てたんじゃなかったんですね。

娘さんたちの情報によると、毎回、一人の甲冑兵士が、一人を連れ出して行くそう。毎日なのは、時間の感覚が分からないので、正直分からないとのこと。まあいい。では、甲冑さんがやってくるまで、待ちましょう。

という件を経て、夕日を拝むことが出来ました。

本当、生きてるって素晴らしい！

10：「リリー＝エストニア嬢」の巻

部屋に入ると、我が主は立ったまま、腕を組み、トントンと忙しくなく人差し指で肘を叩いていた。

視線は机の上に広げられた一枚のメモ紙に固定されている。

こんな様子の主は、思考の海に沈みこみ、しばらくは現実に帰ってこない。

視線の先にあるメモ紙をひよいと覗いてみる。
幾つかの単語が書きなぐられている。

“ 神殿 ”
“ 生け贄 ”
“ エストニア侯爵 ”
“ 娘が病気 ”

二重線で消された単語もある。

“ コージドカレン ”
“ 宿屋 ”
“ 不審な死 ”
“ 馬？ 馬車？ ”
“ 黒髪 ”

ふいにその視線が上がり、声をかけられる。

「ロベルト。地図を出してくれ。エストニア領土内のものだ。出来るだけ詳しく描かれているものを頼む」

「はい」

ロベルトは棚から、それに見合うものを取り出すと、アルに渡した。

バサバサと音を立てて地図が広げられる。アルは、ある一点を見つめ、地図上で指をすべらせた。

「……すぐだ。道は……らへ……てる、か。標・差……く・
いだ……。」

ぶつぶつ呟きながら、別の地図を広げる。

「三、か」

そう言つと、アルはフロックに駆け寄り、浅手のコートを取った。

「少し出てくる」

「はい？ もうすぐ日が暮れますよ？」

「すぐ戻る。一応、念のためだ」

思いのほか強い口調で返され、ロベルトは目を瞬しはたかせた。

その瞬間に、彼はコートを翻し、執務室を出てしまっていた。

何か違和感がある。はっとして、その壁を見る。長剣が1本消えていた。

サツキは「遠耳」のスキルを解除しようとした正にその時、その声を拾った。

「 けて・・・た、すけ、て・・・」

声は神殿の奥の方から聞こえる。どうやらまた内部へ入らなければならぬらしい。

すでに、日は暮れかけ、右手に見える湖畔が闇に沈んでいく。

サツキは娘たちの中で、一番しっかり者の風貌の娘 アンナに、宿屋にいる二人への連絡を頼む。

他の娘さんたちには、もうしばらく神殿裏手にそびえる崖付近に隠れているよう指示すると、神殿内部へと舞い戻った。

声のする方向に、「遠目」を使う。サツキは軽く顎を上げ、その居場所を掴むと、盗賊と忍者の技を駆使し、潜入を開始した。

階段を上へ下へと迷路のように進み、目的の場所へと辿り着いた。その部屋は、神殿内部ということを忘れるくらい、まるで、貴族の部屋と見間違ってくるくらいに、豪華な部屋だった。助けを求めている彼女は、浴室にいる。サツキは浴室へと続くその扉を開いた。人の侵入に気づいた彼女は、瞬間、声を上げた。その少女に向かって、サツキはしつと人差し指を自分の唇にあてる。

「助けにきたの、もう大丈夫だから、ね」

少女は何も纏っていない状態で、体を後ろ手に縛られて、浴槽内部のシャワーヘッドに繋がれていた。体中が血に塗れ真っ赤だ。痛々しい。顔が若干青いのは、血を失って貧血状態になっているのだろう。サツキは3分の2程、閉められているシャワーカーテンを半分まで開き、彼女に近づいた。まずは、回復魔法をかけ、彼女の傷を治していく。それから、縛られた腕の鎖を解き、そしてふと、視線を感じた。

未だシャワーカーテンで隠れた場所に目をやり、固まる。

ごくりとつばを飲んだ。そこには、半分腐りかけた少女の死体が座っていた。髪の毛は、ほとんどが無くなり、辛うじて残ったその髪は、亜麻色をしていた。くぼんだ二つの穴が、まるでサツキを見ているような錯覚を覚える。

その死体に気をとられていたその時、背後からため息をつく音が聞こえた。振り向くと、とても高価な服を身に纏った男がそこにいた。すこしやつれたその壮年の男は、迷うことなく手にした液体の入ったビンを床に投げつけた。ボタンと扉が閉められる。慌ててサツキはその扉に手を伸ばした。

しかし、その手自身がノブを掴むことはなかった。

アンナの案内で、フライたちは、娘たちを無事保護した。しかし、その娘たちの中にサツキはいなかった。

多少混乱した娘たちの話を聞くにあたって、サツキは、残った1人を助けるために、神殿に戻ったらしい。

フライたちは、迷うことなく神殿内部へ突入を図った。「赤の砂塵」の隊員たちも我さきにと、突入を開始する。

その圧倒的な強さに、内部を守っていた神殿兵はなすすべもなく、ある者はその力に最期まで歯向かい、またある者は投降した。

とうに日の落ちた中、部屋の窓からは、微かな月明かりが差し込んでいた。

その部屋の扉を開いた男は、部屋の中央で、椅子に縛りつけられている黒髪の少女を目にした。うな垂れた少女のその表情は、窺うことが出来ない。

男はゆっくりと、中央へと近づき、少女のその細い首に手を伸ばした。脈が打たれていることを確認すると、男は少女を縛り付ける鎖を外した。眠っているだけのようだ。外傷はない。男は少女を横抱きにすると、立ち上がった。

途端、男が入ってきた扉とは別の扉が開いた。ランプの明かりが二人の男を照らす。ランプを持った男は囁くように言った。

「ああ、まさか、キミが来るなんて・・・残念だ、本当に残念だよ」
少女を抱く男は言った。

「私も残念です。エストニア侯爵」

エストニア侯爵は微笑んだ。

「私としては、フライ君あたりが来てくれることを望んでいたのだがね」

男は首をゆっくりと横に振った。

「この場にいるのが、私以外の者であったのなら、私は私を許さないでしょう」

その言葉を噛み締めると、エストニア侯爵は深く頷いた。

「なるほど、その娘がそうか・・・髪と目を見て気付くべきだったな」

「何故、と聞いても？」

「つまらない男の意地、いや、願いだよ」

エストニア侯爵は悲しい笑顔を見せた。

「あれが望むのなら、私はなんだったとする。例えばこの身が墮ちようとも。彼女が存在するために。だが、潮時みたいだね。」

遠くに聞こえ始めた喧騒の声に、侯爵は言った。

「後悔は、ないと？」

頷く侯爵に、男は初めてその表情を動かさず、眉を顰めた。そして、ゆっくりと少女を床に横たわらせると、背中に背負った長剣を抜いた。

「ならばその罪ごと、第三十二代シスル国皇帝アルフレッドの名に於いて、あなたの命を頂戴する」

とうの昔に覚悟を決めた侯爵のその瞳を見つめ、アルは剣を構えた。侯爵は武器を携帯してはいないが、アルに迷いはなかった。侯爵は、ランプを左脇にあるローテーブルに置くと目を瞑り、祈りを捧げた。

フライが扉を開けた先には、大きな肖像画が4枚掛けられていた。一番左の肖像画には若かりし頃のエストニア侯爵が描かれている。二番目の肖像画には侯爵と綺麗な女性が描かれている。三番目の肖像画には二人の間に小さな亜麻色の髪の子供が笑っている。四番目の肖像画には、可憐な姿の娘が描かれていた。

一人の娘が、椅子に座ってそれらを眺めている。フライは尋ねた。

「あなたは、リリー」エストニア嬢ですか？」

娘はにっこり笑って無邪気に答えた。

「ええ、そうよ。あなたもお茶をいかがかしら？」

娘は自分の持っていた紅茶のカップをソーサーに置き、テーブルの上にあるティーポットに手を伸ばしながら言った。

血塗れた槍を持つフライに向かって。

絶命した侯爵にアルは、そっとテーブルにかけられていたクロスを掛けた。得の高い人として伝えられていたエストニア侯爵だった。そんな彼でも悪魔の声に耳を傾けてしまった。そして、その報いがこの結末である。

アルは小さくため息をつき、そして背後に殺気を感じた。咄嗟に横に転がる。

それは、今しがた掛けられたクロスを突き破り、骸をも傷つけた。

「な、ぜ？」

アルは掠れた声を絞り出した。そこに居立った黒髪の少女に向かって。

少女は侯爵に突き立てられたその大剣を抜いた。骸から新たな血が噴き出し飛散し、彼女の身体を赤く染める。そして、ゆっくりと振り向くと、アルの驚きに見開かれた蒼い瞳を捕らえた。

燃えるような狂気を孕んだ、漆黒のその瞳で。

11：「狂気を孕んだ瞳」の巻

「期待などしてはいけないわ。裏切られるだけですもの、ねえ？」

実の弟に毒を飲ませた彼女は、脂汗を垂らし苦しむ彼の前で、それは見事な微笑みを浮かべて言った。

狂気を孕んだその眼差しで、弟の前に立つ。その蒼い瞳を覗き込むと、ふふつと笑った。

「あら、期待してたのね。裏切られないと？」

馬鹿ね、と姉は言う。

「だから、裏切られるのよ」

彼女は右手に持った短剣を振り上げた。銀色の刃がきらりと鈍く光る。

夢はそこで終わる。

繰り返し見る。

夢。

4年前から、毎晩のように繰り返される。

単なる夢。

だが、現実起こった夢。

記憶の再生。

彼女はもういないのに。

夢の中ではまるで、今でも生きているかの如く、咲き誇った大輪の薔薇のように笑う。

少女は何度も大剣を振りかざし、アルを攻撃した。アルは振りかざされるそのたび、その攻撃を避ける。少女はふと攻撃を止め、その大振りの刀を見た後、ふいにそれを手放した。途端に、その大剣は彼女の左腕に装着された腕輪へと吸い込まれ消える。軽く息を乱し始めたアルはその光景に目を細めた。

それが手にするは両手剣。

右手に長剣、左手に小太刀を構えた彼女は、先程までの大胆な攻撃とは違い、鮮やかに舞うように、切り付けてくる。それは、まるで剣舞を披露するかの如く。彼女の一手がランプを掠めた。ランプは倒れ、瞬く間に部屋中に炎が舞い上がる。その中を少女は、黒髪を靡かせ踊り舞う。

長剣をかわせば、またたく間に小太刀が腹を狙う。長剣を受ければ、小太刀はその腕を狙う。ならば、答えはひとつとばかりに、アルは動いた。己の肉を切らせるために。差し込んだ右肩に小太刀が刺さった。

「・・・ウグッ」

刹那、少女の瞳が揺れた。しかし、右手の長剣は惑うことなく振り下ろされる。

アルは己の長剣を痛む右手でしっかりと握ると、その攻撃を受け止めた。そして、左腕を振り上げ、少女の左腕を掴んだ。抜かせはない。彼女の左手が小太刀の柄から離れた。互いに間を取り合う。

どうする？ どうすれば、彼女を正気に戻すことが出来る？ 傷つけない。ただ、ひとつの傷も。なのに。

狂った姉を救ったのは、一太刀の剣が彼女の身体を貫いたその時。

ふいに呪いの言葉が蘇る。

“期待（など）してはいけない（わ）。裏切られるだけ（ですもの）だ”

ああ、そうだった。アルは笑みを浮かべた。

少女の突き出した長剣がアルの胸に吸い込まれるように刺さった。

アルの突き出した長剣が少女の胸に吸い込まれるように刺さった。

狂気の去った漆黒の瞳が見開かれ、その瞳の中に静かに微笑む男

を映し込んだ。

フライが辿り着いたその部屋は、燃え上がる炎に照らされていた。先程まで、引っ切り無しに鳴り響いた、剣の打ち合う音はぴたりと止んでいた。その部屋の中央に、二人はいた。

互いを抱きしめるように、それぞれの剣で貫かれて。

その二人を見てすぐに、フライは気付いた。アルだ、と。

震える。

うるさいくらいに聞こえてくる鼓動。己の心臓。まるで全力で倒れるまで疾走したくらいに、早く強く響いている。体の内部から叩かれる。視界が霞む。

なんだよ、よく見えねえよ。

瞬きをした途端に、ぼたつと音がするくらいの量の滴が床に落ちる。煙でだから、と言い訳出来ない。両頬をつたう水分。

「あ、アルっ！ アルう・・・ア、ルウ！」

ふらつく足で、フライはその元へ躓きながらも駆け寄った。

そんな意気消沈したフライの耳に声がした。

「うるさい、騒ぐな。傷に響く」

ふいと、顔をあげ、振り返った。誰もいない。

「早く、運べ。焼け死にたいのか」

ふいにフライの視界がぐにやりと歪んだ。

「彼女を頼む」

アルがフライに向かって少女の身体を差し出している。

半ば放心状態のフライは、言われるまま、意識のない少女を持ち上げる。

アルは荒く肩で息をつきながら、言った。

「悪い、もう持たない。先に行く」

右肩に小太刀、左わき腹に長剣が突き刺さったままの、痛々しい姿で、アルは口の左端のみ上げ、笑みを作ると、

「……『トラベラ』」

目を瞑り呟いた。直後、アルの身体が白い光に包まれ、光の飛散と共に消えた。

フライはぐつと眉を寄せた。幻術を見せられていたらしい。騙してくれた報復は、後で返すとして、今は脱出が先のようだ。フライは少女を横抱きにしたまま、踵を返し、廊下へと飛び出した。

どこまでも蒼い世界。

サツキは漂う。

蒼くそして蒼い。

沈む。

蒼に包まれながら。

深く深く沈んでいく。

蒼の世界を。

天を仰ぎ見る。

蒼。

周りを見渡す。

蒼。

くるりと回転する。

蒼の中を。

蒼。蒼。蒼。蒼。

蒼が跳ねる。

蒼が眠る。

蒼が謳う。

そして蒼は笑う。

サツキも笑った。

蒼。蒼。蒼。蒼。

「あああああ〜〜ん！ お嬢、起きてくだせえ！ ああ〜〜ん
！」

サツキは覚醒した。しかし、無償に腹が立つた。なんだか、神秘的な場面をぶち壊された。まさかこの泣き声を聞いてたから、蒼の世界の夢を見ていたとは思いたくない。いや、もう信じない。何もかも。

「ああ〜ああ〜ん！」

「とう！」

サツキの必殺ヒーローキック、入りました。サツキの覚醒に、涙に濡れたモスくん喜びの笑顔の顔面ど真ん中。モスくん、笑顔のまままで背面に倒れこみま・・・せん！ ちっ、椅子の背もたれに助けられたか。

見回す。うん、引き攣った笑顔のロブくん発見。

ああ、馬車です。森の中です。揺られています。

ロブくん、説明カモン。

「僕の知っている限りになりますけど、よろしいでしょうか？」

と、丁寧な前置きをひとつ。ロブくんらしいです。

はい、ここからがロブくんから聞いた話の、まとめです。次の期末試験に出ますよ、真面目に読んでくださいね。

事件の真相とか、どうでもいいやって鬼畜な方は、縦読みでどうぞ。言葉は隠れてないです、はい。

攫われた娘のひとりであるアンナちゃん含む、娘さんたちは皆、無事保護。浴槽にいたあの女の子も無事でした。浴槽にいた半腐した死体は、エストニア侯爵の療養中だと思われていた娘さんで、死後3ヶ月程度とのこと。

あと、侯爵の館が半焼したそうです。そうなんです、神殿と侯爵の館は、地下で繋がっていたんです。

ずばり、この事件のキーマンは、エストニア侯爵夫人です。

侯爵は3年前に、当時20歳の女性と再婚しました。そして、エストニア侯爵夫人となった彼女は、9歳下の義娘リリーをそれはとても疎んじました。体の弱かった娘さんは、とても可憐な子だったそう、侯爵が自分より娘を可愛がるのを見ると、癩癩を起こしていたそうです。そしてある日、夫人の心は壊れました。そのきっかけは、侯爵の亡くなった今となっては謎のままですが、侯爵の日記には、「自分の優柔不断さが招いた結果だ」と、書かれていたそう

です。

壊れた夫人は、生血を好んで飲むようになりました。その理由は若返りの為。初めは、すっぱんや蛇だったそうですが、だんだんエスカレートして、色々な血を飲むようになったそうです。また、お風呂にも生血を入れるようになりました。そして、娘さんが病気で亡くなりました。それが3ヶ月前のこと。それから、あるうことが夫人は、自分こそが娘さんだと思い込むようになってしまいました。しかも夫人は、娘さんの亡骸が夫人だと思い込みました。侯爵は葬儀を行おうとしましたが、亡骸を動かそうとするたび、夫人が発狂をするので、亡骸は埋葬されず、あの浴槽にあったそうです。

そして、この頃から、生娘を狙った事件が起こり始めました。最初は奴隷市場の娘。次は、誘拐。そして最終的に領土内の神殿を使ったそうです。侯爵の日記には、儀式が行われた日と人数がすべて書かれていました。総勢48名の若い命が失われました。

なぜ、娘となった夫人は、夫人であるその亡骸に執着をみせたのでしょうか。この出来事から、夫人の本当の心は、娘さんに愛されたかったのではないか、ということが窺えます。どうなのでしょうね。ただ単に、夫人だと思い込んだ遺体は、もともと夫人であるのは本人だったわけですから、結局自分しか愛せない人だった、という解釈もできます。

現在、エストニア侯爵夫人は、国営病院バンスタルの精神隔離病棟にご入院中です。ちなみにここから生きて退院した方は存在しないそうです。

以上、サツキ・ドイルがお伝えしました。

11：「狂気を孕んだ瞳」の巻（後書き）

* エストニア侯爵夫人のモデルは、バートリ・エルジエーベトです。

12：「ひらがな表記ならいける？」の巻

「……………（じー）」

「……何？ 何か言いたそうだね、ロブくん。いいわ、発言してもよろしくてよ」

「いえ、これだと、サツキさんが馬車にいる理由がまったく書かれていないのではないかと……」

「えー、もうなんだか疲れちゃったんですけどお。大体、こんな重い話書くのとか好きじゃないんですけどお。ホラーチックなものも嫌いなんですけどお」

「サツキさん、後半部分、作者の声になってます。いや、まさかの前半からですか？」

ロブくんは仕切りなおすように、ひとつ咳をすると言った。

「えー、サツキさんは、フライ隊長によって、侯爵の館から無事助け出されました」

「はい、質問」

「どうぞ」

「フライ隊長って、誰？」

「ああ、後で教えます。読者さんは知ってますから。それから、これから先は質問禁止の方向でよろしくお願いします」

「はーい……………（いじいじ）」

「えーと、サツキさん、館にいた時の記憶ありますか？」

「えーっとね、貴族風男にビン投げつけられて、やばいつ絶体絶命のピンチはチャンスなんだって時までですー！」

「うん、浴槽でエストニア侯爵に薬をかがされたところまでですか？」

「まあ、そうともいう？（あの人がエストニア侯爵だったのかあ）」

「浴槽でかがされた薬は、神経マヒを起こす系統の薬剤でした。ただ、眠らせるためのものです。しかし、助け出されたサツキさんの口腔内（口の中）から千終秋桜、別名『狂い花』の残骸が発見されました。この花の効用は、人の心を混乱状態に陥らせるというものです。魔法だと、補助系魔法の「コルフユ」ですね。サツキさんはこの花を飲まされたようです。混乱した状態で、なおかつ眠っていたサツキさんは、眠りから覚めても、混乱した状態が続いていました。で混乱状態も治り、館から救出されたんですが、外傷は全くありませんでした。煤だらけでしたけど。しかし、なかなか起きないし、でもこのまま宿にいるからといって早く起きる、という訳ではありませんでしたから、ならば、と馬車に乗って、王宮に向かってしまおう、ということになりました、今に至ります」

「はい、質問」

「却下です。先程禁止しました」

「混乱状態はどうやって治したの？」

「だから、却下です」

「ぶーぶー」

そんな不穏な空気の中、馬車が森を抜けた。

窓の景色が森の木々の色から、一気に青い空へと変わり、太陽が眩しいくらいに輝いている。今日もいい天気です。

空の青。うーん、ちょっと違うかな、こっ、もう少し濃い……。ん？ わたし何を考えている？

遠くの木々の隙間から一瞬海が見えた。あ、海の色、そんな感じの蒼。うん。

「海の蒼、だ」

サツキは自然と笑顔になった。

突然何事かを呟いたサツキに訝しんだ視線を向けたロブだったが、サツキの笑顔に、ロブも笑顔になった。

「・・・お〜じよ〜お〜」

あ、モスくん復活です。おめでとう。パチパチ。

「あー、あー、なんか気が動転してたみたいで、つい、蹴っちゃって。ごめんねー（棒読み）」

「いや、いいんす！ お嬢が無事なら、あっしはそれで！」

ロブくんが、生暖かい目をした笑顔で見守ってくれています。

あーなんだかんだで和みます。この空気。

「モスくん！」

「もす！」

「モスくん！」

「もす！」

「ロブくん！」

「・・・なんでしよう」

ああ、その呆れた目、和むわあ。

そこは「ロブ！」で返してくれたらなあ、と思ったんだけど、ロブくんはロブの2文字しか名前がないから、わたしが「サツキ！」って返事するのと一緒になるのかあ。それは変だなあ。なんか違うなあ。ひらがな表記にすればいけるかなあ。「ろぶ！」あ、いけそうです。

「ねえ、ロブくん」

「・・・却下です」

う、最初の頃の小動物ロブくん、どこ行ったの？ 彼を返して！

・
・
・
・

「ああ、そうでした。サツキさん」

はい？

「明日、王領に入りますから、そのつもりで」

ん？ 明日？

「お嬢、丸々2日眠りこけてましたからねえ」

うお、マジ明日？

ついに魔王と対決ですね！

腕がなります、はい！

13：「ハンナ、人生の分岐点」の巻

ロベルトは時計を見た。19時45分。アルが執務室を飛び出してから、丁度1時間が経っていた。

あと15分でこの部屋を閉める時間だ。

ロベルトの使用している副執務机は、扉を左手にして、正面やや右に主執務机があり、全体を見渡しやすい場所である。右後ろの扉を開ければ、小食堂がある。8人程度ならば問題の無い広さがある。そのまた先にある扉を開けば、給湯室があり、軽食程度ならば、十分その場で作れるようになっていた。

窓や棚等の鍵確認済。備品消耗品在庫確認済。明日分の書類不備も確認した。ランプはこの部屋には4台あるが、既に2台は消している。

点いているランプの1台は主執務机にあり、もう1台はこの机の上に置いてある。

あとは、主執務机の上に置いてあるランプを消したら、最後のランプを持ち、扉の鍵を外から掛ける。それで本日の仕事は終了である。

ちらり、時計を見る。19時49分。

するべき事が無い場合、時間の進み方は、永遠に続くのではないかと思う程長く感じる。ぼんやり過ごすやり方の方からないロベルトにとって、このような時間は苦行になる。壁に掛けてある剣は、全部で5本。1本足りないままだ。

19時51分。

棚のガラスを拭けば時間はつぶれるが、しかし、10分以内には不可能と判断する。

19時55分。

自分の眼鏡を拭いてみる。

再び眼鏡を掛けた瞬間、右後ろの扉の向こうから、何やら物音がした。ロベルトは立ち上がり、扉をゆっくり開き、ランプを小食堂への中へと掲げた。

息を短く吸い、慌てて駆け寄る。血だらけの主の下へと。剣が二本刺さっている。

「アル、どうしましたか、大丈夫ですか！」

廊下から、その声を聞きつけた衛兵が駆け寄る足音がする。

ロベルトはその衛兵に向かい「魔道医師を呼んでください！」と叫ぶ。「はっ！」と返事があり、足音が遠ざかる。

アルは意識を失っている。脈はある。少し浅いが呼吸もしている。蒼白い顔のアルは、まるで4年前のあの時のようだ。

背中に背負っている長剣を外し、脇へ置く。ワイシャツのボタンを3つ開け、顔や首元に流れる汗をハンカチで拭う。

左脇腹と右肩にある剣は、抜いてはいけないと分かっているのに、その痛々しさに早く抜きたくなる。

体温が冷たくなっていくように感じ、思わず震えがきた。呼びかけを続けながら、他の箇所にも怪我がないかを調べていると、回廊に面した扉が開いた。

「遅い！」

ロベルトは、駆け寄る医師たちに、半ば叫びながら言った。

医療室のベッドに横たわるアルの隣で、窓の外が明るいことに気付いた。腕の時計を見ると、すでに7時半だった。傍らのランプの火を吹き消す。

一時はどうなることかと思っただが、途中でサミエルも来てくれ、処置は順調に終わった。流石のアルも剣を引き抜く瞬間は、痛みを堪え、その表情を険しくした。大量の血が噴出した時は、ロベルトの胸に不安が巣くった。

ロベルトは、端整な顔立ちのアルを見ながら、昨日の夜中の事を思い出す。

魔まされたアルの発した言葉は、

「……姉さん、ど……うして」

彼もまた、あの4年前に縛られているのだろうか……。

ロベルトもまた、呪縛に囚われた一人だ。彼の姉に一太刀を入れたのは、自身の愛剣だからこそ。

彼女の所業を止められなかった一人として、その罪は償わなければならぬ。

ロベルトはひとつため息を落とした。

そして、アルの状態が安定していることを確認すると、本日の予定を変更するべく執務室へと向かった。

重い瞼を開けると、見覚えのない天井が見えた。治療を受けた記憶がうつすらと残っている。ここは医療室だろうか。

ふとサツキのことを思い出した。彼女は無事だろうか。

左手を動かし、そつと右肩にふれる。さすが王室魔道医師といったところか。触った感触では、刃が刺さっていた場所が分からない程だ。左の脇腹もさすってみる。こちらも右肩と同様の仕上がりだ。力を入れてみる。痛みはない。身体に掛けられていたケツトを剥ぐと、起き上がる。小さな病室内には、誰もいなかった。少しふらつく。体中がだるい。微熱があるようだ。

右手にある机の上にある時計は10時5分を指している。身体は下着のみを着けている。床を見ると一足の白い布製靴があった。とりあえずそれを履き、さつき剥いだケツトを身体に巻きつけ、左肩で結ぶ。

その時に、右手の小指に嵌めてある指輪が見えていることに気付く。普段は幻術で見えないように隠してあるものだ。ベッドに浅く腰掛けた。王印でもあるその指輪に左手を添えると、唱える。

「『ベール』」

途端、頭がふらつき、右手をベッドにつけ、倒れこみそうな身体を支えた。呼吸が荒くなる。静かにゆっくりと深呼吸をする。

右手を見ると小指には何も見えなかった。少し不安定な状態にみえる。もう少し調子が良くなったら、再び術のかけ直しをしよう。今はこれで充分だ。

治療で大量の魔力を浴びたらしい。どうも「魔力当て」を引き起こしているようだ。

足を床に下ろしたまま、上半身をベッドに横たわらせ、目を瞑る。

魔道見習い医師のハンナはわずかに眉をしかめながら、療養棟の廊下を歩いていた。

(聴診器くらい、違うものでもいいじゃない)

魔道医師のセアラから、机から聴診器を取って来いと命令されたのだ。

(自分で取ってくればいいのに)

完全に嫌がらせな、その命令にハンナは文句もいえない立場上、彼女の事務室へと向かっている。

セアラの事務室を開ける。机の上には何もない。開けられる引き出しの中や、棚を覗いたが、聴診器は見当たらなかった。実は、セアラは聴診器を忘れてなどいないのだから、無いのは当然であるのだが、それを知らないハンナは、せっせと探す。

やがて、諦めたハンナは廊下に出ると、医療棟に向かった。

見つからなかったというハンナにセアラが浴びせる言葉を思うと、嫌な気分になった。

ふと、右手の医療室に人の気配を感じ立ち止まる。ノックをしてみることが、中からは反応がない。

ハンナはゆっくりとその扉を開けると、顔だけ中に覗かせた。ベッドに誰かが寝ている。ケットを身体に巻きつけて寝ているその男は、足を床に下ろし、右半身を下にした状態で横たわっていた。その無理な体勢では寝づらいだろう。直してあげようかと、ハンナは声をかけたが、男は起きなかった。

真横を向いた顔は、赤み掛かった金色の髪が、半分以上被さっていたが、それでも彼の造型が非常に整ったものであることが窺える。適当に巻きつけた様子のケットから出ている部分は、彼の肉体が遅しいものであることが分かる。

(うわ、今まで見た中で一番いい男かも)

と思いながら「靴脱がせますねえ」と、小さな声で言うと、片方ずつ靴を脱がせた。

そして両腕で、彼の両足をはさみこむように持ち上げると下半身をベッドの上にあげた。

すると、男は寝返りを打ち、天井を向いた状態になった。長い右足はまっすぐに伸ばし、左膝を立て、右手の甲を額につけ、左手は臍の上あたりに置いている。前髪がすべて右手によって上に押さえられたため、彼の顔全体が晒された。

その顔を見たハンナは自分の頬が熱くなるのを感じた。

(いい男とかいう次元の話じゃないわ、これ)

まさに神がかった造形のその男を、冥福とばかりにガン見する。

(でも、目開けたら案外、変だったりして)

思わず「ふふふ」と笑いを漏らしたハンナの目に、彼の瞼が持ち上げられていくのを捉えた。綺麗な蒼い瞳が薄っすらと開けた瞼の隙間から覗かせた。天井を向いていた瞳がふと右に動き、ハンナを捉えた。

ハンナは思わず目を逸らす。

(ちよ、直視出来ないんですけど)

心臓の音がバクバクうるさい。

男は赤らめた顔のハンナの様子を特に気にすることもなく、視線を右にずらすと男は言った。

「その紙取ってくれ」

ハンナは机の上のメモ紙を取り、男に渡す。そして、その動作を自然と行った自分に驚いた。

男は手にしたその紙で自分の右手の甲を抑えながら、ちらりとハンナの胸の名札を見た。男は言った。

「ハンナ＝スコット。悪いが、執務室に行つて、ロベルト執務官をここに呼んでくれ」

と全然悪く思っていない口調で言いながら、メモ紙を小さく折り畳

むと、ハンナにそれを渡す。ハンナはその折り畳まれた紙に目をやる。

「それはロベルトか、部屋の前にいる衛兵に渡してくれ。中は見るな」

ハンナは「分かりました」と頷き、廊下に出た。そして、男の名前を聞いていないことに気付き、再度、扉を開け、頭だけ部屋の中に入れる。

「あの、お名前。何でしょうか」

「ステファノだ」

ハンナは扉を閉めると、中央棟に向かって歩き出した。

(貴族かしら。偉そうな態度だったけど、嫌な感じがしなかったな)

ハンナは執務室に続く回廊を歩きながら、今更ながらに緊張していた。すれ違う人たちが、なんだか優雅な方たちばかり。しかも、なんだかすれ違ったびに、不審な目を向けられるのは、何故？

大体、中央棟の受付にロベルト執務官の執務室の場所を尋ねただけで、何であんな睨まれなきやいけないの？

ハンナは執務室の前に頓挫する二人の衛兵に近づきながら、愛想笑いを浮かべた。衛兵も上から下までじっと観察する目でハンナを見ている。まるで不審者のような扱いに、眉を寄せる。それを払拭させるべく、こほんと咳をすると、手前の衛兵の前に立ち、ハンナの中で一番丁寧な言葉で言った。

「魔道見習い医師のハンナ」スコットと申します。ステファノ様か

ら言伝を預かつて参りました。ロベルト様はいらっしゃいますか？」

ハンナの言葉に、衛兵は少し態度を軟化させると、言った。

「何か、証明するものはございますか？」

ハンナは手にした折り畳まれた紙を衛兵に渡した。衛兵は小さな紙を広げ、中を確認すると、ちらりとハンナを見た。その視線は先程とは打って変わった友好的なものだった。再びそれを元のように折り畳んでハンナに返した。

「失礼致しました。少々お待ちください」

衛兵は扉をノックした。「はい」と声が聞こえると、「ステファノ様からの使いの者がいらっしゃいました」と、衛兵は言った。すると、中から扉があき、背の高い眼鏡の男が出てきた。

(今日は、美形デーかしら)

いかにも紳士然とした人だ。ハンナは聞いた。

「魔道見習い医師のハンナ＝スコットと申します。ロベルト様でし
ようか？」

眼鏡の奥の目が少し見開かれると、「はい、そうです」と頷かれた。

「ロベルト様を医療室までお呼びするように、と言伝を頼まれました」

ハンナは紙を渡す。ロベルトはそれを広げ、中を確認すると、衛

兵と同じ反応をみせた。それから、ハンナにお礼を言い、彼女と共に東の宮入り口まで行き、そこで別れた。

美形デーに浮かれていたハンナは、セアラの厭味も聞き流せ、思いのほか楽しい一日となった。

実はこの日の出来事が、彼女の人生の大きな分かれ道だった。そのことにハンナが気付くのは、そう遠くない未来である。

14：「以心伝心」の巻

「入れ」

その声にロベルトが医療室に入ると、そこにはすでに先客がいた。サミエルとフライである。アルはベッドの上で、胡坐を掻いている。まだ少しだるそうな様子だったが、その様子にロベルトは安堵した。そんな思いは微塵も見せず、ロベルトは言った。

「お呼びだそうで」

アルはケツトを纏った自分の姿を一瞥すると、

「着替えが欲しい」

と、言った。ロベルトは、少し声を低くし言った。

「あの内容と共に、そちらも書いてくだされば、手間が省けたのですが」

「ああ、すまん。で、お前はどう思う」

「そうですね、よろしいかと思えます」

ロベルトのその答えに、アルは満足気な表情を浮かべる。

「よし、決まりだな。後は任せる」

「はい。それでは行って参ります」

ロベルトは一礼して部屋を出ていった。

二人のやり取りを眺めていたフライは机に肘を突きながら言った。

「しかし毎度のことながら、よくそんな少ない言葉で理解出来るよな。普通、突然」で、どう思う」「って聞かれても、「え、何が？」「って返すぜ」

「それは、しょうがないでしょう。私たちは彼らではないのですから」

窓際にもたれて立っているサミエルが言った。

「ところで、ペンが止まっていますが、よろしいのでしょうか？」

はっと、フライが目の前にある紙に向かう。エストニア侯爵の引き起こした事件についての報告書だ。

重要証人であるアルに対して調書を取るために、フライはこの部屋を訪れていた。

ちろとフライはアルを見る。

「『^{かげ}翳』使ってたなら、言えよ」

『翳』とは王家の持つ近衛六番隊の俗称である。

彼らは、一般兵と違い、代々翳として生まれ翳として死ぬ。どこかに彼らだけで暮らす集落があるらしいのだが、王家でさえその場所を知らなかった。

主に隠密行動を得意とし、偵察任務に当たることが多い。この国、

いやこの世界にどこにどれだけ、彼らが散らばっているのかは、翳の長のみしか把握していない。

彼らの使う術の中には、遠方のものと連絡を取る手段があり、今回、フライたちの行動はアルに筒抜けであった。

実は元々アルの命令で、『翳』のひとりだが、サツキたちと同じ宿に停泊していたのだが、彼もまた、他の皆と同様に眠りコケた為、今回、彼は罰則をくらうことになった。

「お前が去ってから、翳の報告があったからな。言う暇がなかった」
アルのその言葉にむっとするフライ。

「六番隊が絡むと、お前はいつも不機嫌になるな」
「正面突破が好きなフライですからね。六番隊のやり方が不服なのでしょう」

サミエルは、やや可笑しげに言う。それに対してアルは固い表情で言う。

「それが必要な時もある」

特に政治の中では。4年前も、彼らは活躍した。彼らがいなければ、アルは今存在していなかった筈だ。

沈んだアルに気付き、フライは言った。

「それは分かるけどよ。まあ、なんだ、俺は俺のやり方でいくぜ」

それから長い時間息をつき、フライは渋顔で言う。

「でもな、あれ、幻術？ あれはないわ、マジ死んだと思った」

「ああ、そんな顔していたな、お前」

アルは片方の口を持ち上げ、可笑しそうにフライを見る。

「ああ！？ んな顔してねえよ！」

顔を赤くし、フライはがたと音を立てながら、椅子から立ち上がる。

「なんの話です？」

「お前にも関係ない」

サミエルの言葉にフライはしつしと手を振る。なおも追求するサミエルに、フライは「うるせえ！」と怒鳴り散らす。

そんな二人の様子を眺めながら、アルは思い返した。

サツキを正気に戻すため、アルは幻術を使うことにした。

サツキにアルの長剣が刺さったと思わせるように。一か八かであった。

だが、そこで誤算だったのは、術を使うために、注意が逸れ、サツキの素早い突きの攻撃を避けきれず、左腹を刺されたことだ。

すると、彼女は自分の腹とアルの腹を見比べ、その瞳が不思議そうな顔をした。まだだ。もう一度、幻術を使う。

彼も彼女も死んだように。

彼女は意識を失った。直前、正常な漆黒の瞳が確かにそこにあった。成功だ。

ほつと息をつき、己に刺さった剣の柄を、彼女の手から外そうと
しているところに、フライが現れた。

なんだか、様子がおかしい。突然泣き崩れたフライを見ながら、
思い立つ。幻術を解いていなかった、と。

疲労困憊していた。転移魔法は、自分ひとりにはしか効かない。少
女をあの場合から運ぶのには、難儀しただろう。フライが来てくれて
助かった、と思う。

フライが号泣したことは、

(サミエルには黙っておいてやる)

と、いまだ言い争う二人を見て思った。

ここは、王宮内部にある第二鍛錬場。本日午後からは、第三騎士
隊が使用している。

「おら次、来い！」

先程から、声を張り上げているのは、我らが隊長フライである。
その鬼気おにけとした様子に、隊員たちは震え上がる。すでに動けなく
なった隊員があちらこちらで呻いている。

三番隊は隊員8名、見習い隊員76名が在籍している。

機嫌の悪い、彼の餌食になったのは、隊員8名だったが、それで
も納まらず、すでに半数の見習い隊員に魔の手が伸びていた。

その様子にくすくすと笑いを漏らすのは、彼の機嫌を悪くした張本人サミエルである。

そんな彼のすぐ隣の壁に、フライに投げ飛ばされた見習い隊員が叩きつけられた。サミエルは呻く彼に軽く手を当て、『アンケア』と唱えた。たちまち彼の傷が癒される。

「はい、行ってらっしゃい」

その言葉に、半泣きの見習い隊員は、やぶれかぶれでフライの元へと駆けていった。

「ぎゃーー！ー！」

フライの槍の一振りに彼はまた飛ばされていた。

「なんだか、すごい事になっているねえ」

サミエルが横を見ると、ブライム公爵が立っていた。その気配を捕らえられなかったことに、元騎士団団長の名は伊達ではないと、サミエルは思った。

「ええ。今日の彼はやる気が余っているみたいで」

にこりとサミエルは返す。

「それにしても、君に会えるなんて珍しいねえ。ほとんど王宮に顔を出さないだろう?」

「ええ、姿を見せると、少々口うるさく言う方がいらっしやいますので」

その返事にプライム公爵は笑った。

「親というものは、いつまでも息子を叱咤するものだよ。今も君に自分の居場所を譲ろうと、色々と画策しているようだしねえ?」

サミエルは苦笑いした。

「あまり乗り気はしないのですが」

「そうかい? 君の魔力は当代きってのものだって噂じゃないか」

「噂はあくまでも噂ですよ」

「まあ、君がそういうのなら、そういうことにしておこうか。ところでうちの娘、マリアンヌは君の伴侶としてはどうだろう?」

その突然の申し出に、さすがのサミエルも目を丸くした。アルの従兄弟であるマリアンヌは、アルの正妃最有力候補といわれている人物だ。

(黒髪のアビスが現れたことで、早々に次にあたりを付け始めたか。流石といふかなんというか・・・)

「ふふ、ご冗談を」

笑顔を返し、あのマリアンヌを娶るくらいなら、一生独身の方がましだと考えた。

(フライに押し付けよう)

「それより、未来の近衛騎士隊長などは、いかがでしょう?」

ブライム公爵は、

「そうだねえ、彼も顔がいいものねえ。・・・もう一度マリアンヌに聞いてみるかな」

と言った。その言葉に、サミエルは、思った。

(候補の重要性は、顔ですか・・・)

ふと、真面目な顔になったブライム公爵は、言った。

「ところでやはり、君の噂は、本当なのかな?」

「何の噂でしょう?」

サミエルは首を傾げる。

「うん、君が男色家だという噂をね、たびたび君の父親から」

サミエルはふふと笑う。

「」想像にお任せしますよ」

ブライム公爵は笑った。

「ならば、そうなのかな？」

二人は、笑いあつた。その目はまったく笑っていないが。

瞬く間に、周りに黒いオーラが撒き散らされた。

見習い隊員をしごいていたフライは、その雰囲気思わず訓練の手を止め、笑いあう二人の様子にただ固まっていた。

(怖えよ、おい・・・)

15：「お魚くわえたドラ猫」の巻

「僕は領内に入る、と言っただけですけど？」

ロブは心外だというように、眉を顰めた。

「うん、言った。言っただけだね・・・」

サツキは言った。

「でも、王宮までさらに一日かかるなんて聞いてないけど、ないけどお～～～～」

「距離的には、半日なんですけどね。でも、王宮内に入るのに、手続きがありまして、それでまた半日かかる訳でして、なので、今日は宿を取る必要があるんです」

そう言ってロブは、城下町の宿の待合室ではたばたしているサツキを嗜めた。そして、サツキたちを宿の部屋に押し込めると、笑顔で言った。

「と、いう訳で、私はこれから手続きに言って参ります。じっとしててくださいよ」

扉を閉めたロブに、サツキはまだぎゃーぎゃー騒いでいる。

「これってさ、軟禁だよな。いわゆる軟禁状態ってヤツだよなえ？」

傍らにいるモスくんに訴える。

「う〜ん、もす？」

「ん？ なんなのモスくん、その返事は！」

サツキの厳しい目にモスリンドは、ため息をつく。

「いやあ、だってお嬢、いっつも、ふらふらどっか消えちまうじゃないっすかあ。誘拐までされたつつうのに、こっちの身にもなっただけで欲しいっていう・・・」

モスリンドは、はっと表情を蒼くする。サツキのうるうる涙目の表情に。

「・・・かなんというか、そうっすねえ、ちょっとぐらい観光したいっすよねえ・・・」

サツキはうる目でモスリンドを見上げながら言う。

「まあ、今の格好なら、危険は少ねえかもしんないっすねえ・・・」

サツキの今の格好は青いワンピース姿であるが、髪の色は薄茶色で、瞳の色もこげ茶色になっている。

なぜなのかというと、城下町では「黒髪のアビス」の噂がすでに広まっているらしく、道行く人がサツキの黒髪黒目に注目してしまっただけである。次々声をかけてくる人たちに辟易し、サツキは髪と瞳の色を変えることにしたのだ。

「じゃあ、観光、行って、ヨイ？」

その言葉に、モスくんは頷くしかなかった。サツキが「技：おねだり」を使用したことも気付かずに……。

「ちよつとだけっすよお……」

ちなみに「技：おねだり」は小悪魔資格で最初に覚えることの出来る技である。他にも「技：無邪気」や「技：メツシー君」などがあり、小悪魔は娘たちに人気の資格だ。

それぞれに対抗する技はあるが、そちらは覚えるのが困難という状態だったりする。近年では、法律で制御しようとする動きがあるが、法案を出すのは男性に限られている。

城下町に出たサツキは、外に出て10分もしないうちに、モスくんとはぐれる。

「あれ、モスくんどこ？」

ただ、一本道の坂をきくと駆け下りただけなのに……。とマツハで走ったサツキは思う。現在モスくんは、3キロ後方で座り込んでいる。港が見たいと言ったから、後で追いつくかな、とサツキは大して気にせず港を探索することにした。

流石、王領管轄の港である。午後だというのに、今から漁に向かう船や、国外からのフェリーが到着したり、港は大きな賑わいを見せている。

食堂や土産物屋も軒を連ねている。

魚市場は終盤を迎える様子で、片付けをする人たちが多い。

みゆ〜みゆ〜とウミネコが鳴いている。と思いきや本当の猫の声だったりする。

魚をより分けている漁師のそばで、傷の入った魚を漁師がぽいつと投げるたび、周りに集まる猫が取り合いを始める。見事勝負に勝った猫は一目散に走り去る。

う〜ん、サバイバル。まるでお相撲さんの投げる、豆まき行事を見ているみたいです。

お魚くわえたドラ猫を追いかけずに、視線だけで追ってみると、その先にどうみても怪しい人物がいます。若い娘さんです。

なにが怪しいかというと、木箱と木箱の隙間で、海の方をかがみこんで見ているその動作がです。

じーっと見ていると、突然娘さんはダッシュしました。あ、停泊している大きな船に乗り込みました。警備の人、ぼんやり、空を見ています。だめだめです。あ、つまみ出されました。中の人はきちんとお仕事していたようです。空を見ていた警備の人は叱られています。娘さんはぶんすかと地面をどたどた踏みしめながら、歩き出しました。

あ、そんな娘さんになにやら怪しげな男二人組が近づいていきました。娘は男たちとなにやら話しています。

もうちょっと、近くに行って聞いてみましょう。木箱と木箱の隙

間でかがみこんでいるわたしは、先ほどの娘さんのようです。わたしは怪しい人物になりました。うふふ。

「本当に、お金はいらないのね？」

「ああ、いいぜ。船はちょっと歩いたところにあるんだけどよ。それでもいいかい、お嬢ちゃん」

どうやら、船に乗る交渉をしているみたいです。怪しさ満載です。男たちは漁師にしては、少々ガラが悪く見えます。まるで、そう、海賊さんみたいです。

娘さんは、なんの疑いも持たずに男たちについて行きました。もちろんわたしもその後を付いて行きました。ハ技：尾行々を使っています。

娘さんたちは、岩場ばかりの場所に着きました。そこには、木造の小船がありました。10人程度乗れそうです。屋形船程度でしょうか。

娘さん、眉を寄せます。

「この船で行くのかしら？」

「ああ、そうだけ」

「嘘おっしゃい。これじゃ、違う国など行けるはずないじゃないです。それぐらいわたくしにも分かりましてよ」

娘さんは不機嫌な声で言いました。

娘さんはその話し方から、上流階級の方と見受けられます。サツキの持っていないハ技：お蝶夫人々をなんなく使われております。

ソンケー。

「ああ、そうか。もちろん、この船で他の国は行かねえよ。ほら、あの船まで行くんだ」

背の高い男の方が、遠くの海に浮かんでいる大きな船を指差しました。ええ、確かに大きな船です。

しかし、私はそれよりも、左手遠方の大きな船が気になって仕方ありません。海に浮かぶ大きな岩礁に、まるで隠れているように停泊しています。

「この船は、あの船までの渡し舟ってやつだ」

その言葉に娘さんは、納得した様子です。

どうしましょう。娘さん、乗る気満々みたいです。ああ、渡し木に足に乗せました。

「ちよ〜つと、待った〜！！」

もう、勇者としては見過ごせません。サツキは告白タイムの邪魔者の如く怒鳴りました。片手を高々と挙げて。

娘さん、危なくふらつきましたが、なんとか転ばずに踏ん張りました。娘さんは眉を顰めて言いました。

「な、なんですよ、あなた！いきなり声をあげたら、危ないですよー！」

「す、すいません。あ、でもね、その船に乗った方が危ない、かも

「？」

その言葉に二人の男が慌てだした。

「おい、コラ嬢ちゃん、変な言いがかりつけんじゃねえよ、ああ！？」

「誰の差し金か、知らねえが、邪魔すんなら、こっちにも考えがあらんぜえ？」

ずずずいっと、二人が娘さんの前に入る。

「ん？ よく見ると嬢ちゃんも、なかなかの別嬪さんだなあ」

「そうですねえ。このまま連れてっちゃいましょつか？」

あら、やだ、そんな。と別嬪さんのワードにサツキはうふふと笑う。

そうでしょそうでしょ、パーツはいいのよ。パーツは。自分でも目は大きい方だと思っし、まつ毛もくるんとしてるのよ。

写真写りなんてそりゃもう、最高なんだから。で、「この子誰？」って、実際会ってやったら、な〜んで、みんな引き攣るかなあ〜。ホント、失礼しちゃうんですけど。

「・・・あなたの百面相顔、とても気持ち悪いですわよ」

娘さんがぼつりと言う。

その声にはつと我に帰ったサツキ。あれ、この場所は？ 海の上

？ なんで？ あれ、ご丁寧に縛られています、わたし。あ、娘さんも縛られています。

ぎこぎこ小船が揺れてます。

「んNO~~~~~!!」

サツキ、立とうとしましたが、が、転びました。足まで結んでたんですね。用意周到です。

しゃくとり虫の格好のサツキに向かって娘さんが言いました。

「ホント、あなたには呆れましたわ。一体これからどうするおつもりですの」

流石、高飛車お嬢様です。自分のことは、さっぱり棚に上げております。サツキ、やっぱりソンケーです。

「とりあえず、そうですね。・・・二人を倒しちゃいましょう」

にっこりと笑うサツキに、胡乱な目を向けた娘さん。

☆技：縄抜け☆ ☆技：萌えよドラゴン☆ ウマー

瞬殺です。仕上げは娘さんの縄を解きます。風圧に舞い散らした金髪がゆっくりと、元に戻っていきます。

娘さん、目を数回瞬しばたきました。はっと、手の次に、足の縄を解いている私を瞬まはたきもせず見つめています。

「あ、あなたが倒したの？」

船の舳先へらの男と艦とこにいた男は、二人とも伸びています。

「はい、そうです。ウマーです。お茶の子サイサイです。女勇者ですから、わたし」

にここに笑うサツキに、娘さんは、

(この年で、勇者とかおっしやるなんて……。少しイタイ子?)

可哀想な子を見るような目でサツキを見ました。

(確か、こういう子には、優しくしてあげなければ、いけないのよね)

サツキは男二人をおしおきのために、近くの岩礁の上に放り投げると、にっこりと言った。

「じゃあ、岸に戻りましょう」

「ええ、そうね」

娘さんは自愛に満ちた笑顔で、言いました。

(それから、否定してはいけない……。それと……。暴力を与えてはいけない……)

娘さんは過去に教会のマザー・タバサから教わったことを、思い出しています。あごに人差し指を当て、小首を傾げています。

サツキは「技：モーターエンジン」を使いました。まるで競艇のように、波を割り、小船は舳先を浮かせて走り出しました。

「ぐええあらあぎょうがg・あpgはyたあっ!!!!」

徐々に岸が近づいてきました。そこで、ふとサツキは思いました。

(止め方って・・・どうやるんだっけ?)

小船はそのまま岩場にぶつかり、粉々に砕け散りました。

ぶつかる直前、サツキは娘さんを抱いて、跳躍しました。ぐんぐん上がっていきます。キラんと光の粒になりました。

3秒後。

あ、二人が見えます。

今度は降下してきます。だんだん、娘さんの声が聞こえてきました。

「あああああああああ!!!!」

大絶叫です。回した腕が、サツキの首を絞めすぎているようです。サツキの顔が白いです。どーんと、地響きを鳴らし、地面に到着です。

サツキは、娘さんを地面に降ろしました。

「ふー、死ぬかと思ったあ」

と、けほけほ咳をしているサツキに、娘さんは叫びました。

「それはこちらのセリフですわ！……！」

しごく、もっともなご意見です。

アルは五番隊の報告を聞いていた。

「つまり、見失った、ということか」

いまだ、つらつら言葉を重ねる隊長サントムのそれを手で制し、アルは言った。

「はっ！……申し訳ございません！」

隊長は頭を下げる。

「俊足」の異名を持つかれらが撒かれたのなら、どの隊でも結果は同じであつただろう。

「見失つたことは、仕方がない。お前たちに落ち度はない」

アルの言葉に、隊長はあきらかにほつとした表情をした。それをアルはじつと見る。

「だが、何故今、お前はここにいる？」

その低い声に、隊長は体を固くした。

「ここでぐだぐだ言っている暇があつたら、搜索隊を結成しろ！お前も探しに、とつと行け！」

怒号を浴びせられながら、隊長は「は、はい！」と慌てて執務室を出て行った。

不機嫌な顔をしたアルに、ロベルトは口を開いた。

「ひとつ、ご報告が」

「なんだ」

「南棟の申請発行所に、ロブ＝フリッシャーが到着しました」

「・・・そうか」

どうでもいい情報だった。

「優遇処置は、取られないのですか？」

「・・・いや、必要ない」
「そうですか」

アルはいらいらした様子で、手元の書類を読む。頭に入らない様子で、何度も読み返している。

アルはふうとため息を付いた。そして、

「なにが言いたい。言え」

と、視線を書類に向けたまま言った。

「そうですね。本日の執務は終了なさったら如何でしょうか。その様子では、効率が悪いかと」

その言葉に、アルはぎゅっと固く目を瞑った。やがて、目を開くと、手にした書類を机の上に置き、立ち上がる。

「そうする。　　少し出掛ける」

ロベルトは一礼した。その横をアルが通り抜け、コートを羽織った。

「わたしは、サツキっています。女勇者として召喚されたはずだっただけ、今は単なる観光者です！」

「そ、そうですの・・・わたくしは　　マリア・・・リアンです

わ!」

「マリア＝リアンさん?」

「いいえ! リアンですわ!」

逆立った髪を直しながら、なんとか自己紹介をした二人。

なぜ、違う国に行きたいのか尋ねてみるも、リアンの返事は要領を得ません。最終的には、

「どうして、あなたに話さなければなりません!?!」

と、ぷいと横を向いてご立腹です。またまたソンケー。

「えと、わたし、助けた、アナタ」

「そ、それは、感謝してますわ」

そんな二人の元にいい匂いが届きました。二人のお腹が同時にぐうと鳴りました。

「とりあえずは、腹ごしらえ、ですね」

「ええ、それでよろしくてよ」

二人は近くの食堂へ、足を踏み入れた。時刻はまもなく正午を迎える。

デザートはリアンが払ってね。それから」

そこで、リアンがきよとんとした顔をする。

「あら、お金、必要ですか？」

「え？ 必要に決まってるでしょ？」

すると、リアン様はおっしゃいます。

「いやですわ。わたくし、お金がないから、船に乗れなかったのではなくなつて？」

うん。まあ、そうです。はい。

「こちらの支払いは、サツキ様がお支払いになってくださって、よろしくてよ」

おほほと笑う。サツキも負けじとうふふ、と笑う。うふふ、おほほ、あはは、いひひと笑い合う二人に、食堂内の空気が不穏なものに包まれてゆきます。

その重い空気に、食堂内の人たちがテーブルに突っ伏しています。

白旗を振ったのは、サツキであった。兎にも角にも、このお嬢様は、お金を持っていない。わたしは、持っている。わたしが払う。それしか道はない。サツキは思った。淑女である意味最強だと。

「・・・女将さん、勘定お願いします」

「はじめから、そうしてくださればよろしかったのに。とんだ時間の無駄でしたわね」

にこりとリアンが笑う。淑女の微笑みである。

「わたくし、外で待っていますわ」

と、彼女は出ていくと、女将さんが、サツキのことをかわいそうな瞳で見してきた。

「あんたも、もう少しお友達を選んだほうがいいよ」

名も知らぬ女将にそう言われ、サツキは、そうか、リアンはお友達だったのか、と思った。

外に出たリアンは、港を眺めながら、

(さて、これからどうしましょうか)

と考えていた。

リアンは家出娘であった。昨日の夜、父親に言われたことに腹を立て、寝て起きても怒りが収まらなかったため、今日、衝動的に家を飛び出した。

服は侍女のものを奪った。泣き崩れる彼女に、リアンの服をあげた。

途端に泣き止んだ侍女に、リオンは少し呆れた。

とにかく遠くへ行きかけた。

そこで、遠くの国に行きましよう、と思い立ち、港へと向かった。途中で港まで行く「乗合馬車」が通りかかり、リオンはそれに乗ったのだが、少し走ったところで、「お金が必要なの？ でも、わたくしお金など持っていないせんわよ」というと、その場で降ろされた。

まだ200メートル程しか、走っていなかったので、ちよつとがっかりした。

でも、なぜそんなにお金が必要なのかしら。まさに貴族なりオンは思った。

やっと港に着いたのだが、船に乗るのもお金が必要らしいと分かり、庶民というものは、まったく卑しい人間だと思う。わたくしなら、困っている方がいたら助けるわ。そこにお金が必要だなんて思わないのに。

ならば、こつそり乗ってしまえばよいわと思いつく。いそいそと木箱の隙間に隠れると、大きな船に乗ろうとしたが、すぐに見つかり、追い出されてしまった。わたくしの話も聞かず、一方的な態度はいかがなものかしらと、立腹しましたわ。ええ、それはもう。

そんなわたくしの様子に、ああ、神様は見捨てはしなかったのですわ。

お金はいらないとおっしゃる方がいらしてくれたの。少し、口の悪い方々でしたけど。すごく臭いましたけど。けれど、とてもいい方たちだと思ったのよ。それなのに。

「あは？」

右手の方向に、少女が歩いているのを見つけた。青いワンピースを着て、薄茶色の髪をしている。すたすたと歩いていく彼女の姿に、リオンはその姿を追いかけた。

「どちらへ行かれるんですの？」

リオンが声をかけると、彼女は振り返った。

「はい？」

戸惑った様子の彼女にリオンは、左右の腰にそれぞれ手をあてて、心持ちあごを持ち上げる。

「支払いは済みましたの？ わたくしずっと待っていましたのよ？
何も言わずに行かれるなんて、ひどいじゃありませんの」

そんなリオンにまたしても、彼女は戸惑って言った。

「あの、人違いでは？」

その言葉にリオンは目を丸くすると、その少女を上から下まで眺める。薄茶色の髪色、胸のあたりまで伸びるその長さ、瞳はこげ茶色をしている。その顔立ち、そして青いワンピース。どこからどう見てもサツキである。

ふと、リオンは思い出した。

(そうでしたわ、サツキさんは、少しかわいそうな子だったではないの)

と。

(そうよ、否定してはいけないのよね、マザー)

そこまで考えると、リオンは微笑を返した。

「そうですね。人違いかしらね」

「いや、人違いじゃねえなあ」

突然のダミ声に、リオンは振り返る。なんと、先ほどサツキが痛めつけた男がいた。いつの間にか、周りを数人に囲まれてしまっている。

どうやら仲間を連れてきたらしい。男のひとりが言った。

「こんなお嬢さん方に、お前、やられちゃったのかあ」

と笑う声に、やられた男が言い返す。

「気をつけてくださいませ。あっちの娘が、異常に強いんですあ」

途端、男たちの視線が、その少女に集中する。

その視線を受けた彼女は、目を丸くし、顔を蒼ざめさせた。

「ま、待ってください。人違いです。わたし、本当に」

そのあまりの言葉に、リオンが言った。

「何をさっきからおっしやっていますの？ 早くこの方たちを倒しておしまいなさいな」

その言葉に、男たちの顔が気色ばんだ。

「おい、お嬢ちゃん。あんま、凶に乗ったこと、言ってんじゃねえぞ？」

リオンはその形相に、震えが走ったが、なんとか顎を上げて答える。

「あら、そのお言葉、そっくりそのままお返しいたしますわ」

次の瞬間、突然リオンはよろけた。

あら、どうしたのかしら、と思う間もなく、左の頬が異常に熱い。じんじんする。叩かれた。そう気付いた瞬間、目に涙が溜まる。

いいえ、泣いてはダメ。泣くものですか。

キツと、リオンは左頬を手で押さえ、相手の男を睨んだ。途端、今度は右頬を叩かれた。あまりの強さに、リオンは地面にそのまま倒れる。

リオンはそのまま意識が遠のくのを感じた。ゆがむ視界の先に、
いまだ微動だにしない、少女の姿を見つめつつ。。。

サツキが会計を済ませ、外に出ると、リオンの姿はすでになかった。周囲を見回してみるが、彼女の姿を目に留めることはなかった。

「あつれ〜？ どこ行っちゃったんだろ？」

サツキは思案する。

(リオンって、どうみても貴族だよねえ。このままほっておく訳には・・・)

「いけないよねえ、やっぱ」

女勇者の名にかけて！ なんちて。

ひとり決めポーズを模索しているサツキに、声がかかる。

「やっと、見つけた。こんなところにいたのですか」

振り返ると、そこには、20歳前後の優しげな男が立っていた。
サツキは首を傾げる。

「はあ、まあ・・・」

「勝手に出ていったから、皆、かんかんですよ。早く帰って謝った方がいいです」

男は眉を下げて言う。サツキは青くなった。

（は！ ロブくん帰ってきたの？ うが、そういえばモスクント、はぐれたままだった）

サツキは男に言った。上目使いに聞く。

「ものすくすく、怒ってる感じ？」

男は、苦笑いを浮かべた。

「僕も一緒に謝りますから。さあ、行きましょう」

男はサツキを1頭立ての馬車へと案内した。そして、サツキを車内に乗せると、自分は御者台に登り、手綱を握る。そして、振り返るとサツキに言った。

「少し、飛ばすから。気をつけて」

藍色の髪が揺れた。

「はい！」

とサツキは答えた。そして思った。

(この人誰?)

馬車は、港から続く坂道を駆け上がって行った。

宿に帰ってすぐに、嫌な予感がした。部屋をノックし、

「ただいま戻りました」

と中に声をかける。

返事のない扉を開き、中に入る。

ロブは半目になった。

予感は的中した。当たってほしくなかったのだが。

大きくため息をつく。

(外に探しに行きましょうか。それともここで待機した方が・・・?)

ロブは、1時間したら再び戻ることを決め、外に探しに行くことに決めた。部屋の扉に、

『サツキさんとモスリンドさんへ 帰ってきたならば、今度こそ部屋でじっとして下さい!』

と書置きを貼った。

そして、宿の外へ出る。

さて、サツキさんならどこへ向かうでしょうか？

ロブは辺りを見回した。左側の坂の下方には飲食店があり、その先には海が見えた。右側の坂の上方には、服や日用品などの商店が広がっている。また、左を見る。どちらも石畳が続いている。

城下町であるこのロックフォードは、なだらかな丘陵になっていて、下方は海が広がり、上方には山がある。上方最高峰に城が聳え立ち、その周りを貴族たちの住居が構えている。

そして中流家庭の家が軒を連ね、それから一般家庭が続く。

住居の構える高低さがそのまま庶民の地位を表わしていた。海側の一角には、スラム街があり、そちらの治安は最悪といえた。

現在、ロブたちの取った宿は一般区画に該当し、城と海との丁度真ん中にある、商業区である。周りは様々な商店が軒を連ねている。

(どこかのお店に入っているのでしょうか。まさか、海を見に行ったりしてないでしょうね)

サツキが馬車の中で「今年は一度も海に行かなかったなあ」とぼやいていたのを思い出し、はるか遠くに見える海を眺める。

するとロボの目に、下方からすごい速さで走る馬車が出てくるのが目に入った。ロボは道の端に避けながら、

(乱暴な運転ですね。危ないじゃないですか)

と、すぐそこに来ている馬車の御者台を見た。

まだ若い男が鞭をふるっている。藍色の髪が後方へその速さを示すかのように、流れている。

通り過ぎざまに、ロボはその男をぎっと睨んだが、その車内の人物に、目を向けることはなかった。

サツキは車内で何だか眠くなった。お昼をあれだけ食べて、血液が全て胃に回ってしまったらしい。まるで5時間目の授業のようである。もしくは、ねむねむオバケに触ってしまった。サツキの意識はそこで途絶えた。

馬車は、高級住宅の並ぶ一角で止まった。

「着きましたよ」

御者台から降り、馬車の扉を開けた彼は、サツキが寝ていることに気付いた。その寝ている姿に、彼は悲しそうな顔をみせる。そし

て、サツキの薄茶色の髪を一房取ると・・・そこで、彼は固まった。
寝ている少女の顔を覗き込む。

「エリザ・・・じゃない・・・？」

彼はそう発すると、しばし何かを考えを巡らすと、サツキを抱き
上げた。

17:「マ・リアン・ヌ」の巻

まるで彼女が二人いるみたいだ。アルは『翳』たちの報告を聞きながら思った。

『翳』たちは、丸い真珠玉くらいの玉を身体のどこかに埋め込むことによって、通信を行うことが出来る。

アルが手にしているのは、『翳』たちが、使用しているものより大きく、直径5センチ程の玉である。『翳』から連絡がある場合は、普段は透き通っただけの水晶体の玉が熱を持ち、光を放つ。アルがそれに触れた瞬間、そこに彼らの姿が映し出される。

『翳』族の代々の秘術がこの玉を生み出したことは、知っているが、どういった構造なのか、アルにはまったく分からない。魔法的な要素は一切感じられない。

その玉がここ数時間、頻繁に光るのだが、その報告を聞きたびに、アルの頭は混乱する。

彼女が発見されるのは、海側だったり、山側だったり、城のすぐ側だったりするのだ。時間的にみても、彼女が転移移動でもない限り、ありえない。

そして、先ほどの報告を聞くと、彼女は同時刻にまったく違う場所で見られていた。まるで彼女が二人いるのでなければ、おかしい。

五番隊には悪いが、今回のような事態には『翳』が一番適している。奮闘しているだろう騎士たちに、少しでも心で詫びた。さて、どちらに向かうのが、正解なのか。

アルは二つの選択に迫られていた。

頭を押さえた。「魔力当て」が完全には、直っていないにも関わらず、少し力を使いすぎたようだ。固く目を瞑った。

目が覚めると、そこは小さな部屋だった。

サツキは粗末な鉄製のベッドの上に横たわっていた。身を起こし、周囲をみる。窓がない。まるで地下牢のような作りだ。

部屋の中にあるものは、寝具と廁と小さな机と椅子。それだけである。すべて、鉄製だ。ひとつだけ付いているその扉もまた鉄で出来ており、扉には丁度、頭の高さの場所に、小窓が付いている。

その小窓には、ご丁寧に8本、短い鉄格子が嵌まっていた。明かりはその小窓から差し込む光以外、何もなかった。

眠る前は馬車の中にいたことを思い出す。眠っている間に、サツキをここに運んだのだろうか。でも、なぜ？ 藍色の髪あの男はと、彼の名前を知らないことに気付く。サツキはため息をついた。

うん、小さい頃に言われました。知らない人にはついて行っちゃだめだよ、と。

(うふ、ついてきちゃった、きゃは)

サツキは思った。心の中でぶりっ子をして、寒くなるのだな、と。

ぶるぶると身体を震わせていると、部屋の中が暗くなった。

扉の前に気配を感じた。扉に目をやる。見なきゃ良かったな、とサツキは思った。

小窓から、誰かが覗いていた。

怖っ！

思わず目を見開く。顔は、後ろから差し込む明かりに、シルエツトのみが分かる。なのに、血走った目が見えた気がした。その目にやりと笑った気がした。

「エリザ。気分はどうだい？」

サツキは答えた。

「わたしは、エリザでないんだけど」

「うん、知ってる」

その言葉に、サツキは首を傾げた。

「でも、君はエリザなんだ」

まるで禅問答のような言い方に、さらに眉を顰める。

「でも、わたしはサツキなんだよ」

サツキは、彼と同じように返した。

「そうか、君はサツキっていうんだ」

彼は笑った。

「でも、君はエリザなんだ」

まるで、メビウスの輪に入り込んだ感覚に、サツキは身体を震わせる。

「で、こいつが、無敵のお嬢さん、かい？」

男が、震える娘の顎をつかまえて、言う。もう一人の気を失った女が、両頬が腫れているのを見て、男は舌打ちした。

「おいおい、誰だ、お嬢さんに手を出したのは」

そういつて、男は椅子に座り、足を机の上に投げ出した。

「あ、いやあ、そのう………」

全員が目が一人の船員に集中する。その男が慌てて言った。

「いや、違うんですよ、ザツシュ船長。その女があまりにも生意気なことを言いやがって……」

ザツシュと呼ばれたその男は、その様子をだるそうに、斜めから眺めると、ひとつ息をついた。

「ああ、もう、いいわ。お前、一週間、船底の掃除！」

それから、まだ震えている娘を見ると、言った。

「とりあえず、このお嬢さん方は、牢に入れときな。身代金くらいは取れるだろう」

へい、という船員たちの声を聞きながら、ザツシュは一人考えていた。

情報屋が言うことには、めっぼう強い女、それが黒髪のアビスだと言っていた。さらに、その女は今、茶髪茶目の姿をしているとも。

ザツシュは、机の上に広げられた紙を手取る。ラフィーユで有名な絵師が描いたものだ。闘技場で活躍している少女の様子が描かれている。

(よく似てんだけどなあ……………)

おびえながら連れていかれる娘を見ながら、ザッシユは胸元をがりがり搔いた。

「で、俺にこいつと組めって?」

かなり渋い顔をしてフライが言った。そんな反応が返ってくることは予想済みだったが、アルは苦笑をもらった。

「ああ、頼む」

フライの隣にいるのは六番隊のいわゆる『鬚』といわれる隊長のヴァルタンだ。フライは彼らに対して軽い拒否反応を見せるのだが、今日もそれは健在のようだ。

フライのそんな態度にも、ヴァルタンは我関せずで鎮座している。

「それは、俺じゃなきゃダメなのか?」

「体格が似ているからな、楽なんだ」

アルの言葉にフライは眉を寄せる。

「・・・楽って・・・そんなんが理由かよ」

「ああ、それじゃあ、頼むぞ」

フライはまだ、納得していない様子だったが、事は急ぐ。アルは着々と準備を進める。

「・・・もっと、ほら、あるだろ？ 頼れるから、とかなんとか」

まだ、頭を掻きながら何か言っているフライだったが、アルの最後のセリフに背筋を伸ばした。

アルはただ、真面目に、

「フライ」

と、一言いったただけだったのだが、そのたった一言で空気が変わる、そんな言い方であった。

「・・・ん、ああ、じゃあ、さくっと頼むわ」

そういうと、フライは覚悟を決めた表情で、目を瞑った。

リオンは目が覚めた。塩の匂いがきつく感じられる。なんだか揺りかごに乗せられたような感覚がする。瞼を上げると目の前に、サツキの顔があった。そして、彼女は言った。

「あ、起きましたか？」

リオンはがばつと上体を起こした。くるりと振り向く。娘が、突然起き上がったリオンに驚き、まん丸な目をした。

リオンは軽く混乱していた。ここは一体どこなのか、何故、あなたはあの時何もしなかったのか、そして、何故わたくしが、あなたに膝枕をされていたのか。

声を出そうとしたリオンは、頬に痛みを感じた。

「~~~~~!!」

声にならない声を出すと、娘が心配したように言う。

「だいぶ腫れてますから、あまり話されない方が、いいと思います」

周りを見渡すと、ここは木造の部屋だった。小さな丸い窓が3つある。扉はあるのだが、リオンたちがいる場所からはその扉に辿り着くことは出来ない。

なぜならば、間に格子が嵌っているからだ。

少し困った顔をしながら、娘が言った。

「あの、マリアンヌ様。わたくしをどなたかと、ずっと勘違いされていらっしやるように見受けられました」

それに対して、リアンは驚いた。

「な、~~~~~!!」

再び、痛みに呻く。それから、口をあまり動かさないように注意を払いながら、リオンは言った。

「あなた、わたくしを知っていらっしやるの？」

「はい。先ほどまでは分からなかったのですが、マリアン様のお顔を拝見しているうちに、どこかで見たお顔だと……。なぜ今日はそのような格好を？」

リアン、いや、マリアンヌ＝ブライムは、彼女のその話し方に、やっと合点がいった。

「あなた、本当にサツキさんじゃ、ありませんのね？」

「はい、わたくしの名前はエリザベス＝ジャスティーンと申します」

本当によく似ている。エリザにそう言われても、頭のどこかで、やはりサツキなのではと、疑ってしまう。

エリザは言った。

「わたくし、このたびある方に交際を申し込まれているのですが、少し考えることがございまして、その、少し頭を落ちつきたいと……」

その言葉にマリアは驚いた。

「そうなんですの？ 悩むのならば、断っておしまいなさい。でもまあ、わたくしとは反対の理由ですわね」

「反対、ですか？」

「わたくしは、結婚がダメになったので、家出してきたのよ」

「まあ、もしかして、あの」

「そう、アルフレッド様とね。黒髪のアビス様が現れたから、お前は別の人を探しなさい。お父様ったら、突然そんなことをおっしゃられたのよ！」

なんだか、天井の上から音がするが、二人は気にせず話し始めた。

「まあ、黒髪のアビス様が、本当に現れたのですか？」

「そうみたいですわね、彼らからの話を察するに。・・・小さい頃から、ずっとお慕いしていたのですわ。それを、突然、他の方にしろだなんて、横暴もいいことだと思いません？」

「そうですね。それは勝手すぎますね。黒髪のアビス様が現れたからって、アルフレッド様がその方を選ぶとは決まっていらっしゃらないのに」

また、遠くの方で音がする。

「でしょう？ わたくしもそれを言いましたのよ。そしたら、お父様だったら・・・なにかしら、随分騒がしいわね。まったく気が散ってしまいますわ」

マリアは部屋の扉の向こうを見た。何も無い。そしてまた振り返り、エリザに話を続ける。

「えーと、どこまで話したかしら。そうそう、お父様ったら、「サミエル殿はどうだ。顔はいいだろう、彼も」なんておっしゃられるのよ！ わたくし憤慨してしまいましたわ！」

「まあ、サミエル様ですか。確かにあの方は、天使のような顔立ちですものねえ。わたしも2度程、拝見しましたけど、まるで天子様が舞い降りてこられたように、感じましたわ。　　あら？」

「そうですね、確かにサミエル様は、立ち振る舞いも優雅で、それだけで周りを・・・ではないですわ！　お父様ったら、わたくしが顔だけでアルフレッド様を選んだかのように、おっしゃいましたのよ！　それがどれだけわたくしを侮辱した言葉なのかを　　エリザ様、聞いてらっしゃいますの？」

　　エリザが、マリアから視線を動かし、口を開けている。その様子にマリアもやっと後ろを振り返った。そこにいた人物にマリアは固まった。輝くような金色の髪、蒼色の瞳がいまは、おかしそうに笑っている。長い髪が短くなっているが、彼はどうみても　　。

「・・・あ、あああ、アルフレッド様!？」

「これは、これは、お嬢様方。まさかこのような場所で、優雅に語らっていたとは、少し驚かされました」

彼はそういうと、なんなく牢の鍵を開けた。それに対し、マリアとエリザは優雅に礼を取った。

「いえ。．．．それよりも、なぜこちらへ？」

「なぜって、もちろん、お二人を救出に来たのですよ」

というと、彼はエリザの前に立った。

「あなたのお名前を、お伺いしてもよろしいでしょうか？」

エリザはカチンコチンに固まりながら、答えた。

「エ、エリザベス嬢ジャステイーノと申します」

すると、彼は目を軽く見開いた。

「それでは、その髪は地毛？」

不思議な質問に、彼女は首を傾げながらも頷く。

「．．．さすが、運がいいな。どうやら、無駄骨．．．でもなかったが」

エリザとマリアはその言葉に首を傾げる。すると彼はにっこりと笑顔を作った。

「もちろん、麗しきお嬢様方お二人を、悪の手からお救いできたこ

とですよ」

その笑顔に淑女ふたりは顔を赤くしたが、次の言葉に眉を顰めた。

「そう思ってたねえと、やってられねえし……くそつ、アルの奴、あいつ遊んでるだる絶対」

と、彼は後ろに佇む男に言った。

「はい、こっちはハズレ。アルに連絡よろしく！ お前らは、海賊共を全員ひつとらえたら、撤収開始だ！」

と、アルに幻影をかけられ、彼自身の姿に変えられたフライは、前半をヴァルタンに、後半を彼の部下たち隊員に言った。

「はっ！」

と声をあげる男たちを前に、マリアとエリザはただ目を丸くしていた。

18：「マツコでよいのか？」の巻

フライに変化の術を使ったところで、アルは倒れた。そのまま、強制的にベッドに逆戻りだった。彼が、「わたしにお任せください」とくすくす笑っていた。

あまり借りを作りたくなかったのだが……。

「いくつ彼らには、借りを作ればいいのか……。」

そう呟いたアルの言葉を、彼らが聞いたのなら、「どんどん作って結構ですよ」とまったくくすくす笑うのだろう。

そう考えたところで、ポケットが仄かに熱くなった。『翳』からの連絡がきたようだ。

ヴァルタンからの連絡を聞いたアルは、眉を顰めた。やはりこちらが本物か、と。

港で、連れの女性が殴られたと聞いたとき、サツキならばそれをさせないだろう、と。その時に、港にいた彼女はサツキではないと思っていたのだが……。

すでにアルは、サツキのいる館の所有者を調べていた。

ジャステイーノ伯爵の別宅であった。最近、ジャステイーノの経営する魔道具開発会社に、多額の融資があったと聞く。

その相手がイサールである。

また、その娘エリザベスは今、イサール子爵により、交際を申し込まれているという噂を聞いている。彼はすでに妻帯者だ。

そこから導き出される答えは、ひとつだ。

正直、サツキの行動は分かりやすい。

なので、この後の展開は予測できた。それを考えると非常に、頭が痛くなる。彼女のあまりの能天気ぶりに。

(彼らが間に合うだろうか・・・)

一度、そう考えてしまったアルは、不安が拭えず、上体を起こした。

そして、医師が止めるのも聞かずに、部屋を出て行った。

藍色の髪の彼は、名前をカインと名乗った。彼はジャスティーン伯爵に仕える馬番だという。

食事だと差し出されたトレイを受け取りつつ、彼をふんじばってはかせた。

先日の舞踏会のおり、文化庁長官を務めるシャムール伯爵の息子、イサール子爵の目に留まり、交際を申し込まれた。

しかし、それをエリザは拒否した。

そこで、イサールは、ジャスティーン伯爵の抱える、いくつかの負債を帳消しにすると持ちかけた。

「そのときになって始めて家の家計の苦境を知った、エリザお嬢様は悩まれました。そして、自分が犠牲になることを望まれました」

「・・・んー、この国のこと、よく分からないんだけど・・・貴族ってそういうもんじゃないの？ 家同士の結婚なんで、選べない、

みたいな」

「結婚はそうですよ。しかし、これはそういうことではないんです。交際を申し込むってというのは、その……」

言いよどんだカインに、サツキは閃いた。

「まさか……愛人？」

カインはこくりと頷く。

「しかも、嫁入り前の娘ともなると、その後の婚姻は望めません・最初は僕だつてそれでもいいと思いました。けど……お嬢様のつらそうな顔を見ていたら……」

「……なるほどね、カインはエリザのことが好きなんだ」

「はい」

単なる釜賭^{かまか}けだったサツキは、そこは、「え、そんな、僕は、別に……」とか言つて欲しかったな、とはつきり認めたカインに恨めしい表情を見せた。

「で、わたしに身代わりになってほしい、と」

「……はい、すみません」

最近よくよく身代わりになるな、とサツキは思いながら、

「ところで、家の借金でどのくらいなの？」

「・・・よくは知りませんが、このたびイサール子爵が融資した金額は3千ガリオンだと聞いています」

「千ガリオン・・・3億ベール」

サツキはため息をついた。立て替えられる金額ではない。

なんだこれは。これが貴族感覚ってやつか。愛人ひとりに3億ベール。

ちなみにサツキが身代わりになった際には、50ガリオンの謝礼をくれるそうだ。

「わたしの価値は、5百万ベール・・・」

安いのか、高いのか？

やさぐれた目つきで、サツキは言った。

「で、本物のエリザって子はどこにいるの？」

「それが、まだ帰ってきてなくて・・・」

「ふん、逃げたか？」

「そんな！ エリザお嬢様は、そんな方ではありません！」

「うん、力説してくれても、今いないものはいないんだから。そう考えるのが妥当でしょう」

「しかし……」

「うん、その脱走にキミが加われなかったのは残念だねえ」
「……」

落ち込んだカインを半目で見る。
やばい、これは完全なる5百万ベールへの八つ当たりだ。サツキは首を数回振った。

「迎えはいつ？」

「8時にこちらに伺うと聞いております」

「今が……7時。あと1時間か……相手はやる気満々ってとこですか」

サツキは伸びをした。

「うーん、しょうがないじゃあ、なんだ、要は、嫌われればいい訳だ。そいつ、その、イーサンに」

「イサール子爵です」

「ん、イサールに。ん、よし、引き受けた！」

「ほ、本当ですか？」

「おう！ 男に嫌われることは慣れてる！ 普段どおりに行動すればいいんだし」

と自滅しているサツキに、カインは言った。

「ところで、そろそろ、解いてくれると助かるのですが・・・」

カインはサツキに縛られ、床に横たわったままだった。

応接室の扉を開け、暖炉を背に座るイサール子爵を見て、サツキは顔を引き攣らせた。

年は40過ぎの少々頭の薄くなったダンディーとは程遠い人物であった。たぶたぶした腹は、上着のボタンが今にも飛び散りそうだし、さらにその顔は、にやにやとうすら笑いをさせている。

サツキは思った。言わせたい。「そちも悪よのう」と。

しかし、相対したイサールもサツキを見て顔を引き攣らせていた。

「い、一体、どうしたのかな、その格好は」

「え、なんのことです。イサール様」

サツキは首を傾げた。茶色のツインテールが共に揺れる。頬の肉も共に揺れる。

サツキは体重120キロのその巨漢を苦しそうにしながら、イサール子爵の対面の、ジャスティーノ伯爵とその夫人の間へと座った。ソファがぎしりと音を立てる。押しつぶされそうになったジャスティーノ伯爵と夫人が、慌ててさらに間を開けた。

「い、いや、君のその……」

「ああ、この体型のことですか？ 少々太ってしまつて……。お分かりになってしまいました？」

うふふとサツキは笑う。マツコと呼んで。

少々、少々なのか、とイサールは言いたい。サツキを上から下までみる。

「えー、一応、確認しておこう。君、エリザベスかい？」

「うふふ、ご冗談を。わたし以外に誰がいらつしやると？ ねえ、お父様、お母様」

左右をみるサツキに、エリザの両親は、やはり少し引き攣った顔ですばやく何度も頷いた。

そんなサツキたちをイサールは、放心した様子で見っていたが、はっと我にかえると考えた。

(これは、これで……ヨイ)

イサールはデブ子ちゃん好きでもあったのだ。それ専用のクラブに通うほどの。

太った彼女もそれは愛らしいではないか、と思い、イサールは立ち上がった。

「それでは、参りましょう」

その言葉にサツキは啞然とした。思わず

「え？ いいの？ マツコでよいの？」

「よいも悪いも、痩せた君より、数倍可愛らしいその姿に、なにを言うことがある？」

にたにた笑うその顔に、サツキの背中に変な汗が流れおちた。思わず、

「違う！ わたし、マツコじゃないし、エリザでもない！」

と叫ぶも、はっと周りの固まった様子にサツキも固まった。

「うん？ 君はエリザじゃないのかな？」

イサールは周りの様子に、なにやらうんうんと頷いた。

「まあよい、君を手に入れられるなら、誰であろうと……思わぬ

拾い物だ。ジャスティーン君、それでよろしいかな？」

男の趣向は奥深い。

しかし、デブちゃん同士はいろいろ大変そうだぞ。あんなことかこんなことか。

いろいろ想像しているうちに、サツキはイサールの持つ別宅に到着していた。あらまあどうしましょ。

「お、おやめ下さい」

「よいではないか。よいではないか。恥らうそなたも可愛いのが」

サツキはイサールの寝室でその身を壁に張り付かせた。仕方がない、とサツキはその体型を元に戻した。

途端に痩せていくその身体にイサールは目を丸くしている。

「・・・申し訳ございません。実はこの身体は魔法で太らせたものでございます」

と、サツキはイサールの目を見て行った。

「・・・」

サツキは、眉を顰めた。

「おお、そうであったか。まあよい。・・・つまり、私は痩せたそなたも、太ったそなたも手に入れたということかな？」

嬉しそうに、イサールは両手を胸の前でわきわきさせた。

(うぎゃー！ー！ー！！ 変態さんにはどう対抗すればいいのー！ー！?)

「しかも、その格好は、そそられるのう」

はっとして自分の姿を目にすると、太った姿で着たその服は、上着はずり落ち、片方の肩をみせており、下穿きは、すんと床に落ちていた。長めの上着の丈が、太ももまでであったのは救いだった。

とりあえず、「湯浴みを」と言ったが却下され、もう、気絶させよう。そう思ったサツキに、なにやら騒がしい外からの音が聞こえた。

その直後、控えめにノックがされる。

「なんだ、騒がしい。どうした」

「それが、その。お客様がお見えになりました」

ふん、と鼻を鳴らすと、イサールは、「誰だ。こんな夜更けに」と言ったが、その名前を聞くと、顔を蒼白くさせた。サツキもまた同様に。

「アルフレッド皇帝でございます」

サツキはおろおろと部屋を移動していた。

(どうしよう、逃げちゃおうか。でも、そうすると、多分、融資が下げられちゃって困るだろうし……)

「けど、わたしにはそんなの関係なくない!? てか、そうだよな、そうそう……って無理! 勇者がすたるだろ、おい! いざ、魔王討伐だ!」

(ああ、どうしよう、穩便に事を済ますには……一番苦手な方法です、はい。……ああ、消えたい! 消えてしまいたい! 穴があつたらそこで一生暮らしたい!)

ハムレットの如く、悲観していると、部屋に何人か侍女が現れ、サツキに着替えを促した。

(これ、着るの? んでどうするの? え、なんで下行くの? つか……)

侍女に促されるまま、とある部屋の扉の前まで連れてこられる。侍女は一礼して、立っている。

(ん？ 開けていいの？)

ドアノブに手を伸ばしたサツキに、侍女が目を丸くし、止める。

(ん？ だめなの？ え？ 何？ 肩たたき？)

侍女が右手を上げこぶしを作ると、サツキに向かって、数度振り下ろしている。サツキは侍女をくるりと回転させると、何度か肩を叩いてあげた。

「ち、違います！」

あ、しゃべれるんじゃない。と思ったサツキの目の前の扉が開いた。そこには、髪を後ろになでつけ、眼鏡をかけた、いかにも紳士然とした人が立っている。その眼鏡の奥にある鳶色の瞳が細められ、サツキに言った。

「……………何をなされておられるのです？」

「え？ 肩たたき、ですけど？」

「わ、わたくしはただ、ノックを、と！」

真っ赤な顔をして、侍女が叫ぶ。

ああ、ノックか、そうかノックをしる、という意味だったのか、と合点がいき、ぼんと右手のこぶしで左手の平を叩く。

そんなサツキを見ながら男は言った。

「……………理解致しました。では、どうぞ」

と、サツキを中へと進める。

もうノックはしなくていいらしい。

19：「ザッシュ様の歌」の巻

中にはイサール子爵と銀髪の長髪さんがいた。

魔王はどこ？

と、きよるきよるしているサツキに、銀髪君が言った。

「どうぞ、そちらにおかけになってください」

「あ、ああ、どうも・・・」

へこへこしながら、サツキは差し出された椅子に座った。右に太つちよイサール子爵。左に銀髪長髪さんが座っている。

そして、サツキの左後ろに先ほど、サツキを部屋に入れた紳士さんが立った。

魔王はどいつだ。銀髪か？ 眼鏡か？

「さて、イサール殿。話を戻しましょうか。彼女はエリザベス嬢ではありません」

長髪さんは、足を組み替え言った。

「し、しかし、彼女はどうみても・・・」

「ああ、そうでした、サツキさん」

名前を呼ばれてサツキは飛び上がった。

「は、はい？」

「まずは、その変化の術を解いてください。話はそれからでした」

言われて、サツキは戸惑った。誰だ、こいつ。魔王なのか？

サツキが眉を顰めると、彼は可笑しそうに笑った。

「ああ、僕の名前は、サミエルⅡキエルⅡドⅡラフィーユと申します。以後、サミエルとお呼びください。ちなみに後ろの彼は・・・」
そういわれて、紳士さんが言った。

「ロベルトⅡガーナルⅡシエルⅡフォルスと申します。ロベルトとお呼びください。執政監査官をしております」

「ご丁寧に名刺を差し出してきたので、サツキは慌ててそれを受け取った。どちらも魔王ではないらしい。

そして、サツキもどこからか名刺を取出し、それをロベルトに渡した。

「竜巻爆裂少女のサツキⅡアサギリです」

それには、ロベルトも目を丸くする。手にした名刺をしげしげと眺める。

サツキの顔写真と、名前。肩書きは「女勇者」となっている。裏にはこれでもか、というくらいダイナミックな文字で「竜・巻・爆・

裂・少・女」と描かれている。住所のようなものも書かれているが、ロベルトの知っている場所ではなかった。

その様子を見て、サミエルも「僕にはないの?」というので、もう一枚あげる。

「ええと、皇帝さんではないんですね?」

サツキはサミエルに確認すると、彼はやはりくすくすと笑う。

「ああ、そうです。名前をお借り致しました。と、言っても彼の代行ですけど、裏向きは」

「裏向き……ですか」

「はい、表向きは、僕、ということ」

その発言にロベルトが苦笑の声を上げる。

「だって、君がいる時点で、不自然でしょう。その方が話も早くなりますし、ねえ、イサール殿」

固まっている様子の彼に、サミエルは一瞥すると、言った。

「ほら、サツキさん。黒髪に戻ってください」

サツキはとりあえず、変化を解いた。

その瞬間、「おお……」と感嘆の声があがる。

サツキは不思議だった。なぜ、そんなに黒髪が珍しいのだろう。

「ああ、サツキさん。あなたのいた世界では、どうか知りませんが、この世界では、どんなに魔法や薬品を駆使しようとも、人体の一部を黒くだけは出来ないのですよ」
「本当に？」

頷くサミエルを見る。試しにロベルトの青磁色の髪を黒くしてみようと、呪文を唱えた。

「『チェンジラ』」

変化がない。もう一度「『チェンジラ』」と唱える。今度は赤色になった。

「あゝ、ホントだゝゝ。なんでなんでゝゝ？」

「……不思議がるのはそのあたりで……早く元に戻してください」

ロベルトは突然、自分の髪を変えられ、それをサミエルが「似合う、似合う。ジエダイ（フライの兄）そっくり」と笑うので目が怖い。

「あーすいません。『リタノーマ』」

ロベルトは、ほっと息をついた。

「……それにしても、サツキさんの魔法は素晴らしいですね。攻

撃性・方向性・安定性がしっかりしています。持続性もあなたの変化を見た限り、長いようでしたし……」

ぶつぶつと、サミエルは何かを呟いている。

「こ……アル……って、早急……を魔……入……続……」

どこかに行ってしまった様子のサミエルに、サツキはロベルトを見やる。彼はひとつため息を漏らすと、イサールに対して言った。

「このたび、イサール子爵が行った融資は、サミエル子爵が引き継ぐことになりました。これは、その契約書です。よって、ジャステイーノ伯爵からの返済小切手が、こちらに」

そう言ってロベルトは、2枚の紙をイサールたちの間の机に置いた。イサールに向けて。

「な、しかし……」

「もちろん、契約不履行という形なので、金額は提示されたものとなっています。ご確認ください」

イサールは小切手の額面を見た。サツキもそれをひよいと覗いた。紙にはこう、書かれていた。

『金6000G』

多分に、Gはガリオン。

ああ、2倍です。お相撲さんで言っちゃつよ。はい、にば〜いにば〜い。6億円だよ、サマージャンボの2倍だよ。

「こ、断る！」

それに対して、いつの間にやらこちらに戻ってきたサミエルが、これでもかという笑顔で答えました。

「ふふ、変なところでケチったのが悪かったですねえ。せめて10倍とでもしておけばよろしかったのに。僕なら、あの会社の権利、としておきましたよ。融資額は5倍にして。ふふ、申し訳ありませんが、譲る気はありませんから」

ひとり「????」なサツキにロベルトが教えてくれました。

「ジャステイーノ伯爵が融資を受ける会社は、先日新魔法具を発明しております。それを特許、商用登録すれば、年商1億ガリオンはくだらない見込みなんですよ。伯爵自身は、まだ、この宝の山にお気付きにならないようになっていないようなんです。2年後には、何十倍にもなつて返ってくるでしょうね」

つまりは何だ、このイサールという男は、「儲け話+愛人」という欲深計画を立てていたのだ。ただのエロ親父ではなかった。欲深エロハゲぶよ専変態親父に改名しよう。うーん、長いかな。やつぱり、変態お代官でいいか。

「あのう・・・そのうち300ガリオンはわたしが融資、というわ

けには……………」

サツキはその儲け話に便乗しようとしてみたが、

「お断りします」

とにこりと断られた。

そこは「そちも悪よのう」と言って欲しかった。サミエルの容貌には似合わんが。

王宮へ、2人乗りの馬車を3台使って帰ることになった。

何故、3台なのかと言つと…………。

1台目 ロベルト

2台目 サツキ

3台目 サミエル

うん、こつこつことである。

「違います」

空中に描いたわたしの説明を、その手がキュキュと書き足す。

- 1 台目 ロベルト、モスリンド
- 2 台目 サツキ
- 3 台目 サミエル、ロブ

うん、ロブくん書き足しありがとう。

イサール伯爵の館を出ると、ロブさんとモスくんが待ち構えていた。一人は眉を吊り上げて、一人は眉を吊り下げて。

ああ、すっかり忘れてたよ。電話料金の払い込みに、コンビニ行くくらいに忘れてたよ。

王宮へは10分もすれば着くという。この場所は城門の目と鼻の先、200メートル程なので1分程度で着くという。ならなんだ、9分も城門の中を走るのか。3キロ強つてところか。どんだけ広いんだ。どんだけ。

なんでも、王宮の入り口、南棟までの間には、総務、法務、外務、財務、魔法、文部、労働、農林、水産、産業、交通、軍事の計12の省の建物が隣接して建っているんだそう。日本でいう永田町だな。町が一個、城の中に建っているとは、これいかに。

内部では移動用に馬車バスが周回してるとか。うん、一度乗っておこつじゃないか。

「2階建ての馬車バスもあるんですよ」

サミエルの説明に俄然乗る気満々です、サツキ。

馬車が走り出すと、だんだん霧が濃くなってきました。わたしの御者台にはジョンくんが座っていると、分かっているのに、彼の存

在感の無さも相まって、まるで、1人でいるみたいです。

前を走っているはずのロベルトさんたちの馬車が見えません。後ろを振り返ってみました。ロブくんたちの馬車もこれまたしかりです。

孤独な空間です。歌ってみましょう。

「お〜とおさん、おとおさん。き〜こ〜えないの〜。まあ〜がぼくに〜、ささ〜やきな〜がら、やく〜そく〜しているのが〜」

うう、もつと怖くなっちゃった。

このまま歌ったら、わたし消えちゃうよ。ジョンくんはもう消えてるけど・・・ってあれ、霧が晴れてきました。ふう、と安堵のため息です。

「・・・・・・・・」

おかしいですね。ジョンくんって、そんなに大きかったですかね。それじゃあ、もうホビット族とは呼べませんよ。

・・・そんな赤いターバンしてましたっけ？

「あれ、もう歌わないのか〜？ なら俺様が歌ってやるっ。へいへいへいおらへいへいへい」

だ〜れが呼んだか知らないが〜。

マインド号のキャプテンは〜。

あ〜かいターバン靡かせて〜。

酒も一流、女も一流。狙うお宝も一流だ〜。

その〜名〜も〜。

「ザツシュ様だ!」

突然、サツキの方を振り返し、親指で自分を指している人物は、ジヨンくんではなかった。きらりと歯が光る。もう夜なのにね。月夜の反射ってことにしておこう。

「なあ、あんたが、黒髪のアビスってやつだろ?」

あゝ、これなんて返事すればヨイ? 誰ですか、あなた? あ、ザツシュ様でしたね。

「あー違いますよ(棒読み)」

「そうなのかい?」

と、突然、ザツシュは手綱を引っ張った。馬が嘶く。サツキは反動で、前に飛び出た。

「つぎゃあああゝゝゝ!」

ぐるぐると空中を回る。そして、すたつと着地。10点満点?

「見たか! これが(技:キャット空中3回転)だ! にゃんこ先生、ありがとう!」

サツキは元の世界のギルドの先生のひとり(一匹?)を、思い出

した。

彼は、にぼしひとつで技を教えてくれる、大変ありがたい先生であった。トラ模様がチャージングな、柔道着をこよなく愛する先生であった。

グリコのポーズをしているサツキが、感無量の涙を流しているところに、ばさつと麻袋がかぶせられる。突然、真っ暗になる視界。

「よし、本物、ゲット」

ザツシュの音がする。そこは高らかに「ゲットだぜ！」でしょうが。もしくは「ゲッチュウ」ね。

「悪いな。あなたには、交渉材料になってもらうぜ。俺様の船が、騎士団のやつに取られちまってさあ」

サツキは袋の中でじたばたもがく。

「ああ、一応、言っておくけど、その袋、魔道具だから。魔法効果、なんだつけ、えゝ「マホレス」？ と「パウウイク」？」

俺、魔法って、よく分かんねえんだわ。わはははは。と、音がする。

そんなザツシュくんに魔法講座。

マホレス 魔法無効

パウウイク 力が半分になる

20：「今しばらくお待ちください」の巻

息苦しい、と言ったから、今日がわたしの顔出し記念日。（注：エロではない）

袋から顔だけ出させてもらったわたし。んゝ屈辱。一回転んだらね、自力で立てないんだよ？ しかもね、ちょっとだけ余裕がある分、受身取ろうとしちゃって、肘、びーんってなるんだよ。

縄抜け使ってもね、結んでる縄が袋の外側だから、効かないんだよ？

しかも、召喚獣まで、呼べない。とほほのほ。

それにね、ザツシユくんに言いたいよ。これ「パウウィク」じゃないよ。「テラパウウィク」だよ。力が1になる魔法だよ。

力も1なもんだから、腹筋使って起き上がることも出来ないし、壁に寄っかかかってないと、座っていることも不可能って、もう寝たきり婆さんだよ。

ほれ、食事の介助をしなさい。舌でスプーンの先、んべええって押してやるから。

それとも、食べたふりして、ぶふうって吹いてあげようかい？手、ドロドロだよ。そして、床に零れ落ちた残飯を拭きたまえ！

両膝付いて！ ふはは！

水差しもね。横から差し込んでくれないと、むせちゃうよ。嚙下えんげ機能弱くなってるからね！ それから都合の悪いことだけ忘れてやるよ！ ほら、カモンカモン！

「……なんだか、悪い顔してんなあ、あんた。なあに、企んでやがんだあ？」

テーブルに肘をついて、足を組みながら、優雅にワインなど回しちゃって、ザツシユが呟いた。

あゝあ、ワインはあんまり回して飲んだらダメっすよ！ 香りがどんだん飛びまくりっすよ！ まだ、飲んだことないけどね、一応未成年なわたし。

あー早く妖怪になりたーい！ ちがった、大人だ。ベム。

ここは、ザツシユの隠れ家。リビングで彼だけ、一人掛け用のカウチソファに座っている。

わたしは、長ソファの上に転がっている。袋から顔だけ出してね。一度、そのまま床に転がったけど、次落ちたら、そのままにしてやるっていうから、微動だにしません、わたし。

鼻がまだ痛いです。

明日、鴉を飛ばすそうです。あの黒いカラスか、伝書鳩みたいなものか、と言ったら、鴉は人なのだそうだ。ふうん、だったら、飛ばすとか言わないでほしい。まぎらわしい。

すでに寛いだ状態のザツシユ様。

なんでも、「マインド号のキャプテン・スプラウド」といって、

この界限かいわいでは、有名な海賊なのだそうです。

で、先ほど仲間たちが船と共に、ここの騎士団に捕縛されたい。
い。

船長は酒場で飲んでいて（彼曰く、情報収集だそう）難を逃れたらしいのだが、船と、ついでに仲間たちも取り返したいのだそうだ。（ついでが仲間つてのが泣ける）

「ほら、お嬢さんも、一杯飲むか？」

いえ、だから未成年です。って言ってるのに、この人基本、人の話を聞かないよね。だから、いらないうて！

いやがる未成年にお酒飲ませたら、逮捕ですよ！ 嫌がってなくても、逮捕ですよ！

分かってます？ わたし、未成年ですよ、って言ったら、

「わあってるよ、13歳くれえかあ？ ああ？」

あ、爆弾発言。モンゴロイドはそんなに若く見えるのかい？

13歳って言ったなら、去年、ランドセルですよ？ 縦笛、はみ出てるんですよ？ ネギみたいに。帰り道に、意味もなく、棒を拾って、カンカンカンってやつちゃうんですよ？ 小石を電柱に蹴り当たったら、なぜか終了なんですよ？ 自転車で両手離しが延々出来たら、それが勇者なんですよ？

「じっくん」

あ、本当に飲ませやりました。この赤ターバン。黙ってりゃそこそこカッコいいのですが、左目の三本傷がやっぱり怖いんです。なんでもストロンベアにやられたそうです。海賊なのに、山のモンスタにやられるってどういうこと？

ん？ お味が、よいです。

「おいしいですね、これ」

「お？ だろ？ エスタナ産の極上品だぜ。これ、一本3ガリオンだからな。大事に飲めよ。」

「3ガリオンですか。30万ベールう、そりゃ、極上ですう」
「お、分かるか？ほんじゃ、こいつはどうだ、こいつも美味えぞ」
「ふふ」

なんだか、楽しくなってきました。

適度に酔って、気前の良くなったザツシユは、ぼんぼんとサツキに、高級ワインを飲ましてくれる。

うん、その結果。

「………うう」

「ん？どうした、お嬢さん？」

「……ぎぼち悪い………うぐ」

「は、吐くのか！？ここで吐くのか！？ま、待て、止める。水、水持ってくつから！」

「………うう………ぎぼち悪い」

はい、超特急でトイレに運んでくれました。指、やめて、二本指、止めて………！

「………迷惑をおかけしています。今しばらくお待ちください。」

プ………

盛大に吐いたわたし。介抱疲れでぐったりザツシュ様。何度も口すすいだから、すつきりです。ありがとうございます。

今宵の宴はここまでになりとうござりまする。

でも決して袋から出してくれないところが、流石、海賊さんです。

追伸、ちゃんぼん飲みは、本当に危険です。薬も一緒に飲まないでください。特にアスピリン系。大臣やめさせられます。

その部屋には、魔法の類を感じられた。慎重に読み解くと、封印の魔法がこの家には張り巡らされていた。随分とこの家の主は魔法が嫌いらしい。

窓の一部を軽く割る。

小さなガラスの割れる音がし、しばらく様子を見た。反応はない。手を伸ばし、施錠を外す。

開いた窓から、猫のように音もなく、するりと室内に忍び込む。

すぐそこに、少女が寝ていた。無防備な寝顔で、長椅子に寝転び、

顔を横に向けて。近づいてみると、微かな寝息が聞こえる。

周りをみると、どうやら一人の様子だ。寝袋のようなものに包まれている。首の辺りを縛っている紐が、苦しそうだったので彼は、まずそれを解いた。

そして、その紐を緩めながら気付く。寝袋のようなそれは、囚人を入れるための「魔囚具」ましめうぐである。

彼女をさらった人物は、たまたまこれを用意していたわけではな
いだろう。この品は入手難で値も張る。あくまで、彼女を攫うた
めに用意されたものだと分かる。

無事で良かった。

袋の中に仕舞われていた黒髪を、全て外側に取り出した。髪を梳
いてやる。眠りは深そうだ。

更に、髪を梳く。その黒髪は、どこまでもなめらかに彼の指を通
した。

途端、彼女が軽く身じろぎをした。思わず手を離す。

すると、少女は、いやいやをするように動き、眉を顰めた。誘わ
れるようにして、頬に手が伸びた。

すると少女は、その手に頬を押し付けるようにした。その反対の
頬に唇を寄せ

「おいおい、なぐにやってんだ、てめえさんはあ」

首筋に冷たいものが当てられている。呆れをにじませたその声の
主は、言った。

「勝手に人様んち入ってきたかと思えば、盗みを働くわけでもなく、お嬢さんを助けるわけでもなく、正直、お兄さん、呆れちまったぜ」

ザツシユは、右手に剣を持ち、反対の手で、後頭部をがしがしと搔いた。

「 そうだな。俺も今思った。何やってんだ俺って」

ゆつくりとサツキから顔を離しながら、アルは呟く。首の剣はぴたりとアルの首に張り付いたまま、アルの動作と共に動かされる。

「で、一体、お前さんの目的はなんなんだあ？」

持つ剣に、少しだけ力を入れられ、アルの首筋に傷がついた。アルはふっと笑いを漏らした。

「目的は、ひとつしかないが」

「それじゃあ、てめえは、底抜けの間抜けってことか？」

「・・・否定は出来ない。今の状況では」

淡々と話す男の口調にザツシユは苛立ちを見せた。いつでも首を取られる状態なのに、ひとつも取り乱した様子のないその男に、さらに言い募る。

「・・・てめえ、誰だ。名前、聞いてやるよ。間抜けにしちやあ、腹あ座ってる。あいにく、仲間にはなりそうもないからな」

「そうだな。海賊になど、俺はならない」

「……名前、聞いてるよ。……答えな」

沈黙する男に、ザツシユは、痺れを切らし言った。

「じゃあ、あの世にいる閻魔えんまさんには、きちんと言うんだぜ。……あばよ！」

ザツシユは、躊躇とまどいもなく、男の首を掻っ切った。

しかし、ザツシユの切ったそれは、その男の残像だった。何、と思う間もなく、左から風を感じ、右手に飛び立った。

逃げ遅れたザツシユの黒いコートの裾すそが、切り取られ、宙に舞った。

「くっ……！」

ザツシユは、整える間もなく、降ってくる剣を、無理な体勢で受け止める。ずしりと重い。押し返しそうもないと判断し、それを左後方に流しながら、相手の左肩を狙う。

だが、相手も左肩を入れながら、身体をひねり、ザツシユの攻撃をかわす。逆に、左の二の腕に痛みが走った。

「……ちっ」

ザツシユは舌打ちした。一旦、間合いを取った。

月明かりの中、己の半面をさらしながら剣を構える男は、絶対的な存在感でそこに立っている。

笑えることに、黒のロングコートを身に纏まとったその格好は、ザッシユとそう変わらない。

しかし、数度、剣を交わしただけでザッシユは悟った。斬り合いながらも、どこか余裕のあるその様子に、ザッシユとの剣の腕前は雲泥うんでいの差だということ。

(・・・このままじゃ、負ける)

ならば、とザッシユは海賊らしい行動を取った。瞬時に右に飛び、

「それ」を掴むと、「それ」の首に剣を当てた。

途端、男が硬直した。

「ほい、形勢逆転。・・・剣、こっちに放りな」

「それ」とはザッキのことであった。

21：「三度目の出会い」の巻

誰かが、サツキの髪を梳いている。何度も、何度も。

その繊細な触り方に、サツキは軽く身じろぎをした。途端、その手がぴたりと止まる。もっと続けてほしくて、サツキは眉を顰めた。瞼を持ち上げようとしたが、重くて持ち上がらない。

右の頬に暖かいものがそっと触れた。それは、とても安心出来るものを感じた。ふっとその感覚が無くなった。むーっと不愉快になった。ふわりと風を感じる。キンと金属音を拾う。

それが、剣の打ち合う音だと気付いたとき、サツキは急速に意識が覚醒した。瞼を持ち上げようとした途端、上体を掴まれる。首に剣が添えられた。

「ほい、形勢逆転。・・・剣、こっちに放りな」

ザツシュの音が頭の上から聞こえる。ということは、サツキに剣を当てているのはザツシュだと、まだぼんやりした頭で考える。完全に瞼を開いた。部屋の隅に男が立っていた。

黒いコートを羽織り、月明かりの下でもきらきら光る金髪をしている。手にした長剣は血がついているのが分かる。

開け放たれた窓から、ふわりと風が吹き込む。そのたび、彼の髪が風に伴って靡く。

彼の視線が軽く下を向いた。

次の瞬間

サツキは時間が止まったように感じられた。

蒼。

その瞳がサツキの目を捉えた。どこかで、感じた感覚。これは、どこ？ 蒼だった？ 蒼じゃなかった？ 交差した目はどこでだった？ 微笑んだ瞳はいつだった？

海の蒼。

蒼に吸い込まれて、動けない。

目が合った彼も、少し驚いた顔をしていた。そして、ふっと息をはくと、惜しげもなく、手にした剣を放ち言った。

「仕方ない。この部屋では、魔法も使えないしな」

諦めをみせた様子の男にも、ザツシュは警戒を解かずに言った。

「ようし、もつとこつちだ。こつちに蹴れ」

いわれるまま彼は、長剣を、ザツシュの元へ蹴り飛ばした。

なぜだろう、彼がサツキを見ている。サツキを見て、それから、サツキの下の方へ視線を向けていく。身体の線をなぞって。そして、また、サツキの顔へと戻る。サツキはなんだか恥ずかしくなり、視線を下に下げた。そして、気付く。

「よおし、ほぐら、これを付ける。まずは、足からだ。それから手な」

左手でザツシュは、彼に向かって二つの手錠を投げた。彼の足元に二つの手錠がガチャンと音を立てて落ちる。彼はサツキをちらりと見たあと、ゆっくりとその手錠を拾い上げる。

そして、下を向きながらにやりと笑い、上目遣いに聞いた。

「これで勝った、と思うか？」

彼の減らず口にザツシュはへつと海賊らしく笑った。

「いや、まだまだ、俺様のマインド号を返してもら……………グア！」

突然、右手首を捻じられ、さらに右腹の激痛に、ザツシュは身体を前のめりにした。捻じられたその余りの痛さに、剣を手にする力が失せ、カランと音を立て、剣が落ちた。そのまま、手首があつという間に、ザツシュの背中に回された。

「いで……いでで……」

「魔法が使えないってんなら。こんなでいいのかな？」

そういつてにつこり笑ったサツキに男は言った。

「まあ、及第点だな」

「な、なんで、お嬢さん……」

と、ザツシュは信じられない目でサツキを振り返ろうとし、長椅子で目が留まる。そこには魔道具が放り出されている。一直線に切れ目がいれてあった。

「てめえ、いつの間に……」

ザツシュは、男を睨んだ。

「お前が俺の首を刎ねようとした時……って答えたら、何かあるのか？」

「はっ、なんも、ねえよ……」

「あっ！」

掛け声と共に、ザツシュはサツキから、手を振りほども、飛びずさった。

目を丸くするサツキを横目にザツシュは言った。

「だめだよ、お嬢さん。油断しちゃあ。関節外すことくらい、何でもないんだからよ」

と言いながら、ザツシュは一度外した肩と手首の関節を、じぎつと音を鳴らしながら直していく。

「これ、手首の方が異様に痛いんだわ」

と、部屋の中の二人を見回す。

「こりゃ、完全に分が悪いなあ。仕方ねえ、今回は………つて危ねえ！」

サツキの放った鞭が、ザツシュの足首を掠める。

「去り際の決め台詞ぐれえ、言わせるって………だあ！」

ザツシュの剣を拾った男が、それを投げてきた。

「ってコラ、お前もか！ ……ちっ」

ザツシュはひらりと窓を飛び越える。そして、闇の中から声が響いた。

「あゝばよ………!!」

赤いターバンの紐をはためかせ、ザツシュは逃亡に成功した。

「……………というか、逃がす気だったな」

ザツシュの去った部屋の中、自分の長剣を鞘に納めながら、男がぼつりと呟いた。

その台詞に、サツキは慌てた。

「え、そんなこと、ないし？」

ぐりんぐりんと目が泳ぐ。

高級なワインをごちそうしてもらったという訳ではないが、どうにも憎めない奴だったのだ。あのザツシュという男は。正直、捕まっつてほしくないなあ、なんて考えてしまったのは本当だ。決して、高級ワインを頂いたからでは……………ない、と思う。

「あ、そうだ！」

サツキははっと、男に向き直った。

「このたびは、助けていただいてありがとうございます！」

深々とお辞儀をする。黒髪が揺れる。その動きを男はただ見ていた。

「……………ああ……………別にいい。気にするな」

変な間を空け、男は答えた。

「・・・お前は、何故、俺を信じた？」

「え？」

「敵だとは思わなかったのか？」

「？ ううん？」

「何故？ 裏切られるとは思わないのか？」

サツキは首を傾げる。

「ん？ どうして？ どうして、信じないの？」

「信じなければ、裏切られない。最初から裏切ると思っていれば、裏切られない」

サツキはうーんと唸った。

「裏切られると思っていた相手が裏切らなかつたら、それは裏切られたことになるんじゃないの？」

に、とサツキは笑って言った。

「その考えだと、結局裏切られちゃうね。・・・なら、信じちゃった方がよくない？」

「・・・」

「・・・」

うう。沈黙が息苦しい。

「と、ところで！ あなたは誰ですか？」

そこで男は、驚きをみせた。そして、目線を外すと、眉を顰めた。そして、目を瞑ると長いため息をついた。

「俺は」

途端に外が騒がしくなった。

騎兵隊の音だ。多数の足音が響き渡る。

サツキがその音に気を取られた瞬間、男は窓を乗り越えていた。

「あ！」

そして、外に飛び立つと、振り向き一言いった。

「すぐ、会える。……名はその時に」

彼の身体はすぐに闇に溶けていった。

(……そういえば、名乗った覚えがない)

アルは落ち込んでいた。

最初の出会いは、変化をしていた。髪も目も茶色かった。それから、彼は『翳』を使ってサツキを追尾させていた。それで彼女を知り、会った気になっていた。二度目の出会いは、エストニア侯爵の館の中でだった。その時、彼女は混乱状態で、アルのことを覚えてはいるはずがなかった。

そして、三度目の出会いが、今回、海賊船長の隠れ家だった。

（たった、二度しか実際には会っていないのか・・・）

その答えに、驚愕した。

いつから、俺はこんな気持ちになったのか。やはり、あの伝承のせいなのか？

アルは首を振った。冗談じゃない。

アルは運命だとか、宿命だとかの言葉は大嫌いだった。未来は決まっている。そんなのは馬鹿馬鹿しい。ならば何故、人は生きているのか。運命にただ沿うためだけに生きているのなら、そんな人生はいらない。

アルの過去がすでに定められたことによつて起こり、未来もまた定められたことだなんて、嫌だ。もう、あんな目には会いたくはない。未来は己が選んだ事由によつて決められていくべきだ。そうではないと、やっていられない。

あの出来事が、誰かによつて作られた物語だなんて。

アルはため息をつき、言った。

「・・・他には？」

アルは今、医療室のベッドに横になっている。

あの後、アルはこっそり、医療室に戻った。医師には堅く口止めをしてある。

ベッドに横になってすぐにロベルトが訪れたので、間一髪だったが。

今まで、ロベルトの報告が続けられていた。

「報告は以上です。・・・きちんと聞いておられましたか？」

ロベルトは、半ば疑いの目でアルを見る。

「お前、目の前でサツキを攫われたんだって？ やっちまったな、おい」

椅子を斜めにして、ぶらぶらと揺らしながら、チャカすように、フライが言った。サミエルに向かって。

「・・・それは、そうなのですが。サツキ様は、すぐに無事保護、致しましたし」

なのに腕を組み、先に答えたのはロベルトの方だった。困ったように、眼鏡の位置を直している。

「元はといえば、誰かさんが船長を逃がさなければ、こんな事態は起こらなかったわけですが、ねえ？」

サミエルがにこりと笑いながら、フライに言う。

「逃がしたんじゃないくて、元からいなかったんだよ！ あいつは！」

「そうそう、気になることが、ひとつ」

そんなフライには目もくれず、サミエルは指を1本立てて言った。

「誰が、海賊の居場所を知らせてくれたのでしょうか」

フライは言った。

「そりゃ、隊の誰かだろう」

すかさず、指を3本に増やす。

「では、すでに侵入した形跡があったのは？ 海賊が逃亡後だったのは？」

矢継ぎ早に、サミエルは質問をする。

「それに、サツキ様のお会いになった人物は誰だったのでしょうかね」と言っ
て、すでに目を閉じているアルを横目で見ながら言う。

「黒いロングコートを着た金髪で蒼い目の男だったと。長剣を背中に帯剣していたと、サツキ様は証言しています」

皆の視線がアルに集中した。

アルは目を閉じたまま、ため息をついた。

「……知らん」

「……私、担当医師に話を聞いて参ります」

失礼致しますと、部屋を出て行くロベルトの足音に、アルはぐつと眉を顰めた。

「……俺に説教を受けさせて、何が面白い？」

目を開くと横目でサミエルを睨んだ。

「いえ、特に何も。ただ、内緒にされるのは、好きではないので。……それに、落ち込んでいる理由も気になりますし？」

（……本当にこいつは嫌だ）

その後アルは、医師の口を割らせたロベルトに、延々説教をされることとなった。

22：「昏前に目覚める。今こゝろ。」の巻

目が覚めたら、あれ、どこどこ？　って経験、あなたはありますか？　サツキはしょっちゅうです。気付いたら馬車の中だったり、地下牢の中だったり。

大抵、昨日の記憶を思い返すと、ああ、そうだったって理解するものですよね。

昨日はバーでこいつと飲み明かしたんだ、とか。そうだ、同窓会でこいつと意気投合って、そのシチュはつかしかい！

見知らぬ部屋で目を覚ましたサツキも、例のごとく、昨日の出来事を思い出していました。裸の背中と同じベッドにありませんでしたが。

海賊ザツシュ逃亡。

蒼い目の名無しさん逃走。

騎士さんに、保護という名の連行。

馬車で王宮へ到着。

ロブくんから大音量スピーカーくらう。

モスくんが足にまわりつく。

明け方、本宮の北棟の客室に案内される。

朝食を食べずに爆睡。

昏前に目覚める。 今二二。

昼食を取る。

謁見の間で魔王に会う

魔王次第では討伐する。

帰還ウマー。

うん、思い出しました。午後から、魔王に謁見の間でショーダウン対決開始です。

まずは、腹ごしらえを致しましょう。

ここは、本宮北棟3F306号室です。隣の部屋にロブくんともスくんがいるはずですよ。行って見ましょう。

305号室の扉を叩く。へんじがない、まるでしかばねのようだ。ノブを回してみます。鍵がかかっています。もうう、いないの？

「技：鍵開け」で中に入ったけど、やっぱり誰もいない。

まったく、これでは、飯にもありつけないではないか。廊下の両サイドを見てみても、人っ子一人見当たらない。北側の窓の外を見

てみる。

「あ、馬車！」

何台もの馬車が行き来しているのが、見えた。あれが馬車バスと呼ばれるものなのである。小さいのは2人乗りから、大きいのは4人がけの座席が5列もある20人乗りのものが見える。

中には、人は乗っておらず、大きな荷物を運んでいる馬車もいる。色々な馬車がまるで、パドックの様に、ほとんどが並足で走っている。人力の車も走っており、どういった規則があるのか、みな、混乱もせずに、走っていた。

その景色の向こう側に、大きな建物が見える。多分、あれが北宮、別名後宮と呼ばれる建物である。ここからでも、若い娘さんたちが大勢いるのがみえる。

この国の後宮というものは、王家にとって大奥のようなところ、という事ではなく、あくまで、淑女としての嗜みを学ぶ場として存在している。貴族の娘しかり、侍女しかり。お茶や音楽、ダンスなど、女性としての勉強をする場所なのだという。もちろん、侍女には給金が支払われる。

ほとんどが後宮に滞在しているが、外から通っている女性もいるそう。王家からの金銭的援助はなく、あくまで、個人に支払い義務がある。淑女学校とその寄宿舍といったほうがじっくりくるかもしれない。

但し、男性は踏み入ることの出来ない空間であるのはいうまでもない。警備につく衛兵くらいのものだ。もちろん、皇帝とそれに伴うもの、あるいは講師も、ある程度入ることが出来る。

しかし、正妃や側室は、後宮にいるものから選ばれるのが通例化していたし、後宮の最上階は全て、側室用の部屋が並んでいるという。正妃は皇帝と同じ、今、サツキがいる本宮の北棟、最上階に正妃の部屋がある。

よってやはり後宮では、いわゆる後宮争いというものは、絶えず勃発しているらしいのだが、閉ざされた空間にはほど遠い環境なので、そうひどくなることはないようだ。

さらに北には9つの離宮があり、北にある最も大きい離宮には、前皇帝女帝が住んでいる。

あとの8つはそれぞれ、過去の皇帝たちが正妃のために建てたものである。

またそのうちの4つは、四季によって、過ごしやすいものとなるよう建築されており、別名「春の宮」「夏の宮」「秋の宮」「冬の宮」と呼ばれている。今は秋なので、北北東にある竜胆宮、別名秋の宮が過ごしやすい。

さて、流れる馬車たちの風景にしばし、目を奪われていたサツキであったが、お腹がぐうと鳴るのを聞き、そうだった。お昼ご飯と、とりあえず階下に降りてみることにした。

今日の服装は、半袖のシャツにサミエルパンツを履いている。さらに、それらをすっぽり覆う、白いローブを着用していた。黒髪だとなんだかんだ、うるさそうなので、髪の色を朱色に変えておいた。

一階まで降りると、どこからかいい匂いが漂ってきた。くんくんと鼻を鳴らしながらその匂いの元を辿っていく。たどり着いた先は、厨房だった。ところ狭しと人が動いていて、とても忙しそうである。その一人が廊下から中を覗いているサツキに気付いたが、何も言わずに自分の仕事に専念している。

どうやら、何かご飯を恵んでくれる様子ではないので、サツキは別の場所に行くことにする。

すぐ側にあつた扉を開けると、外に出た。先ほど見た光景が、サツキの前に広がっている。目の前に、2人乗りの馬車バスが止まり、一人の客が降りていった。その様子を見ていたサツキに、その馬車バスの御者が声をかけてきた。

「どこかに乗って行くかい？」

白髪のおじさんが、皺を深くし、笑いながらサツキに聞いてきた。そこでサツキは尋ねた。

「ご飯が食べられるところに行きたいんです」

するとおじさんはうん、と頷くと言った。

「東と西にそれぞれ騎士たちの食堂があるけど、どっちがいいかい？」

と聞かれた。

東は魔法騎士食堂で、西は武道騎士食堂らしい。主に彼らが使うので、そう呼ばれるようになっただけで、誰でも入れる食堂らしい。サツキが肉料理を食べたいと言ったので、おじさんは迷わず言った。

「なら、西だな。よし、パスはあるかい？」

と言われた。馬車バスの定期券なのだろう。サツキが持っていないと言つと、不思議そうな顔をした。

「みたところ新人みたいだけど、定期をもらいそこねたのかい？」

どうもサツキは王宮で働く人と間違えられているようだ。サツキは言った。

「パスがないと、乗れないの？」

と聞くと、おじさんは1回50リオで乗れるという。サツキはおじさんに50リオ支払った。乗車すると、おじさんはのんびりと走りながら、話し始めた。西の食堂までは、10分前後で着くらしい。

「しかし、パスは持っておいたほうがいいよ。小パスでも一月20リオンで、ここで働いているやつらには、半額は国が払ってくれるんだしさ。勤め場所によっては、ただで支給してくれるんだし。早くもらったほうがいいよ」

もつたいないからね、と言い、他には、西の食堂のおすすめメニューを教えてくれた。

値段は大体、80リオするらしい。これも職員なら食券が半額で買えるから、買ったほうがいいと、教えてくれた。

たまにその食券が横流しされるので、それを防ぐために、職員一人につき、食券は一月単位で60リオン分である30リオンまでしか買えないようになっていいるという。

食堂は毎日開いており、営業は朝の7時から夜の8時までだとい
う。注文は夜の7時までだそうだ。

西の食堂に着くと、サツキはおじさんにありがとう、とお礼を言
った。到着した馬車は休憩に入るようで、おじさんが馬の前にえさ
箱を置いている。

サツキは思った。帰りは歩いて帰ろう、と。時々、犬の散歩をし
ながらジョギングをしている人に軽く抜かされていくほど、馬の速
度は遅かったから。

いろいろ教えてくれたおじさんだったが、ここで働いていない
わたしにとっては、役に立つ情報はほぼ皆無に等しかったけど、お
じさん、ありがとう。

食堂の中に入ると、店員さんがすぐさま注文を聞いてきた。サツ
キは慌てて、看板に書かれていた「本日のランチA」に決める。7
0リオだった。支払うと店員は券をサツキに渡し、「1番に行って
ください」という。戸惑いながら、店内を見渡すと、なるほど、1
〜10番までのカウンターが西側に並んでいた。

サツキは1番と大きく上にかかれたカウンターまで行くと、「は
いよ、券ちょうだい」と言ったおばちゃんに券を渡した。おばちゃ
んは券を受け取ると、すでに、量産されていたランチAの食事が乗
ったトレイのひとつをサツキに渡した。席は自由に取ってよいみた
いなので、迷わず窓際を陣取る。

本日のランチAは、野菜サラダと、ひき肉とピーマンの炒め物と、餃子のようなものが入ったスープ。それに漬物とパンがついていた。肉は何の種類か分からないが、牛のような味がした。餃子のようなものの中には鶏肉のような塊が入っている。

サラダのドレッシングは、と周りを見回していると、一人の男が声をかけてきた。

「どうしたんだい？」

ドレッシングのことを聞くと、男はソース類はカウンターの脇にあるんだと教えてくれる。お礼を言って、サラダの器だけを持って、ドレッシングを取りに向かった。

かけおえてから、席に戻ってみると、サツキの席の隣に先ほどの男が座っており、サツキに向かって手招きをしている。男の前には、彼の食事のトレイらしきものが置かれている。

なんだか面倒くさいことになった、と思いながら、とにかく腹ごしらえをしようと思う。10代後半のその男は食べながらも、サツキに名前を聞いてきた。

「サツキちゃんっていうのかあ。可愛いね。新しく入ったの？」
と聞いてくる。

「いえ、ここに入ってきた訳じゃ・・・」

「あ、じゃあ、研究員かな。俺は第三騎士隊の」

「おいコラ、レナス」

新たに現れた二人組のひとりが、レナスの話をさえぎりながらサ

ツキたちの前の席に座った。トレイを置きながら、赤い髪の彼は言った。

「こんなところで、ナンパかあ？ 余裕だなあ」

その台詞にレナスはわたわたと手を振る。

「いえ、そういう訳では・・・」

呆れた目でレナスを見ていた青い瞳が、そのまま正面に座るサツキに向く。

「こいつ、ちゃんと、彼女いるからな。何言われたか知らねえが、あんま相手すんなよ」

「フ、フライ隊長！」

レナスが慌てて叫ぶ。サツキは隣の男を見た。彼女がいるのにナンパ、か。相手にしてなかったはずなのに、なんだかムカついた。

それから、サツキは目の前に置かれている、Bランチの魚のフライの方が、おいしそうだな、と思った。ん？ フライ？ フライ・・・サツキは気付いた。

「フライ隊長？ あの赤の砂塵の？」

すると、彼は「ん？ ああ、そうだけど？」と首を傾げる。

ロブくんから聞いた話だと、サツキの命の恩人である。ここはお礼を言わなければならぬ。

「先日、火事から助け出して頂いたそうで、ありがとうございます！」

と、座ったままで、ぺこりと軽くお辞儀をした。

すると、フライは不思議そうな顔をして、サツキを見ていた。

「ん？　んなことあったか？　ん、火事？」

フライは思い出した。火事といえば、エスタニア侯爵の館が燃えたとき、燃え盛る部屋から、一人の少女を救い出したことを。

そして、フライはサツキを見る。突然フライはくわっと目を見開いた。

「つて、お前、あん時の！　つてことは・・・サツキか？」

「はい、そうです」

「髪、赤え・・・じゃねえ、なんであんだここにいんだよ！？」

「お昼ご飯を食べにです」

「いや、そういう意味じゃなくつてさ。飯食いに何で外出してきたあ。部屋に食事なんて来んだろ？　今日、お前アル」

すると、フライは回りを見渡し、突然レナスに席を替われと言う。文句をいう彼と席を交換すると、サツキに小声で話し出した。

「お前、皇帝と会うんだろ？　今日。なのに、なんで、部屋で待ってねえ・・・」

そこまで言って彼は気付いた。

「絶対え探してる！ ほら、行くぞ！」

と、サツキの腕を掴むが、サツキがまだ食べ終わっていないという。自分も食事が最中だ。とりあえず、早く食べとせかしながら、二人はお昼を食べ終えた。

23：「有名なのは第四です」の巻

昼食の時間にはさすがに起きているだろうと、サツキの分もロブたちの部屋に運んでくれと、ロブは給仕担当の侍女に言った。侍女は了承し、部屋を出て行ったが、数分後に青い顔をして再び現れた。嫌な予感。

「サ、サツキ様がお部屋にいらっしやいません！」

ああ、どうしていつも彼女は、ただじっとしているという事が出来ないのだろう。いつもいつもいつもいつも……。

侍女の叫び声と共に、先に部屋を飛び出したモスリンドが、隣の部屋からがっくりとうな垂れて出てくるのを、廊下を出たロブの目に入ってきた。いなかったようだ。

「どうしてお嬢は、あつしを置いていきなさるんだ。いつもいつもいつもいつも……。」

モスリンドの気持ちが痛いほどに分かる。

ロブはもう慣れた様子で、周りの聞き込みから開始した。朝食の時間には、彼女は部屋で寝ていたそうだ。10時にも、清掃の人間がそれを確認している。それなら、いなくなつてからそう時間は経っていないようだ。まだ、この辺りにいるだろう。

それから、周囲の人に指示を出していく。それはもう、ベテラン捜索専門の探偵のように。

それから、ロブは結果を待つ間、307号室で自分の昼食を頂い

た。すると、目の前で同じように食べているモスリンドが恨むような目でロブを上目で睨んでいる。

「……なんで、そんなに落ち着いていやがんでい」

その言葉にロブは言った。

「腐っても、ここは王宮ですからね。不審な人物は入ってこれないでしょうし。もし、サツキさんが王宮の外まで行ってしまったのなら、それは大変ですけど。そこは衛兵が、人の出入りを厳重に見張っていますからね。まずありえないでしょう」

王宮の入り口は大きく3つある。

第一正門の向こうには行政地区が広がり、その先にある第二正門を通るとロックフォードの城下町になる。

西の通門は、主に騎兵隊の出勤の要になる大きな門があり、定期の荷馬車もこちらから通行する。

東にある大きな通門は、貴族専用門で、王宮で催しがあった場合など、多数の貴族が使用する日に使用される。普段は締め切りの門である。

「しかしなあ、お嬢は変な術を使う、お人だぜ？ 見張りなんか関係ないと思うがなあ」

その意見にはロブも賛成であるが、なんらかのトラブルに巻き込まれない限り、そんなことはしない、だろうと思う。

「……自信が無くなってきました」

その言葉に、モスリンドはがばつと部屋の外へと飛び出して行った。彼の前にあった皿は、見事なまでにキレイになっていたが。自分も落ち着かなくなり、結局昼食は食べかけのまま、捜索に加わろうと廊下へ出た。

そこへ、通路の先に見えた朱色の髪の人物がロブに声をかける。

「やっほう、ロブくん。お昼食べた？」

ロブはくると回れ右をして、食べかけの昼食を頂くことにした。椅子に座る。

むき身のエスカルゴが並んでいる器をくると回す。それをフォークでさし、口に運んだところで、消えた。

「……………サツキさん」

口をもぐもぐさせたサツキが答える。

「ん。やっぱり、こっちの方がウマーー!」

と感激した後、「これ、わたしの分、わたしの分だよね」とさっさと手をつけられていない食事の前に座る。

「……………お昼も食べずにどこに行っていたんですか」

ため息をひとつつき、別のものを食べ始めた（エスカルゴはサツキに占拠された）ロブは、せっせと口を動かしているサツキに聞いた。

「ん？ お昼ご飯は食べたよ。西の食堂で。ね、フライ」

ロブは、はっと扉の入り口から入ってくる赤髪の男を見た。

「ああ、がつつりな。……ってまだ食うのか!？」

呆れた顔のフライを見て、ロブは呻いた。

「……このたびは、フライ隊長にまたしてもご迷惑をおかけした
よじで」

深々と頭を下げるロブに、

「いいって、いいって。こうして何くんも起きなかったわけだし？
ま、俺も食堂でこいつに気付いた時は、ちと慌てたけどよ」

フライは笑いながらそう言つと、「んじゃ、俺、仕事あつから」と
部屋を出ていった。

黒髪のアビスが現れ、本日皇帝と面会する。どこから聞きつけた
のやら、今日は王宮に五大公爵全員が集まっていた。定例会議も全
員が揃そろつことの稀まれな彼らが、朝からちよろちよると、顔を出してく
るので、アルの眉は平時よりも縦皺しわが深くなっている。

五大公爵とは、ブライム家・アルバン家・フォンス家・バートリ

「家・コラルド家の王家ゆかりの公爵たちを総称している。以前は、ピッツリー家とイルフォイ家を含んだ七大公爵と呼ばれていたが、「アリエルの反乱」事件を引き起こしたとして、爵位を取り上げられ、関わったものはすべて処刑された。」

五大公爵は、各々（おのおの）が国の重要な大臣職についており、今はアルを皇帝と認めて行動しているが、いつ何時なごき反旗を翻すか分からない。彼らが結束すれば、アルを皇帝の座から引き摺り落とすことなど、造作も無い。

そんな訳で、彼らが無下には出来ない立場のアルであったが、そろそろ堪忍袋の緒が切れそうである。午前中の執務も滞っていた。その様子を見かねたロベルトが、執務室への一切の面会を禁止したので、少しはましになったのだが。

昼食は、隣の小食堂に持ってくるように伝えてある。一步外に出れば、誰かしらに捕まる可能性が大だ。

目の前にある書面には、最近、王宮内に猫が多数、住み着いているので対処してほしい、という事が書かれている。平和だ、と思う。だが、これの対処を皇帝に託されるあたり、どうなのだろうか。すでに書かれているサインを見る。

“アレハンドロ〃サンチェスタ〃ビド〃オステイン”

環境対策委員会の委員長だ。父親のアンドレが急死したことで、急遽、彼の後釜についたばかりの、若干19歳の若者である。未だ業務に混乱が生じているようだ。

アルはひとつため息をつく、考え始めた。王宮内の猫を捕獲し、

その飼い主を募集する。この辺りが妥当だろうに。

捕獲隊に近衛を使うのは、どうだろう。アルは衛兵たちが、猫を
追いかける姿を想像する。

「・・・」

(・・・隊の威信に関わるな、これは)

アルは、掃除夫、料理夫など、一般から捕獲隊を募集することに
した。見習いたちも参加するようにしよう。概算費用はアレハンド
ロに思案捻出させる。

そこまで考えたアルは、アレハンドロ・オスティン侯爵宛にその
旨を書いた書面を作成するよう、ロベルトに伝える。

そして、遅い昼食を取ることにした。

モスリンドは走っていた。ただただ走っていた。苦しい。だがも
うすぐ未知の世界が見えそうだ。それは、俗にランニングハイと呼
ばれる、神への領域だった。

単に脳に酸素がいかなくなり、苦しさを軽減させるために、分泌
されるアドレナリンのせいだったのだが、それは見ないふり。神の
領域、素晴らしく気持ちヨイらしい。

馬車バスに乗った人たちが、モスクンを見ては、さっと目を逸ら
す。関わってはならない。

「お嬢・・・お嬢・・・」と呟き、王宮内で、まるで浮きまくった

彼に、よつやっとピリリーっと笛の音がする。衛兵である。

「おら、俺はお嬢を探してるだけだ！ さっさと離しやがれ！」

ものすごい剣幕で衛兵を追い払おうとするモスリンドに、衛兵の応援が集まる。何人もの衛兵に取り押さえられながらも、彼は叫んだ。

「お嬢〜！ どこにいるんですか〜！ あっしはここでっせ〜〜
！！」

雲ひとつない青空の下、神の領域に辿り着けなかった彼のだみ声が、その爽やかな空気を消し去った。

「ん？ 今、モスくんの声、した？」

謁見のために、黒い膝丈のワンピースドレスに着替えさせられ、黒の靴下に黒い靴を履かされ、髪飾りまでも黒いカチューシャを付けられ、全身黒づくめにされたサツキは、

「まっくろくろすけでっておいで〜。あたしだよ！」

と歌い踊っていたが、突然動きを止めてロブに聞いた。

ロブはサツキの言葉に、初めてモスリンドがないことに気が付いた。どうりでいつもより騒がしくない訳だ。ロブは耳をすませた。「いえ、何も聞こえませんが」

モスリンドがないことに、たいして気にした様子もなく、時間となったので、二人は呼びに訪れた従者と共に、謁見の間へと向かう。(ひど)

廊下を歩いていると、サツキは、なあん、という声に、その声のしたほうへ首を向けた。

「あ、猫たん」

おいでおいでと体を屈めると、全身灰色の猫は、ぷいっとそっぽを向き、とことこと歩き出す。

「あ、待って」

サツキは第一匍匐^{だいいちほふく}前進の形を取り、猫の後を付いていった。

猫はサツキが後を追ってきたのに気付くと、さらに足を早めたが、サツキは撒かれることなく、猫についていく。

やがて屋内から屋外へと出たが、サツキは追跡を止めない。

そして猫はまるで、ここでおしまいとばかりに、サツキに再び「なあん」と鳴くと、目の前の塀をひよいと飛び越えた。

そうは問屋が卸しませんぜ、とサツキも塀を飛び越えた。

「よっ」

着地した光景に優作ばりの声を張り上げた。

「なんじゃこりゃ〜〜」

24：「猫たんパラダイス」の巻

サツキの辿り着いたそこには、無数の猫たん猫たん猫たんの嵐。大きいのやら小さいのやら、トラやらぶちやら三毛までいる。三毛猫はオスかしら、とちよつと考える。先程の猫はどこかしらと見渡すが、同じような灰色の猫が5匹はいる。しかもうそんなのはどうでもいい。

ここは猫たんパラダイス。手近の猫たんを、もふもふ触る。あゝ幸せ。

にゃおゝん
ふぎゃー！
にいにい

ここは猫たんとサツキだけの世界。
ほわわくと、浸っているとところに突然、人語が聞こえた。

「あれ？ 君、どこから入ったの？」

振り返るとそこには、黒いローブに身を包んだ、子供が立っている。

「え、うゝんと、そこから」

膝の上に猫。肩にも猫。頭の上にも猫。両脇にも猫を従えたサツキの指した扉を、子供は見た。軽く2メートルはある。

「ふーん」

と子供は首を傾げると、心持ち心配そうに、

「とにかく早くここから出た方がいいよ。お師匠さまが帰ってきたら大変だよ」

と、サツキに言った。まだ猫たちと戯れているサツキの背中を、この庭の唯一である扉の元へと押していく。

「ん？ なに？」

戸惑うサツキに、子供は早く早くとせかし、扉を開けた。

部屋の中はなんだか、ごちゃごちゃした空間だった。

本棚にしまいきれない本が無造作に積み重ねられ、いくつもの山を作っている。何かを書き記した紙が、そこらかしこに散らばっていた。棚という棚の引き出しは、きちんと閉められたものはひとつもない。いくつかはすでに物があふれ、閉められない状態だ。

中央にある大きな机の上には、いくつもの歪な形のビンが並んでおり、中には緑色や紫色、赤色などいろいろな色の液体がぶくぶくと泡を立てている。

そんな怪しげな雰囲気のある部屋には不似合いの、かわいらしいビンのリボンに結ばれたビンが、ちょこんと窓際の棚の上に置いてあった。中にはカラフルな紙で包まれたキャンディのようなものが入っている。

まさに足の踏み場もない状態の部屋を、器用に子供は歩いて、部

屋にあるもつひとつの扉にたどり着くと、サツキに手招きした。

「こつちこつち。ここから出られるから」

なんだかよく分からない内に、サツキはその子供に押し出されるように、その部屋から追い出された。石畳で作られた道を見渡す。どよよ、ここ。と、思ってから、はっと我にかえる。

「謁見の間ってどこ〜〜！」

まあ、いいか。探しにくるだろう、と、サツキは先程あの部屋からかすめ取っていたキャンディを口にした。手癖が悪いのが勇者というものである（え？）。小さいことは気にしない。それが、サツキ。

甘くておいしい。口の中でキャンディをころころと転がしながら、黒い服についた無数の猫の毛をぱつぱつと払う。落ちない。どうしよう。かなり真つ白。姑と化したロブくんが目の裏に浮かぶ。怖い、またあの大音量の音が襲ってくるよ。きっと来る、きっと来るよ。

「あ、あばあば、アバターー！！」

無意味に叫んでみた。
もちろん状況は変わらない。

何か使えるものは、とわたわた考える。青い猫型ロボットの如く、どうでも道具を「エネットくん」から取り出していく。ドライヤーがでてきた。おお、吹き飛ばすの？ いや、コンセントどこよ。と思ったら、団扇うちわです。扇いでみた。はい、意味ナシ。携帯髪コテが

でてきた。とりあえず、髪を巻いてみた。ああ、コロコロくんです、コロコロくんがでてきました。ガムテープより先に出てきました！

ウウイ〜ナア〜と、ゲーセンで勝った男子学生の如く、それを高々と振り上げた。と、そこでサツキは自分の異変に気付き、固まった。高々と振り上げたそれが、ことりと道端に落ちた。そして、叫んだ。

「んなあ~~~~お！」

1分後、一陣の風がひゅ〜つとその場に吹いた。

道端にドライヤーやらコロコロくんやら、無数の品が、散らばっていたが、そこにサツキの姿はなかった。

ここは謁見の間。アルフレッド皇帝は玉座okくわいに鎮座している。各大臣たちも、部屋の両側の壁の前に立ち、並んでいる。

「.....」

かれこれ、10分は経っていた。

先程まで隣にいたロベルトは異変を感じ、扉の外に出ていった。アルは椅子の肘掛に肘をつき、その手の甲にあごを乗せた。

眠くなってきた。

部屋の脇にある小さな扉が開き、ロベルトが戻ってきた。部屋の内部にいる人々が彼に注目する。ロベルトはその視線を浴びながら、アルに何事かを耳打ちする。それを聞くと、アルは席を立ち、周囲の人に声を上げた。

「黒髪のアビスは、本日来られないそうさ。よって、これにて解散とする」

がやがやと騒がしくなった室内から廊下へと出たアルは、背後についてくるロベルトに前を向いたまま言った。

「いつから、行方不明なんだ？」

「こちらの謁見の間に向かう途中で、ださうです」

となるとまだ30分は経っていない。

よくよく消えるやつだ。そうアルは思った。

大体、顔合わせなど、午前中にも出来たはずだ。大臣たちが騒いだために、大事になって、あのような謁見の形となった。

しかし、それを今さら問質といたたしても仕方がない。まずは、彼女の行方を探すことだ。アルは、王宮内に彼女が到着したあとも、『翳』を使っていなかったことを悔いた。

通路の奥に黒猫が見えた。先程あった報告の通りだ。本宮の中心まで、猫がいるのには驚いた。アルが行く方向にその黒猫はしつぽをぴんとたてて歩いていた。アルはその角を曲がった。

すると、先程の黒猫が、道に戻ってきた様子で、目の前に居た。アルを見た途端、その黒猫は全身の毛を逆立て固まった。かちんこ

ちんに固まっているその黒猫をなんなくアルは抱える。

数秒後、はつと我に返った様子の黒猫は、アルの腕の中で暴れたが、アルがその猫の背をなだめるように数回なでてやると、黒猫はおとなしくなった。

その頃、東宮内の一室で、サミエルは久々に会う旧友の下を訪れていた。名をシャーレイという。しかし、彼は周りにシャルルと呼べと行って止ま^ゃない。彼は、たいへんな変わり者であるが、それを拭い去る才能を持っていた。それゆえ現在は、魔導騎士としての任についている。もっぱら魔道具の研究に明け暮れているらしいが。

最近の研究成果について聞いてみると、彼は紅茶の入ったカップをゆるく揺らしながら嬉しそうな顔で、サミエルに顔を近づけ言った。

「聞いてくれるう？ もう少しなのよお。もう少しで完成なの！」「そうなんですか。それは良かったですね。それは一体、どのようなもののですか？・・・それから、もう少し顔を離してくれると、ありがたいのですが。」

サミエルは軽く顔を反らせながら言った。

「変身動物キャンディよ」

今一度いっておくが、彼は男性である。しかし、おねえ言葉なの

である。彼がいうには、熊やライオン、羊や狼、犬や猫になるキヤンディなのだそうだ。
サミエルは尋ねた。

「……その使用目的は何なのでしょう？」

すると彼は言う。

「いやあねえ、夢よ、単なる夢じゃない」

そうですか、と笑顔で答えつつも、サミエルは、密偵などに使えるかもしれないな、と全く夢の無いことを考えていた。

そこへ、ノックの音がした。中へ入ってきたのは、小さな子供だった。見習い魔導師であろう。

「お師匠さま」

子供は彼の元へと近づくとサミエルを窺いつつも、耳打ちした。彼は言った。

「それ、本当？ どうかに落ちこちてるんじゃないの？ ちゃんと探した？」

「いえ、実は……」

子供はごにょごにょと何かを伝える。

「ふん、じゃあ、その娘が怪しいわねえ。ちよつとその「探してきなさい」

「え〜〜〜〜！ 無理ですよ」

「だ〜いじょうぶよ。黒い髪の娘なんて、そうそついでいでしょう?」

その言葉にサミエルは、口をはさんだ。

「ちょっといいですか。その黒い髪の娘がどうしたんでしょうか」

「ああ、なんだかね、さっき言ってたキャンディ持ってっちゃったらしいのよ。このコがいうにはね、ひとつ数が足りないらしいの」

「動物変身キャンディが、ですか?」

「変身動物キャンディよ!」

どちらでもよいと思うのだが、妙に厳しい面で訂正するので、サミエルはそれに従った。

「すみません。変身動物キャンディですね」

すると、彼は満足げに頷く。

ふうとため息をつき、サミエルは子供に向かって聞いた。

「その娘の瞳は何色でしたか?」

「あ、え〜と・・・あ、黒、でした」

彼女だ。サミエルは思った。

子供から聞いた話では、2時頃の出来事だと言う。アルとの謁見はどうなったのだろうか。確かそのくらいの時間ではなかったか。

とりあえずサミエルは様子を見に行くことにし、部屋を後にした。

「え〜〜、もっとおしゃべりしましょうよう。今度、いつ会えるの〜〜〜もう!」

とうとう彼の声を背にして。

25：「黒猫の正体」の巻

「・・・なぜあなたがこんなところにいるんです」

ロブは呆れた目をして、モスリンドを見た。

モスリンドは王宮内の牢屋に入れられていた。

お嬢、お嬢、としか言わないモスが、やっと落ち着いた時に言った人物の名前がロブだったので、ロブがここに呼ばれることになった。

晴れて釈放されたモスリンドは大きく伸びをひとつすると、言った。

「で、お嬢は見つかったのか？」

「はい、あの後、自分で部屋に戻ってきて、昼食を頂いてました」

「そうかあ、そりゃよかった」

「しかし、今はまた行方不明です」

モスリンドの笑顔が固まった。

「ああ？ どういうことだ？」

「それは、僕が聞きたいです。あなたが牢屋の中でのほんとしていた間に、僕は大臣たちに詰め寄られて、針のむしろだったんですから！ ここでも頭を下げなきゃいけないし、今日だけで僕がどれだけ心身を削られ

「

だんだん大きくなるその声に、モスリンドは慌てて耳を押さえながら言った。

「わあつた、わあつた。悪かつたつて。大変だつたなあ！　んで、あてはあんのかよ？」

首を横に振るロブにモスリンドは言った。

「飯の匂いのあるところはどつだ、厨房とか食堂とか」

「すでに探しました」

「ん、じゃあ、鍛錬場なんかは？」

「探しました。いませんでした」

「馬屋は？」

「いませんでした」

「あ、じゃあ、あと、なんだ？　・・・部屋に戻つてんのかもなあ」

万策尽きたモスリンドはそう言った。

一番望みがなさそうな場所である。

アルは自室に戻ると、黒猫を机の上に乗せた。

ベルベットガウンを取り去り、椅子にかけている間に、猫はすたつと机から飛び降りる。

つかまえようと、伸ばした手はしつぽをするりと掠めただけだった。猫はそのまま、アルに擦り寄り、にゃあ、と一声鳴いた。

「ん？ 腹が減ったのか？」

期待に満ちたその黒目に、アルは軽く頭を撫でる。そして、猫の食事を用意するよう、従者に頼んだ。

ゆらゆらと黒猫はしっぽをくねらせている。食べ物がまだ無いと気付いたのか、黒猫は大きな欠伸あくびをひとつすると、ひよいとソファへ飛び乗り、そこで体を丸くした。

アルはそんな猫をじーっと見ていた。まるであのサツキのような黒を。

さて、彼女はどこへ行ったのやら。

ロブはサツキのあてがわれた客室をのぞいてみた。

「サツキさーん。いますかー。いたら返事してくださいー」

そういいながら、ロブはテーブルの下、クローゼットの中などをのぞいていく。

モスリンドも、天井の裏や、部屋のダクトの中まで調べる。

「やっぱり、いないみたいですね」

と、ロボは廊下へ出る。続いて部屋を出ようとしたモスリンドが、ふいに立ち止まった。

「どうしたんですか？」

と、ロボは尋ねた。

食事を食べ終えた黒猫は満足そうにまた、ソファに丸くなる。その様子にアルは軽く笑った。

「まるで、お前がこの部屋の主みたいだな」

そこへトントンとノックの音がした。扉から何が可笑おかしいのか、いつものようにくすくす笑いながらサミエルが入ってくる。

「やあ、アル。アビスには会えたのかな？」

なるほど、すでに知っているらしい彼に、アルは軽く首を振る。

「彼女、まだ見つからないんですよ。実は……」

とサミエルは先程シャルルから聞いた話をした。

「なので、もしかしたら、サツキさん、それを食べたかも……どうかしましたか？」

アルが黙ったまま、一点を見つめていることに気付いたサミエルは、アルに聞いた。

「いや・・・」

アルは口ごもったが、その視線の先には、ソファに寝転んでいる黒猫がいた。

二人の視線を感じた黒猫が閉じていた目をうつすらと開けた。徐々に近づいてくるサミエルに気付き、黒猫は、びっと飛び起きると、フーウツと威嚇をする。

「大丈夫ですよ、ちょっと調べるだけですからね・・・」

ふいに立ち止まったモスリンドは、

「・・・お嬢の匂いがする」

と呟き、くるりと再び部屋の中へと入る。
そして、突然、

「そこだー!!」

と叫ぶと、部屋の隅にあったロングカーテンをがばつと開けた。

そこにはサツキが隠れていた。

「ふぎゃー……!!!!」

サツキは叫ぶと、一瞬でまた、自分の身体をカーテンで包む。

「……一体、どうしたんですか。サツキさん」

モスリンドの嗅覚はどうなっているんだ、とロブは思いながら、サツキに尋ねる。

カーテンの向こうから、くぐもった声が聞こえる。

「……会いたくない。誰にも会いたくない。出ておいき」

ロブとモスリンドは顔を見合わせる。

「……みんなで、探していたんですよ。ロベルト様も顔を青くさ
れていました」

「お嬢……みんな、心配してたんですぜ？ 顔ぐれえ見せてくだ
せえよお……」

そんな二人の言葉にサツキは、小さな声で言った。

「二人とも、……笑わないかえ？」

笑っ？

何が笑えるのだろうか。不思議に思いながらも、ロブは言った。

「ええ、笑いませんよ」

それに対して、サツキはなおも確認する。

「ぜ〜っりたい、・・・笑わないニダ？」

「へえ、ぜ〜っりたい、笑いませんぜ？」

モスリンドの言葉に、やっともぞもぞとカーテンが動き出す。そして、そこから、サツキはおずおずと身体をのぞかせた。

「・・・」

「・・・」

何も笑うところは、ない。いつものサツキだった　　が。

「・・・お嬢、なして、頭だけ出さねえんです？」

サツキは頭部のみ、カーテンを巻きつけたままだった。

「うぐぐう・・・」

サツキは涙目で訴えた。

「まさか、まさか、こうなるなんて思わなかったの。ただ、おいし
そうだなあ〜って思っただけで・・・うう」

うぐぐぐとしているサツキにロブはため息をつき言った。

「とにかく、その頭も取ってください。それでは、そこから離れら
れないでしょう!」

いやだいやだと、うがうがするサツキの頭のカーテンを、ロブとモスリンドは二人がかりで、取り去った。

そして、二人は　。

アルの部屋に報告に来たロブは言った。

「と、いう訳で、部屋に戻っていました」

「そうか」

とアルは言った。

「で、彼女が会えないという理由は？」

アルがそう尋ねると、ロブは言いよどんだ。

「あー、えーと、実は、体の一部が、ですね。変形してまして」

その言葉にアルはぎょっとする。

「どづいづことだ？」

ロブは胸の前で両手の平を見せ、それを軽く振りながら言った。

「いえ、多分、一時的なものなので、夕食の時間までには戻るかと
・・・」

「・・・そうか。命に別状はないんだな」

「は、はい。もちろんです・・・ところで、サミエル様は、どうな
さったんですか？」

ロブが入室した時から、サミエルは熱心に『アンケア』をかけ続
けている。自身の身体に向けて。

ロブの言葉に、椅子に腰掛けていたサミエルが振り向いた。
鼻の上に二本、赤い筋が入っていた。

「・・・・・・・・それは、ふれないでくれるかな？」

サミエルはそれはそれは黒い笑顔を浮かべていた。
ロブは無言で、首を縦に振り続けた。

アルの膝の上で黒猫が、にゃーん、と鳴いた。

いやだいやだ。いやだ。

サツキは思った。こんな格好では魔王と対決など出来ない。魔王もいつもの力が発揮できないであろう。こんなサツキを相手にしては。

「そんなのフェアじゃない！」

大体、どこの洞窟も探検してないし、中ボスなんかも出てきてない。ザツシュを中ボスと考えるか？

サツキは首を振る。ダメだ、弱すぎる。ジーンが操るザク並みです。却下です。

それに勇者キッドをひとつも入手していないではないか。さびた剣も見つけてないぞ。

お姫さまだつて助けてないのに……。

ぶちぶち文句を言っているサツキを半ば引き摺るようにして、ロブは皇帝に指定された食堂へ着いた。ノックすると、短く「入れ」と声がした。

「失礼します」

「しっつれ〜しまっす」

「お邪魔するぜい」

上からロブ、サツキ、モスリンドの言葉の順に、室内へ踏み入る。サツキは黒のローブのフードをこれでもかと、顔に引っ張り下げながら、指示された席に座った。

サツキは、ちろつと上目で窺ってみる。左側のお誕生日席を。その人物を見てサツキは首を傾げた。

「あれ……?」

サツキの見た相手はふんわり笑った。蒼い目が細められる。

「また、会ったな」

サツキは目を丸くし、彼を見た。それから、向かいの席を見る。そこには、サミエルが座っている。やはり彼はくすくす笑いを見せている。

彼の隣にはフライがいた。フライは彼の笑みにサツキと同じく、目を丸くしている。

そのまた隣に、少しだけ口の端を上げたロベルトが座るところであつた。

サツキの隣には、ロブ、モスリンドが座っている。

ぐるりと見回す。後は、白いコックの服を着た給仕の人たちばかりである。

それから、また、サツキは、左側の蒼い瞳の彼に視線を戻す。

サツキの心臓はバクバク音を立てている。まさか、まさか……。

彼は口を開いた。

「……前に、約束した。名を教えると」

そういつて、彼は少し真面目な顔になり、サツキを見た。

「私の名は、アルフレッドⅡステファノⅡインペリアルⅡシスタ。

第三十二代シスル国皇帝だ」

威厳のある声がその部屋中に響いた。

「サツキ」アサギリ。あなたを歓迎する。黒髪のアビス、であつても・・・そうでなくとも」

サツキはただ固まっていた。アルの言う、「そうでなくとも」に籠められたその意味には気付かずに・・・。

魔王が蒼。魔王が蒼の人。そこで、はっとサツキは思い出した。

わたしはいつからクエストが魔王討伐だと思ったんだっけ？

ここに召喚されたとき、わたしは何て言われたっけ。

ふと、隣にいるロブくんを見る。

そう、彼が言った。確かに。まだ、小動物のようだった彼が、言った。

“あなたは皇帝の花嫁候補として召喚されたのです”

(.....)

そうだった。帰還不能イベ。帰還不能イベ発生してたんだった。

あらすじにも書いてあったじゃないか。なぜ、忘れてた、わたし。

魔王、もといアルフレッド皇帝を見る。

ああ、キラキラしてるよ。彼、なんだか、キラキラしてるよ。微笑んでるよ。にこにこしてるよ。決して、正面にいるサミエルみたいに、くすくすすじゃないよ。声は出さないうで、にこにこしてるよ。わたしもぶかぶか笑えばヨイの？ いつの間にやら、恋愛フラグ立つちゃってるよ。おい。

ああ、無理です。ムリ。だって元々恋愛体質じゃないのよ、わたし。なんたって、女勇者目指してたくらいだから、そこ、分かるでしょ？

1. ちら、とアルを見る。
 2. アルもサツキの視線に気付き、にこりと笑う。
 3. さつと目を逸らす。
 4. そして、ちら、とアルを見る。
- 2へ戻る。

ルーチンです。サブルーチン入りしました。
好感度 $x \parallel x + 1$ ですよ。

フローチャート式解。

s t a r t

“ サツキはアルを見たか？ ”

“ はい ” “ いいえ ” e n d ^

” アル、微笑む ”

s u b 1 呼出

“ サツキ目を逸らす ” s t a r t ^

e n d

s u b 1

“ アルの好感度に1足す ”

r e t u r n

ぐおおおおお。サツキ、見るんじゃない！

もう「65535」になるぞ。

今のうちにセーブしとかないと、別ルート入るには、最初からだよ、名前入力からになっちゃうよ！ スチルすかすかになるよ！

「「「「「「「「「「

そんな二人を生暖かい目で見ている人が3名おりました。

筆頭はサミエル。ついでロブくん。それからロベルトです。

フライは・・・彼まで顔が赤いです。意外と純情な野郎でした。

モスリンドは、そんな空気に気が付かずに、目の前の料理を食べまくっています。ある意味大物。

テーブルの整理が行われ、フロマージュが出てくる間に、サミエルは言った。

「ところで・・・サツキさん。フードは何故取られないんでしょうか？」

その言葉にサツキばかりか、ロブとモスリンドまでもがピシッと音がするくらいに固まった。

「え、え〜と。その、じ、実は、円形脱毛症が！」

「嘘ですね」

円形云々の言葉にアルが驚く間もなく、サミエルは否定の言葉を口にする。

「う」

「・・・耳、あるんですね？」
「うが」

「先程から、何やらもぞもぞしていますが・・・尾もついているんでしょうか？」

「うぎゅう」

観念した様子でサツキは俯いた。
その様子にサミエルはくすくす笑いながら言った。

「ささ、取ってみせてください」

サツキはゆっくりとフードを取り去った。
皆が、サツキの頭の上にあるものに注目した。

耐え切れずに、フライが呟いた。

「それ・・・なんの耳？」

期待した三角の耳ではなく、丸い耳だった。熊にしては色が灰色だし、大きさもかなりでかい。
サツキは涙目で言った。

「・・・ネズミでちゅ」

それに答えるようにサツキの背後から、細く長い灰色のしっぽが飛び出した。

サミエルがサツキの食べたキャンディの製作者を知っているということで、サミエルはサツキをシャルルの元へと連れていった。

「いや〜ん、サミエルう。また来てくれたの〜！ 一日に二回も会えるなんてもう、さ〜いごう！」

彼が、再び出会えたサミエルに抱きついたその勢いに、サツキは一步後退した。

サミエルの肩越しにサツキの姿を捉えたシャルルは、サミエルに身体をひっぺがされながら低い声で言った。

「あら、誰、あんた。・・・その耳、クマさん？ タヌキさん？」

「・・・ネズミさんでちゅ」

一通りの説明をした後、シャルルは言った。

「ん〜、半獣の薬ねえ〜・・・それはそれで、ドリーミイだわあ」

でも。ちらりとサツキを見てシャルルは言う。

「それは、さすがに萌え要素がなさすぎね」

いえ、萌えとかいいです。早く人間になりたいだけです。またまた、ベム。

シャルルがいうことには、明日の朝には戻ってるでしょ、と投げやりな回答。ありがとう。

それから、サツキはシャルルにもじもじしながら言った。

「あの、わたし、そういうの、大丈夫ですから」

首を傾げる二人。

「わたし、応援します！ 陰ながら、全力で！ 愛に性別など関係ありません！」

両手を胸の前でつなぎ、祈るようにサツキは言った。キラキラした瞳で。

その言葉に二人は真反対の反応を見せた。

「サ、サツキさん？ 何をおっしゃっているんですか？」

「んま〜〜！！ サツキちゃん！ 分かる？ 分かってくれらう？」

きやいきやい手を取り合い、飛び跳ねる二人の乙女(?)を見ながら、サミエルはため息をついた。

次の日、なんだか疲れ果てているサミエルは、フライと共に廊下を歩いている。

眉を顰め、腕を組んだフライが口を開いた。

「・・・なあ、サミエル。聞いていいか？」

「なんですか」

「いつから、アルのやつ、サツキにあんななんだ？」

昨日のアルの様子に驚いている彼だった。

アルとは長年の付き合いだが、彼があんな風に笑った記憶がなかった。

「いつからって・・・そうですね。多分、最初から、じゃないですか？」

「最初、っていつだよ」

「さあ？ 出会ったのがいつなのか。私は知りませんから」

「じゃ、なんだ、その・・・ひと、ひと」

「一目惚れ、ですか？」

「そう、それってことか？」

「そうですね。なにせ、黒髪のアビスですから」

「ん？ どういう意味だ？」

サミエルはため息をついた。

「少しは勉強してください。文献に載っていますよ」

「文献に？」

「ええ。一字一句間違えずには言えませんが、確かこんな感じだったと思います」

“ 汝、アビスの指輪を欲するもの ”
“ 汝、その指輪を手にししもの ”
“ 汝、アビスを手にするもの ”
“ 汝、其れ故、王となるも ”
“ 汝、アビスを欲するものとなり ”
“ すべてはアビスのために ”
“ すべてはそのシグマのために ”
“ アビスにあるシグマのために ”

まるで詠うように、サミエルは言葉を紡いだ。

ひとたびの静寂がおとずれた。

フライは首を捻った。

「ん、悪い。全く意味分かんね」

「つまりですね、アビスの指輪というのは、シスル国の皇帝が継承しているのです。アルが時々つけているのを見たことはありませんか？」

「んん？」

「・・・まあ、本当に時々ですから。それも魔力のあるものにはしか、見えないのかも知れませんが・・・とにかく、アルは指輪を持っている、としてください。いいですね？」

「おお」

「指輪を持っている人は、王の資格があります。しかし、それゆえアビス、つまり黒髪黒目の人物を欲するようになる、という訳です」

フライは上を向き、少し考えたあとに言った。

「・・・その指輪を持つてると、黒髪が好きになるってことか？」

「まあ、そういうことですね」

「それって、変じゃね？人の気持ちがあるんで変わる訳か？」

「実際に魔道具の中にも惚れ薬がありますよ。効果は非常に短時間ですが」

「ん？じゃあ、アルがその指輪を外したら、その効果は無くなるってことか？」

サミエルはにっこりと笑った。

「でしようね」

「うえ、あっさり言うなあ」

呆れた顔のフライを見ながら、サミエルは思った。

(そうではないかもしれませんが・・・)

フライは少し俯きながら言った。

「・・・で、シグマって？」

サミエルは言った。

「分かりません」

「だあ、分かんねえのかよ」

「大体、大昔の文献ですからね。・・・単なる伝承に過ぎませんよ」
そこで、サミエルはどこか遠くを見て言った。

「アルが彼女に惹かれたことは事実ですが、結局、それが定められたことなのか、そうでないのかは・・・誰にも分からない、ということですよ」

ぼろぼろに朽ちた建物の中に突如として小さな白い光の点が現れた。

それは、徐々に大きくなり、やがて、消えた。

その光が消えた場所に、降り立った人物は周りを見渡す。

風に吹かれ、やや乱れたその髪を鬱陶しげに振り払い、彼女は呟いた。

「いる訳・・・ないわね」

彼女は、右手に装着している腕輪を左手で包み込むように触る。

「ずいぶん遠いわね。まったく・・・」

ひとつため息をつくとき、彼女は空を見上げ、無数の草がのぞく石畳の上を歩き出した。

27：「美味しゅうございますう」の巻

「わたくしは、メアリー＝ハドソンと申します」

「わたしは、ハンナ＝スコットです」

サツキの目の前で二人の娘がサツキにお辞儀をした。

それに合わせて、サツキも上目使いのままお辞儀を返した。

二人はサツキの専属侍女なのだそうだ。

メアリーは、何でも侍女頭お墨付きの筆頭侍女なのだそうで、胡桃色の髪を綺麗に一つに纏め上げて、どこから見ても隙の無い格好であった。姿勢もやや逸らした形で、あごを心持ち上にあげている。男爵家の娘なのだそうだ。

対するハンナは、少し不安げにサツキを見ている。魔道医師を指していたのだが、何の因果か、このたびサツキの侍女として配属された。本人も混乱の最中にいる。彼女の職務は、主にサツキのスケジュール管理や伝達だという。

二人のほかに、さらに三人の侍女見習いがついている。彼女らは、後宮に通う貴族の娘たちで、日中のほとんどは、行儀作法を習っているのだそうだ。その中の空いた時間、サツキの部屋の掃除や食事の支度などをするのだという。それも、ひとつの勉強なのだそうだ。

そう、サツキは本日、後宮入りした。

そういわれると、なんだか大奥的な、夜のお勤めがあるのかしら

ん、と思うのだが、この国では、そういったことはないのだという。単に女子寮に入った。そんな感じだ。唯一違うのは、お付きの侍女がいる、という所だろうか。

「サツキ様には本日より、淑女になるための勉強をしていただきませう」

みんな立ってて、まるで朝の朝礼みたいだなと、ぼけーっと周りを見渡しているサツキに向かって、メアリーは言った。

「勉強？」

サツキは訝しげにメアリーを見た。

「はい。作法はもちろんのこと、ダンス、裁縫、料理、お茶、音楽、歴史、読み書き……」

延々続くメアリーの言葉にサツキは、顔が歪んでいく。

「ちよちよちよ、ちよい！ 教えてあげましょか？ 私の現スキルレベル。」

料理	3
踊り	7
音楽	6
作法	3

ついでに掃除は7です。

へい、全部一桁わっしょいですよ。
裁縫とお茶なんてそんなスキルはありませんし？

わたしは勇者なんです。そこんどこ、分かっています？
ほら、騎士隊入隊させる。フライのところでもいいから。
ええ仕事しまっせ。適材適所って知ってます？

「　　ということ、まずはテーブルマナーについてです。行き
ましようか」

メアリーはにこりと笑った。
それはまるで悪魔の笑いに見えた。サツキにとっては。

アルは呆れた顔で、執務室の窓際にあるソファを陣取っているサ
ツキの顔を見た。

「　　で、さっそく逃げてきたのか」

「う・・・だってね、だってね、その先生っていうのがね、むきー
つとか、うきやーつとか、いっぱい叫ぶんだよね。もう、いやんな
っちゃうよお」

テーブルマナーの担当の先生は、確か温厚で知られている婦人だ
ったはずだ。

一体彼女に何をしたのやら、とサツキを見てアルは思った。

「それにね、あの、言ったと思うんだけど、わたし、間違いなんだよね」

またか。とアルは思った。

サツキが言うには、召喚自体が間違이었다と言っているのだ。

自分は「黒髪のアビス」とやらとは全く関係がない。己の世界に戻るのだという。

アルはそんなサツキを見やる、と、立ち上がり、サツキの傍に立つ。

「無理だな。諦めろ」

アルを凝視してサツキは言った。

「な、何で!？」

アルは、サツキの座っているソファの背もたれに両手を置いた。サツキを挟んだその場所に。

そして、不敵に笑った。

「俺がそう決めたからだ」

そう言って、固まっているサツキの黒髪を軽く梳き、ひと房すくうとその髪に口づけを落とす。

ひとたび気を緩めれば、その蒼い瞳に吸い込まれそうになるのをぐっと押さえ、サツキは言った。

「……ひとつ、聞きたいんだけど」

「なんだ？」

「アルは、わたしのこと、好きなの？」

その言葉に、アルは細めていた目を大きく開き、首を傾げた。

「好き、ではないな」

その言葉にサツキはくわっと目を見開いた。

「す、好きでは、な、な」

「お前は？」

眉を寄せているサツキにアルが尋ねる。

「は？」

「俺のこと、好きか？」

サツキは半ば叫びながら、言った。

「す、好きじゃないです！」

その答えにアルは何故か笑った。そして言う。

「なら、好きになれ」

そして、サツキの手を持ち、その手の甲にゆっくりと唇を付けた。そのまま、蒼い瞳がサツキを見つめている。

「わ、わたくし、急用を思い出しましたわ!」

と、突然サツキはアルの手を払いのけて立ち上がると、お茶を用意し運んできたばかりのロベルトを突き飛ばす勢いで、退室していった。

「あれ、サツキ様。お茶は・・・?」

「いらんがな!」

お盆を持ったまま一回転したロベルトは、そんなサツキの後姿を見送ったが、アルに向き直った。彼はご満悦の様子で、執務席に座るところだった。

執務室から一歩足を踏み出したところで、サツキは速攻ハンナに拉致され、次の授業に連れて行かれた。

「え、サツキ様が逃亡なさったおかげで、刺繍の先生は帰られました。次の授業は、ダンスマナーです。ダンスの練習ではなく、全体に共通するマナーとお考えください」

廊下を歩きながら、ハンナは右手にサツキの襟首を後ろから掴み、左手で黒い手帳を器用に開いて、それを読み上げている。

ちらつとのぞいて見ると、今日のサツキのスケジュールが左のページに分刻みで書かれている。「刺繍：アイボリー先生」という文字には大きくバツが書かれていた。

そして、右のページに、

“ダンスマナー”

“練習じゃない”

“全体に共通する”

という走り書きが書かれている。

左側の今の時間には「ダンスマナー：ブルームス先生」と書かれていた。

次の授業の担当はブルームスという人らしい。

その部屋に入ると、中にはすでに5人あまりの人がおり、各々（おのおの）が窓際に置いてある椅子に座っている。どうやら皆、ダンスマナーを授業を受ける人たちのようだ。

ハンナはすつと壁際に立ち、もう一人の侍女らしき人に軽く会釈をしていた。

彼女たちは、サツキの姿を見ると、互いにひそひそと話し合っている。サツキはなんだか居心地が悪くなり、ハンナをちらりと見る。ハンナはただ、サツキも椅子に座れというジェスチャーをした。

サツキは、とりあえず、人があまり集まっていない場所を選んで座った。

それから間もなくして、扉が開いた。

「どうも、みなさん。本日のダンスマナー教室へようこそ。わたく

し、講師を務めますシャルル＝ブルームスですわ！」

声高らかに宣言しながら、踊るように部屋に入ってきた人物は、半獣キャンディ開発者のシャルルであった。

すぐに、シャルルはサツキに気付き声を上げた。

「あら、あらあら。アビスちゃんじゃないのよ〜！」

「サツキっす」

よかった。シャルルが先生か。これなら何とかなるかもしれない。サツキはほっとした。

10分後。

「ちっが〜〜う！ 手はこごう！ 腰はこのまま！」

「ふぎ〜！」

シャルルはサツキの身体をマリオネットのように扱い、彼女の姿勢を直す。

「そして、そのまま優雅に礼をする！ ちがうわ！ 早すぎ〜〜
！ もっと、羽のようにたおやかによ！ はい、元に戻す！」

そして、地獄の言葉を吐く。

「もう一回、最初から!」

精根尽き果てた様子のサツキに、

「それは、わたくしもぜひ参加したかったですわ」

とマリアンヌが言った。

「え、でも、マリアはダンスマナーなんてもう、教わる必要ないでしょ?」

テーブルにつつぷしたままでサツキが言う。

「ええ、勿論ですわ。わたくし、マナーというマナーは、全て完璧でしてよ?」

「なら、なんで?」

「サツキさんのその、困窮するお姿を拝見したいからに決まってるじゃないですの」

いやだわあ、とマリアは言った。

淑女とはなんたるや? とサツキは考えていた。

ここは後宮内の中庭。

今は三時のお茶の時間である。

あちらこちらにお茶会用のテーブルがセッティングされ、皆が思い

思いの場所でお茶を楽しんでいる。

十代のかわいらしい笑い声が、日の当たる庭のあちらこちらで聞こえる。

隣のテーブルでは三人の娘たちが、マリアンヌにおすそ分けしてもらったケーキを食べ、「美味おいしゅうございます」と口をそろえて言っている。

「それよりも！」

マリアは手にしたカップを置きながらサツキに言った。

「まさか、あなたがあの黒髪のアビス様だなんて、わたくし驚いてしまいましたわ！」

サツキは今、黒い髪のまままで生活している。ハンナに言われたためだ。なんでも、黒髪のアビス＝皇帝陛下の花嫁の存在を、周りに知らしめるためだそうだ。んなの、サツキにや関係ない。それより黒髪でいることで起きる、この突き刺さるような痛い視線をどうにかしてほしい。

お茶の時間だ休憩だとサツキが中庭に現れた途端、マリアンヌと遭遇し、彼女のテーブルに強制連行された。

「間違いだし。アビスなんて、そんなの知らないし」

ぶつぶつ言うサツキにマリアは横目で見た。

「あら、あなた、黒髪のアビス様でいることが不服なのかしら？」

「不服？ 不服とかそういうんじゃないかって、単に違っていていうだけなの」

どうして誰も分かってくれないのかなあ。この世界の住人は、どんなにサツキが召喚間違いだって言うてるのに聞いてくれやしない。

「そうよね。アルフレッド様の花嫁候補ですもの。不服なんてある筈ありませんわよね」

ほら、聞いてくれない。

「そうですわあ」

と、同じテーブルについている娘たちも、マリアンヌの言葉に同意を示す。

その様子に、サツキは聞いた。

「ん、何？ アルってそんなに人気あんの？」

「んまあ、アルフレッド様ですわ。軽々しく「ア、アル」だなんてお呼びにならないでくださいな！」

アルというだけで顔を赤くするマリアンヌを、サツキは正直かわいいなあと思った。

思わず、

「マリアは可愛いのう」

と愛でると、マリアンヌはさらに顔を赤くした。ただし、今度は怒ったから故であったが。

「サツキさん、あなた、わたくしを馬鹿にしてらっしゃるの!？」

そんなマリアンもやっぱり可愛いと思ったが、これ以上怒られたくないのでその想いは心にしまっておいた。

「で、えーと、アルフレッド様？ は人気あるの？」

「もちろんですわ！」

即答するマリアンだったが、周囲の反応はそれぞれであった。勿論、ええはいとマリアに同調する声は上げるのだが、中には顔が引き攣っているものもいる。

そんな表情の中のひとりが言った。

「確かにアルフレッド様は、とてもお目麗しい方ですが、少々近寄りたがい雰囲気がありますわよね。それがなければ、とても素敵なお男性なのですけれども」

「そうですねえ。もう少しお顔の表情を崩していただけると、こちらとしても接しやすいというか」

ひとりが口火を切ったことにより、次々にアルに対しての愚痴が飛び出す。

「もう少し、女性に対して優しい態度を、お取りになってくださるとよいのですけれど」

「そうですね。この間もわたくし廊下をすれ違ったのですけれど、その時の視線といたら、凍えるようでしたわ。まさに氷の君そのものでした」

そして意外にもマリアンまでもが、それに同調するように頷き、

「まあ、それがあの方の魅力のひとつでもありましてよ」

と、言った。

一月前ひつじきまえに、アビス召喚宣言をする前には、彼の周りはそれは大変だったのだそうだ。

毎日のように、適齡の娘を持つ貴族からの晩餐会の招待状が届き、見合い写真も部屋ひとつが埋まるほどに届いたという。

あげくの果てには、夜中に寢所に忍び込む娘まで現れる始末であった。

「勿論、わたくしはそのような下衆げすな行いは致しませんでしたわよ」とマリアン又は誇らしげに言った。

サツキは周りにいた何人かが俯いたのが気になった。まさかのカマサ？

そして、お茶の時間もそろそろ終わりとなったところで、マリアン又は立ち上がり、サツキを指差した。

「いいこと。わたくし、アルフレッド様のお后を諦めた訳ではございませんから。候補はあくまでも候補、対等な立場ですわ！ わたくし、あなたなどに負けませんわよ！」

と、高らかにライバル宣言をした。
サツキは言った。

「だから、召喚間違いなんだってばよ……」

すでに、言いたいことを言い終えたマリアン又は、取り巻きと共にこの場を去っていた。

秋空の下、サツキは木枯しに吹かれていた。

28：「勇者、現る」の巻

サツキは、料理に奮闘していた。

食材の切り方、下ごしらえ、調理時間、火の加減。調味料の量も、先生に言われた通りにやった。

レシピの通りに作った筈だ。

盛り付けの時に、サツキは思った。

（なんで、こうなっちゃうかなあ？）

ドンつと音を立ててテーブルにサツキ作の皿が置かれた時、食味係として常連の三人娘は、凍りついた。

本日の品は3品。

オードブルとスープと魚料理だ。

パンは先生が焼いたものが配られた。

そのパンの茶色以外、彼女たちのテーブルの上は、すべてが「黒」に統一されていた。

さすがはアビスである。

スープと魚料理、液体と固体の区別も付かないほど真っ黒である。かろうじて、皿の形で判別が出来る代物しろものだった。

三人娘の一番太った体型の彼女が、勇気を出して、魚らしきものに手を伸ばしたが、口に入れて聞こえた音は「ガリ」だった。

まるで石を砕いたかのような音であった。

三人娘はその後、懸命な判断でパンのみを完食した。

「お、美味しゅうございましたあ」

三人娘は声をそろえて言い、その場を逃げるように去った。

「で、これをもってきてくださった訳ですか？」

「うん。だって、もったいなくて。ロブくんたちは、いらないうって
いうし」

アルとロベルトの前に、先ほどの料理で余ったものが並べられている。

「……このタールのようなものは、何でしょうか」

「あー、それはねー、ほうれん草とトマトのスープだよ」

ささ、召し上がれと、サツキは二人の前にすすりいと差し出す。

成程、とロベルトは思った。

先程ロブと廊下ですれ違ったのだが、何も言わずにロベルトに胃腸薬を渡してくれた。

彼女には前科があるようだ。

アルは黙ってその物体たちを凝視していた。

若干、額に汗がにじんでいる。

長いため息をついた。

「よし」

覚悟が出来たらしい。

彼は、その黒いタールをスプーンですくい、口に運んだ。

その様子を、ロベルトは固唾を飲んで見ていた。

サツキもキラキラした目で見ていた。

どんな困難も、その愛で超えられるのか。

アルの喉仏が上下に動いた。

モスリンドはそのままお嬢付きの警護員になっていた。

しかし後宮内は、モスリンドの容貌がアウトとなり、出入りが禁止になってしまった。

なので、お嬢が後宮の外へ出るときだけの警護要員である。

もしくは、お嬢がいなくなった時の捜索隊員の隊長の任についている。

空いている時間は、馬車の修理や荷の上げ下ろしを手伝っている。

これでも、あらくれ者からの、どえらい出世である。

しかしサツキの中では、モスリンドはあくまでも下僕なのだが。

今、モスリンドはアルフレッドの執務室前にいる。二人の衛兵と共に。

そして、その叫び声に慌てて室内へと突入した。

「なんだー！ー！ これはー！ー！ー！」

モスリンドはその光景に固まった。衛兵たちも固まった。どうすればいいのだろうか。

アルがサツキの首を締め上げながら、宙に浮かべて振っている。サツキが柱時計の針のように横に揺れている。ぶらんぶらんと揺れている。

「おおくれえくをおく、殺す気がー！ー！」

竜兵会の会長ぶりの言い方です。

あ、サツキの魂が口から出ていつています。

その白い魂がだんだん、サツキ自身の形を取りました。にっこり笑っています。

「お、お嬢・・・・・・・・」

サツキの魂はモスリンドに手を振ります。

頭には輪っかが、背中には羽が生えています。

そして、サツキの魂はどんどん空へ高く舞い上がり

。

サツキはひとり海を見ていました。
ザッパーンザパーンと波が打ち寄せては返します。

あと数秒、アルが正気に戻るのが遅かったら、サツキは異世界のこの地でその生涯を終えるところでした。

貴重な体験でした。幽体離脱です。太った双子も真っ青です。

無事、生還を果たしたサツキでしたが、呆然と立ち尽くすアルの腹に、強烈な膝蹴りを入れました。
そして、

「アルのヴォア〜カ〜〜!!!」

と言って、執務室を飛び出しました。
走って走って走りました。

ついた先は、海でした。

決して迷子ではありません。

元々、海が目的地だったので、多分。

体育座りの格好で、身体を丸めます。
膝の上にあごをガンガンと乗せます。

「うう・・・」

がむばった。わたし、がんばったのに。
食材も全部みじん切りにしなくなったのに。
小麦粉とベビーパウダーは違うものって知ったのに。
かくし味ってのは、履き古した靴下じゃないんだよって、知ったの
に。

サツキの座る砂浜に、もうひとつの影が現れた。

サツキはちらりと、右側に立ったその影の人物を見た。
だから、左にふいと顔を背ける。

その人物はサツキの背面で屈みこみ、左からサツキの顔をのぞく。
だから、右にふいと顔を背ける。

ふわりと抱きしめられる。

「……じめん」

アルはサツキの肩口に顔を埋めて呟いた。

「うぐうぐぐ……一所懸命作ったのに」
「うん」

「料理レベルも一気に5にあがったのに」
「……うん」

「作法レベルだつて4になつたんだもん」
「うん、頑張つたな」

大きな手がサツキの頭をぐりぐり撫でる。
まだ少しふくれた顔で、サツキは正面の海を見た。

キラキラと海は輝いていた。
サツキはぼつりと呟いた。

「あのね」
「ん？」

「アルの瞳は、海の蒼みたい」

アルは海を見た。

王領に面するシスラビス湾だ。

シスル国の皇族はほとんどが、紫の瞳をしている。
アルも姉もそうだった。

しかし、初代の皇帝は蒼い瞳をしていた。
そしてたまに皇族に、蒼い瞳を有したものが生まれる。
彼らはすべて、皇帝となった。

アルはこの瞳のために、次代の皇帝として、周囲から熱い期待を
寄せられていた。

その期待が重過ぎると感じることもあった。
ゆえに、アルは自分のこの蒼い瞳が好きではなかった。
だが、彼女がそう例えるのは、嫌ではなかった。

アルは自分が例えられたその海を眺めた。

「海の、蒼か」

「うん」

二人はしばらくそのまま海を眺めていた。

そして立ち上がり、身体についた砂を軽くはたくと、どちらからともなく手を繋いで歩き出した。

・
・
・
・

サツキは、あ、と言った。

そして、アルを見上げながら、にこにこ笑った。

「あのね、明日はシヨコラケーキを作るんだって」

「・・・そうか」

ロベルトは、執務机に向かい頬杖をついて、熱心に書き物をしているアルを見た。

どうやら、何かの魔方陣を描いているようだ。

机の上には何冊もの術式関連の本が積み重ねられている。

「どちらかを選ぶしかないか……。味覚を変えるか、人体に影響の無い物質に変えるか……」

アルは、くるくると術式ペンを回し始める。

「無表情を使えば……。耐えられるだろうか……。ここに付け加えたらどうだ？」

ペンがさらさらと走る。緑の炎が上がり、アルの書いた文字が宙に浮かび消えた。

それを見てアルは呟いた。

「駄目か……」

ロベルトは時計を見た。

もうすぐ夜の八時になる。

まだ終わりそうもないアルを残して、夜食の用意をするために、彼は静かに隣の部屋に消えた。

その日、アルフレッドの執務室では、ランプの灯が消えることはなかった。

「うん、うまい」

アルはにっこりと笑った。

「ホント？」

サツキは手を叩き喜んだ。

やったやったと飛び跳ねるサツキを横目に、男たちは目の前に置かれていた物体を見た。

またもや色は黒の物体。

シヨコラケーキということなので、元々黒っぽいっちゃ黒っぽい。色目もいい、としよう。まだ、耐えられる。

だが何故ペースト状なのだろう？

ここは、宇宙だったか？

彼らは思った。

()(勇者アルフレッド現る・・・)()

勝ち誇った顔のアルフレッドは、己の腹を撫でた。

アルの腹には、彼の作成した魔除札まよけのふたが貼られている。

彼が昨日、徹夜までした努力は実を結んだらしい。

ベッドの上で久々に「エネットくん」でステータス画面を閲覧し

ていたサツキは、いつもの如く笑いをもらしていた。

みてこれキタコレ作法レベル二桁の大台に乗りました！ がんばったね〜良かったね〜。踊りスキルもあと1上がれば同タイです。料理スキルはなぜか5で停止してるけど、知らんがな。ひ〜ひっぴと引き笑いしておこう。知らぬ間に同化スキルが10も上がってるし。脱走し続けた甲斐があったってものだ。

「おろ？」

クエスト確認が出来る。あ〜一応、クエスト受けた形になっているのか、どれどれ、とボタンを押す。現れました。

『タスカニス世界シスル国、皇帝の花嫁候補になること』

ああ、この異世界ってタスカニスっていいのか。初めて知りましたよ。

その下に詳しい内容が表示されています。スクロールつと。

「……………え」

寝転んでいたサツキは起き上がり、姿勢を正してその文を読んでいた。

29：「ならば寄付じゃ！」の巻

サツキは寢室から居間へと続く扉を開け、そしてそのまま閉めた。もう一度、ゆっくり開いてみる。

小さく開けたその隙間からは、最初に見た光景がそのまま存在していた。

(うおう、またですか)

そこにはメアリーとハンナが互いに腕を組み、互いに火花を散らせている。

両者、睨みあつたまま、微動だにしません。

他の侍女見習いの娘たちは、部屋の隅に固まって震えています。

お、ゴングの音が聞こえました。

カーン！

「だから、何がいけないんですか？ 私は思ったままを言っただけですけど」

「ですから、まずそのお話しの方が間違っていると、わたくしは言ってるのですけど。おわかりになりませんか？」

「ん？ 何？ なにが間違ってるの？」

「あなたが、そのような口調でお話しするものだから、サツキ様もなかなか口調を改めないのだと、わたくし思いますわ」

「言っとくけどね、今どきそんな「わたくし」なんて話し方、一部の人がしか使ってないし。私は私の思う範囲で、サツキにもきちん

礼儀は教えてるつもりです」

「主を呼び捨てになさるところから、間違ってますわ！」

「サツキがそう呼べて言ったんだもの。私だって外ではきちんとサマ付けで呼んでます！」

「どこで誰が聞いているか、お分かりにならないでしょう！」

「だーかーらー！ 私が言ってるのは、この部屋の中でだけでも、堅苦しい話し方はやめようよって事なの！」

「ですから、それが駄目だと言っているのです！」

「だから、何で駄目なのよ！」

あ、ループ入りました。

サツキは二人の間で、ハ技：ゴングの鐘を使った。サツキの合わせた手の平から、カーンという音が響いた。

「はい、そこまで！ 判定！ ハ技：ドラムロール（両膝を叩く）
……両者、引き分け！」

ハ技：ゴングの鐘三回。

「ハ技：マイクエコー」以上を持ちまして、貴族出身メアリース平民出身ハンナの対決を終了致します！ ご来場の皆さん、ありがとうございました。ありがとうございます。」

「サツキ（さん）！ ふざけないで（ください）！」「」

「ひゃい」

時々二人は、こんな風に意見をぶつからせているが、二人の仲は決して悪くない。むしろ良い方だ。

だが、サツキの教育方針に対して、二人とも何かしらの思いがあるようで、しばし、このように火花を散らす。

二人ともサツキを思っている行動なので、サツキはどちらの味方にもつけないでいた。

一番の被害者は、この騒動に居合わせた侍女見習いたちだと思う。基本メアリーはサツキに細々（こまごま）した諸作法や、貴族たちの上下関係など、処世術に必要な事を教えてくれる。

対するハンナは事務能力が主な仕事で、サツキの体調管理や時間配分に気を配っている。

元々、二人の仕事内容が違うのだから、それぞれの考え方が違うのは当然だと思うのだが、サツキは上手く二人にそれを伝えられないでいた。

なので、サツキは二人に今日も言う。

「人類、皆兄弟。仲直りをしましょう！ はい、握手！」

二人は互いに顔を背けながら、サツキに無理やり握手をさせられた。

王宮には、大きな国営図書館がある。

城下にも図書館はあり、そちらの方が蔵書数は多い。

だが貴重な本や、より専門的な文書は、国営図書館に置かれているので、そういった職業についている者ほど、その利用率は高い。

その図書館は東の宮に併設されており、一般人にも開放されている。

一部の書物は禁書となっており、その書物らは本宮の図書室に置かれている。

皇帝の許可なしでは、その図書室には入室することが出来ないの
で、常に何重もの魔術が施され、侵入者を拒んでいる。

本日、ロベルトはその図書室の蔵書整理をしにやってきた。

そして、彼は中に入り、まず呟いた。

「・・・何故、いるのでしょうか」

ロベルトは振り返った。入ってきた扉に異常は感じられなかった。
ため息をつき、本を読みふけているその人物に声をかける。

「サツキさん、どうやってこの場所へ？」

らせん状の階段に座っているサツキは、本からは目を離さずに上を
指差した。

「んんん？ 天井から？」

ロベルトは首ごと見上げた。丸い天井は、ああ、確かに何も術を施していない。

その中央から長いフックロープが一本揺れていた。

確か、上の階には円卓場があったはずだ。

一応、円卓場も入室しやすいとはいえないのだが。

どうやら、彼女には関係ないらしい。

図書室の警備方法を、再度検討する必要がある。

そう考えたロベルトはサツキに聞いた。

「何を調べているのですか？」

「ん〜、黒髪のアビスについて」

ロベルトはサツキの軽く言ったその言葉に、危うく手にしていたフ
ァイルを落としそうになった。

そんなロベルトにサツキはページを捲りながら問う。

「アルってさ、指輪なんてしてたっけ？」

ああ、彼女は知ってしまったようだ。

ロベルトは頷き言った。

「ええ、普段は幻術で隠していますが。常に嵌めております」
「ふうん、そっか」

何かを納得したように、サツキは頷いた。

「……シグマ、の意味は分かりましたか？」

逆にロベルトは質問した。

サツキは初めて顔を上げ、ロベルトを見た。

「うん。まあ、ね」

サツキはそう言って笑った。

その悲しげな微笑みにロベルトは、胸に不安を覚えてサツキに言った。

「どうか、信じてください」

「それはアルに言ってあげてよ」

そういうと、サツキは手にした本を棚にしまった。

そして、垂れ下がっているロープを掴む。

「それじゃ〜ね〜」

「サ、サツキさん！」

ロベルトの叫び声と共に、ロープは縮んでいき、サツキを天井へと導き、彼女はその上へと消えていった。

ロベルトは、ずり落ちた眼鏡を直しながら呟いた。

「……何故、普通に扉から出ない」

いつものように執務室で執務を行っていたアルフレッドは、ふと窓の外が騒がしいことに気が付いた。

立ち上がり、窓から覗いて見ると、人々が何やら西側へ走っている。特に危険な感じではなく、皆の表情は、楽しげである。料理人、騎士見習いの姿や、侍女、魔導師の姿も見える。大人から子供まで、皆、何か急いだ様子で走っている。その様子を見ながら、アルはロベルトに聞いた。

「今日は、闘技場で大会が開かれていたか？」

その声にロベルトは手にしていた本から顔を上げると、首を傾げた。

「いいえ。そのような事は聞いておりませんが」

そう言っつて、ロベルトもアルと同じように窓から外を見ると「確認して参ります」と言っつて部屋を出ていった。

うおー！ という大歓声が闘技場で沸き起こった。その歓声の対象となっているのは、やはりというべきか、サツキの姿であった。サツキの隣にいるモスリンドが声を張り上げる。

「さあさあ、次の挑戦者は誰だー！ー！ー！」

それは単に西の騎士食堂で始まった。

昼飯を食べていたサツキが、食堂のテーブルの真ん中で、騎士たちが腕相撲をしているのを目に留めたところからだった。

その騎士たちをサツキが倒していく様子さまに、周囲に人だかりが出来てしまった。食堂の営業妨害となるとして、なら場所を移動すりゃあいい、というフライの声と共に闘技場へとそれは場所を移して行われた。調子に乗ったモスリンドが、参加料を取り始め、まるで一大イベントになってしまったのだった。

サツキとフライとモスリンドの三人は、正座をさせられていた。ロベルトによって。

「という事で、賭け金は没収致します」

「「「うえ〜〜〜〜!!」「」」

参加費だけだったのなら、ロベルトも目をつむった。しかし観客たちと賭けをし始めたのがいけなかった。負けた客が騒ぎ出し、それがロベルトの耳に入った。

参加料と賭けの儲けは、しめて7343リオン、ベールに換算すると734万3千ベールだった。

「すべて、国庫に入れますので。それでよろしいですね？」

「ならば寄付じゃ！ 寄付をするがよい！」

サツキが異議を申し立てる。

「どちらに寄付を？」

「王宮猫たん保護団体じゃ！」

以前王宮内に繁殖した、猫を守るうの会が発足されていた。それが「王宮猫たん保護団体」という名称で活動している。ちなみに会長はシャルル、副会長はサツキである。

「……ご自身が関わっている団体なので、却下です」

ロベルトは冷たく言い放った。

「猫たん……猫たん……」

「俺の剣、おニユーの剣が……」

「お嬢……お嬢への貢物プレゼントが……」

それぞれが、それぞれの思いを呟いた。

30：「天使の微笑み少女」の巻

それは突然やってきた。

白い馬に跨り、空を飛んでやってきた。

その黒髪をなびかせて。

皆が見守る中、その白馬は王宮広場に優雅に降り立った。

その馬に跨る人物に、サツキは気付いた。

サツキのよく知る人物、それは、サツキの実の姉であるヤヨイだった。

目を丸くして驚いているサツキに向かって、ヤヨイはにっこりと笑って言った。

「サツキ、迎えにきたわよ」

「・・・ヤ、ヤヨイ姉^{ねえ}？」

迎えにきた？

馬から降りるとヤヨイは、周りの人に優雅にお辞儀をした。

その様子に、つられて何人かがお辞儀を返している。

「わたくし、天使の微笑み少女、ヤヨイ。アサギリと申します。どうぞよろしくお願い致します」

ヤヨイの姿に周囲の人々は、ほっと、ため息を漏らした。だれが見ても可憐な黒髪の乙女であった。

本物の「黒髪のアビス」が現れた瞬間だと、誰もが思った。ただ、数人を除いては。

改めて、謁見の間に通されたヤヨイ姉は、玉座にいるアルに向かって言った。

「改めまして、アルフレッド様。妹のサツキがお世話になったよう
で、感謝致します」

「いや」

アルはヤヨイ姉を見ている。

じっと見ている。

何かを探すように。

その視線に、サツキは何だか胸の奥が短くつきつと痛んだ。
それをごまかす様に、周りを見渡す。

各大臣たちは、皆、ヤヨイ姉に釘付けの様子だ。

それはそうだ。なんたって、ヤヨイ姉なのだから。

もう一度二人を見てみた。

二人は見つめ合っている。

どうしよう、早くこの場から出たい。

早く、早く。

短い口調で返したアルに付け足すように、ロベルトが口を添える。

「ヤヨイ様がお気になさる必要はありません。どうぞ、ゆるりとお過すごしください」

そこでヤヨイ姉は、この度の召喚間違いを説明した。

本当は姉が召喚されるのだったと。

サツキを元の世界に還します、と。

その言葉はサツキの心を重くした。

まるで、サツキの存在自体が間違いだと言われているみたいで。

サツキはヤヨイ姉のいつになく強い口調を聞いていたが、それも理解していた。

姉が、本当の召喚者なのだとすると、このクエストは赤紙クエストなのだ。

強制召喚なのだ。

ヤヨイ姉が自ら進んで選択したものではないのだ。

サツキは考える。

今一度、自分の本分を思い出すべきだ。

わたしは何故ここにいる？

わたしは召喚間違いでここにいる。

よって、わたしはここにいる理由はない。

早く自分の世界に還るのだ。

わたしの目的、それは自分の世界に還ること。

周囲ががやがやと騒がしくなった。サツキが我に返った時には、謁見の時間は終わっており、アルフレッドの姿はもうそこには無かった。

隣では、そんなサツキを、微笑みを浮かべたヤヨイ姉が見ていた。

ヤヨイ姉は、本宮の客室に今日は泊まることになった。
サツキが最初に使用していた部屋だった。

サツキは後宮に戻るべく、足を運んだ。
その間、護衛についていたモスリンドが何かを言いたそうにサツキを何度も窺っていたが、その口が開かれることはなかった。

部屋に入ると、メアリーとハンナのまるで腫れ物を触るような扱
いが、逆に辛く感じる。その空気にやはり一度外に出ようとした時
に、来客が訪れた。マリアン又だった。

「一体、どういうことですか？　あなたのお姉さまが、黒髪のアビ
スだというじゃないの！」

部屋に通されるなり、両手を腰にあてて彼女は言った。

「どつって……。最初から言ったとおりなんだけど……」

サツキは、どうしてマリアン又が怒っているのか分からずに、戸
惑いながらもそう答えた。

その答えに彼女は眉を顰める。

「あなたは、それでよろしいのですか？」

「どづいつ事？」

「ですから、あなたは、このまま陛下の後候補から降りておしまいになるのよ。それでよろしいのかしらと、わたくし、聞いておりますわ」

「だから、元々わたしは、候補でも何でもなかったんだつてば」

そして、サツキはまるで囁くように言った。

「・・・黒髪のアビスなんかじゃないんだから」

それに対してマリアンヌは、形の良い眉を器用に片方だけ上げた。

「わたくしも、黒髪のアビス様ではございませんことよ」

そして、彼女はあごをつんと上に向けける。

「けれども、わたくしは諦めなどしておりませんわ。あなたは、そのおつもりの方ですけれど」

サツキはマリアンヌのその言葉を、目を丸くして聞いていた。

(諦める？ わたし、諦めようとしてるの？ 何を？)

黒髪のアビスであることを？

皇帝の花嫁候補を？

この世界に留まることを？

アルのことを？

ヤヨイとの顔合わせを兼ねた会食が、サツキのとき同様に親しいものだけで行われた。

それが終わった後に、フライはサミエルの部屋にいた。

「なんかさ、もやもやすんだよな。こつ、胸の辺りが。お前はどのよ？」

フライが眉をしかめて言う。

その言葉にサミエルは目を伏せる。

「そうですね。間違いだった。本物が来た……では済ませたくはないですね」

そして、サミエルはフライを見た。

「あなたは、ヤヨイ様のことをどう思いましたか」

「ん？ あゝなんつか、こつ、美人だよな」

「それから？」

「んゝ、がさつじゃねえし、あれなら、即皇室に入っても誰にも文句言われねえよな。あいつみたいに」

と、フライは少し笑った。

「そうですね。作法も完璧で、仕草も優美な方でした。まさに、伝承に描かれた黒髪のアビスそのものに感じるほど」

サミエルのその言い方に、長年の付き合いのあるフライは引っかけりを感じ、口の端を上げて言った。

「なぐんか、言いたそうじゃんか？」

サミエルはにっこりと笑った。

「ええ、あまりに完璧すぎますから」

それに、と彼は続けた。

「アルの笑顔がありませんね。・・・まるで何かを警戒するよう感じました」

(昔からアルは結構、勘が鋭いんですよ。もちろん、僕もですけど。・・・フライの感じている、そのもやもやというのも、多分同じところからでしょうね)

二人は目を合わせると、互いに軽く口の端を上げた。

そして、互いに学生時代のようなと思った。

そう思えるほどその頃と、その表情は変わっていなかったから。

だから、二人はこの話題を終わりにすることにした。

言わなくても分かる。そういうことだ。

次の日、サツキはヤヨイに共に昼食を、と呼ばれた。

部屋に行くと、ヤヨイ姉は少し緊張した顔でサツキを出迎えた。

給仕が食事の支度をし、部屋から出ると、ヤヨイは口を開きこつ
言った。

「サツキ、私のクエスト内容がひとつ増えたの。あなたを元の世界
に還すこと。このクエストが」

サツキはヤヨイの言葉に続けていった。

「しかも赤紙クエスト」

疑問ではなく断定の形で。

ヤヨイはそれに頷いた。

サツキは思った。

ならば、何も迷うことは無い。

このまま還るのだ。いや、還らなくてはならない。

サツキの選択肢は残ってなかった。

そして、無言でサツキにヤヨイの装着している右手の腕輪を向け
た。

サツキは左手に嵌^はめているヤヨイとよく似たその腕輪を重ねる。
眩しい光が部屋を包んだ。

ピピッと音が鳴り、サツキのクエスト画面が「任務完了」に書き換えられる。

これでいつでも元の世界に還ることが出来るようになった。

「わたし、還るから」

サツキはあっさりと短い言葉で、ロブとモスリンドにそう告げた。それに対してロブは眉を顰めて言った。

「そう、決められたんですか」
「うん」

サツキのその決意を固めた返事を聞き、ロブはため息をついた。

「なら、僕があなたに言うべき言葉はひとつ、ですね」
そういって、ロブは言った。

「今まで本当にお世話になりました。あちらに行ってもお元気で
とでも言ううと思いましたが？」

にこりとロブは笑う。口の端をびくびくさせながら。

「・・・大体あなたはいつもいつもいつも、一人で勝手に決めて勝手に行動して、毎回毎回僕らを困らせて！それで、はい還

ります。ああ、そうですか、と！ 最後ま、であ、あなたは僕らを、振り回すだ、け振り回し、て！」

途中から、ロブは涙が喉につまって声が途切れる。

しかし、そこはロブくん。ポリユームのつまみがMaxに近づいていきます。さらに、モスクンの「お嬢くくくお嬢くくく！」のノイズが加わり、辺りに騒音が撒き散らされることになった。

サツキはその様子をにこにこ笑って見ていた。少し目尻に涙を溜めて。 〽技：耳栓〽を使いつつ。

この光景も、見納めである。

普段と同じように、アルは執務室で本日回されてきた書類の処理をしている。

時折、何かに気を取られたように、その動きは止まるが、しばらくするとまた動きだす。

眉には深い皺しわが刻まれたままだ。

その様子にロベルトは何も言わず、彼もまた自分の仕事を黙々とこなしていた。

助言など出来る訳がない。

ロベルト自身でさえ、決めかねているのだから。

アルは皇帝である。そこには皇帝であるべき職務が付いて回る。それは、ロベルトが認識している以上に、彼の方が知っていることだ。

アルは、生まれ落ちたその日から、皇帝になるべく育ってきたのだから。

それでも、ロベルトは迷っていた。

このままでいいのか、と。

シスル国の皇帝が、降臨したアビスを選択することは国の繁栄に繋がる。

だから、これが最善なのだ、頭では思う。

皇帝の参謀として、常に国の事を念頭に置かねばならない。

ロベルトの眉にも深い皺が刻まれていたが、彼は気付かなかった。

そんな二人の様子を気に留めることなく、彼女は窓辺のソファに腰掛け、優雅にお茶を飲んでいる。

その表情は少し人形じみてはいたが。

ちら、とその黒い瞳が動き、アルの姿を捉える。

その視線は、彼の赤みがかかった金髪から、眉をよせたその整った顔を通して、その逞しい腕をもさらに下がり、彼の右手で止まった。正確にはその、小指に。

彼女は目を細め、それを確かめる。

そして、また優雅に手にしたお茶を飲みつつ、微笑んだ。

ふと、その視線に気付き顔をヤヨイに向けたアルだったが、途端

に何かを感じ、音を立てながら椅子から立ち上がった。

ロベルトは驚き「どうしましたか？」と声をかけたが、反対に、全く慌てた様子の無いヤヨイは微笑みながら言った。

「あら、気付きました？」

と一言だけ。

ヤヨイをしばし凝視した後、部屋を飛び出したアルの背中にヤヨイは言った。

「そんなに急いでも、間に合う訳がありませんのに」

ねえ？ とヤヨイは呆然としているロベルトに語りかけた。

闘技場の中央にふたつの人影があつた。

アルの全力で駆けていたその足が緩ゆるまった。

分かつていた。

ヤヨイの言葉を聞くまでもなく、彼自身の何かがちんとそれを感じていたから。

ふたつの人影　　ロブとモスリンドは、この距離からでも泣いていることが分かった。

ロブは己の黒いローブの右腕を、自分の顔にこすり付けていたし、モスリンドは両手両膝について号泣していたから。

間に合わなかった。

言葉を交わすことすら出来なかった。

その身をこの瞳めに映すことも叶かなわなかった。

彼女は自分の世界に還った。彼を残して。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9862w/>

黒髪のアビス

2011年10月13日10時21分発行